右門捕物帖

完本

三津味木々佑

第七輯

始

特231
985

右門捕物帖

三津味木々佐

第七輯

明正堂

目次

死人風呂　一
首つり五人男　四九
左り刺しの七首　一一〇
子持ち硯　一五二
血の降る部屋　一九五
山雀美人影繪　二四五

死人風呂

一

その第三十三番手柄です。

朝ごとに江戸は深い霧でした……。

これが降りるやうになると秋が近い。秋が近づくと江戸の町に景物が決つて二つふえる。角兵衛獅子に柳原お馬場の朝稽古、その二ツです。

トウトウトウトウ……、ハイヨウハイヨウ……、とまだ起き切らぬ朝の靜かな大氣を破ツて、霧を掻き分け街を越え乍ら、朝ごとに稽古の聲が柳原お馬場一帶につゞくのでした。

ドコドコドンドン、ヒユウヒヨロヒヨロと、朝ごとにまた角兵衛獅子の囃子がその柳原お馬場の近くの旅籠町からわびしく流れ出して、西に東に江戸一圓へ散らばツて行くのでした。

丁日は呉服橋北町御番所の面々、半日は數寄屋橋南町御番所詰めの面々が、秋口のひと月間い

ち日おきにこのお馬場へやッて來て、朝のうちの半刻づつ馬術を練るならはしなのです。丁度この日がまた、數寄屋橋側の稽古日の半日なのでした。隨ッて南町御番所名代の傳六が來ないといふ筈はない。來ればまたもの怖ぢしないその傳六が、ぼんやりと指をくはへてゐる筈もないのです。

『一太刀、二槍、三鎖り鎌、四弓、五馬の六泳ぎと言ッてね、總じて武藝といふものは何によらず恥しがッてゐると上達しねえものなんだ。えへ……。誰も見ちやゐないね。このまにちよッと乘ッてやるかな。え？　旦那。あば敬の大將が來たら內證で知らしておくんなさいよ。ほかの者に見られる分にや構はねえが、あいつに見られちやこれからさきおいらを馬鹿にするからね』

『されないやうに上手に乘ッたらいゝぢやないかよ』

『さうはいかねえんだ。おいらの馬術は何流にもねえ流儀なんだからね。――ほらよ、くろ、黑！　おとなしくしてゐるんだよ、名人が乘るんだから、ヒンヒン跳ねちやいけねえぜ』

馬ぐらゐ乘り手を見分けるものはない。ましてや乘り手が傳六とあッては、黑も南町御番所名代のこの剽輕者をよく知ッてゐるとみえて、長い顏をさらにぬうと長くのばして笑ッたまゝ動かうともしないのです。

『ちえッ、笑ひごッちやねえんですよ旦那。何とか動くやうにお呪ひしておくんなさいよ』

『何流にもない流儀とやらでお駈け遊ばすさ。おいらに賴むより馬に賴みな。泣かずにひとりでお遊び』

ひらりと乘ると馬は葦毛の逸物、手綱さばきは八條流、見る見るうちに右門の姿は、深い霧を縫ひ乍らお馬場をまッすぐ向うへ矢のやうに遠のきました。

ぐるりと廻ッて歸ッて見ると、傳六はまだ黑としきりに押問答をしてゐる最中なのです。

『ご生だから走ッておくれよ。何が氣に入らなくてそんなに長い顏をしてゐるんだ』

『……』

『返事をしなよ。返事を！　無理な賴みをしてゐるんぢやねえんだ。おまへは走るが商賣ぢやねえか、眞似ごとでもいゝからちよッくら走ッてくんなよ』

刹那。

黑が轡を逆立てたかと見るまにバカバカとすさまじい勢ひで走り出しました。

『お、お、おい！　な、な、なにをするんだ。笑、笑、笑談ぢやねえよ！　本氣で走らなくたッていゝんだよ！　眞似ごとでいゝんだ！　よしなよ！　よしなよ！』

必死に叫んだが今さら止まる筈はない。傳六ごときがそもそも馬に乗ッたのが物の間違ひなのです。

『一大事だ、一大事だ！　旦那々々、止めておくんなさいよ。傳六の一大事なんだ。早く何とかしておくんなさいよ！』

『うまい。うまい。腰つきがなかなか見事だぞ』

『まづくたッていゝですよ！　はやし立てりや黒めがよけい圖に乘ッて走るぢやムんせんか。よしなよ！　よしなよ！　くろ！　おまへもあんまり薄情ぢやねえか！　分ッたよ分ッたよ！　そんなにむきになッて走らなくともおまへの走れるのはもう分ッたんだ。よしなッてたらよさねえかよ！』

なだめすかしても聞かばこそ、黒は必死に獅噛みついてゐる傳六を背中に乘せて、ひた走りに走りつづけました。お馬場は川に沿ッて細長く七八丁つゞいてゐるのです。

びゆうびゆうと唸りを立てんばかりに走りつゞけて、その細長いお馬場の行き止まりまであと もう一二町と思はれるあたりまで駈けすゝんだとき、突然、ちよこちよこと横から飛び出した影がある。

十一二ぐらゐの少年なのです。しかも手には長い竹竿を持ッてゐるのでした。飛び出してさッと馬の行く手に立ち塞がると、舌を卷きたい程にも機轉の利いた少年なのでした。バカバカと矢のやうに駈け近づいて來る馬の鼻さきめがけて、手にしてゐた青竹をひうひうと打ちふりました。

『な、な、何にするんだ。どきな！　どきな！　蹴飛ばされたら危ねえぢやねえか！』

『をぢさんこそ危ないよ。馬を止めてやるんだ』

『馬鹿言ふない！　おらに止まらねえものがおまへなんぞに止められてたまるもんか！　そら！　そら！　危ねえぢやねえかよ』

その聲の終らぬうちに、ぴたりと馬が止まッたから不思議です。

『へえ……。偉いね。チンビラ。止まッたね』

『止まッたらう。をぢさんみたいな素人が乘るもんぢやないよ、危ないからね……』

『何言やがるんでえ。おらが素人だか玄人だか、おまへ知らねえぢやねえかよ』

『知ッてるよ。をぢさんは傳六のをぢさんだらう』

『いやなことを言ふね。どうしておらが傳六のをぢさんだッてえことを知ッてるんだい』

『知ッてるから知ッてるんだよ。だから……だから……』

ふいッと顔を伏せると、不思議な少年は突然ぽろぽろと涙をおとし乍ら、しくしく泣き出しました。おどろいたのは傳六です。

『ど、ど、どうしたんだ。氣味のわるい子だな。おまへは。おらが傳六のをぢさんだからッて、何も泣くこたアねえぢやねえかよ』

『悲しいんだ。悲しから泣くんだ。早く父を助けておくれよ』

『なに、父？　父がどうしたといふんだ』

『母やんが、母やんがな、けさ風呂桶の中で死んでたんだ。だから、だから、父が下手人だと言ッてお縄にされたんだよ』

『さあいけねえ！　偉いことになりやがッたな。いッてえ誰がお縄にしたんだ』

『顔にいッぱい穴のあるお役人だよ』

『なにッあば敬か！　畜生ッ、さあいけねえぞ！　さあいけねえぞ！　いッてえそりやいつのことなんだ』

『たッた今なんだよ。けさ起きてみると母やんがいつ誰に殺されたか死んでたんだ。だから家ぢう大騒ぎになッて、近所の辻番所へ知らせにいッたら、どこできいたか顔に穴のあるそのお役人

がすぐ這入ッて來てな、ふたことみことと威張ッておいて、いきなり父に縄をかけて了ッたんだ。父は、おらの父はそんな鬼の父ぢやねえ。だから、だから、をぢさんたちに助けて貰はうと思ッて一生懸命にこゝへ飛んで來たんだよ』

『どうしてまたをぢさんたちがこゝにゐるのを知ッてたんだ』

『だッて今日は半日ぢやないか。半日には右門のをぢさんがお馬のお稽古に來る筈だから、來れば傳六のをぢさんも叱られ叱られ一緒に來てゐるだらうと思ッたんだ。初めはをぢさんが誰だか分らなかッたけれど、馬が下手だッたから下手なら屹度傳六のをぢさんだらうと氣がついて、走るのを止めてやッたんだよ』

『あけすけと餘分なことを言ふねえ。今日は下手だが上手な日だッてゐるんだ。旦那々々。旦那はどこですかい！　一大事ですよ。今度は懸け値のねえ一大事なんだ。旦那はをらんですかい！』

『やかましいや。こゝにひとりをるぢやないか。よく目をあけてみろい』

いつのまにかうしろへやッて來て、ちやんともう何もかもきいたと見えるのです。じろりと少年の姿を一見したかと見るまに忽ち右門流が飛び出しました。

『おまへ、うちは米屋だな』

『あゝさうだよ。そこの細川長門守さまのお屋敷向うの増屋ッていふ米屋だよ』
『女の姉妹があるな』
『あゝ妹がひとりあるよ』
『へへえ。おどろいたもんだね――』
珍らしいことではないのに、忽ちお株を初めたのは傳六です。
『毎度のことだから感心したくねえんだが、ちッと呆れましたね。目に何か仕掛けがあるんですかい』
『當りめえだ。南蠻渡來切支丹の伴天連玉ッてえいふ目玉が仕掛けてあるんだよ。子供の着物をよくみろい。米の籾が方々についてゐるぢやねえか。足もよくみろい。女の子の草履を履いもゐるぢやねえか。だから米屋の伜で女の姉妹があるだらうと星を指したのに何の不思議があるんだ。米つきバッタのやうな恰好をして下手な馬を稽古するひまがあッたら、目の掃除でもやんな。右門のをぢさん行ッてやるぞ、先へ飛んでおいき！』
ひゆうと鞭を鳴らして、馬をお馬場の向うへ追ひ返へしておくと、まッしぐらに駈け出した少年を道案内に立て乍ら、その場に米屋へ向ひました。

二

道のりにして四丁とはない。小さな米屋だが米屋に相違はないのです。騒ぎをきゝつけたか店の表は駈け集ッた町内の者たちがわいわいと犇めき合ッてゐる最中でした。
その人込みを掻き分けて少年は、鐵砲玉のやうに家の中へ駈け込むと、けたゝましく叫びました。
『綾ちやん綾ちやん！　右門のをぢさんを連れて來たよ、もう大丈夫だぜ。そこを退いちやいかんぞ！　しッかり乘ッかッてゐなよ！』
聲のあとからむッつりとして這入ッていッた名人がひよいとのぞくと、不思議な光景が目にうつりました。綾ちやんと呼ばれたその子が妹に違ひない。八ッか九ッになるかならずの愛くるしいその小娘が風呂桶のうへに乘ッかッて、しッかりと蓋を押へ乍ら、軀の子のやうにバタバタと足を動かしてゐるのです。そのかたはらに嶽四郎が父親の纏尻をとッて、目をむき乍ら手下の直九、彌太のふたりを口ぎたなく叱りつけてゐる最中なのでした。
『そんな小娘ひとり持てあましてなにこッた！　おろせ！　おろせ！　早くおろさんか！』

『口で言ふやうにこうたやすくは降りんですよ、なんしろ死に物狂ひになつてゐるんだからね。こら早くおりんか！　言ふことをきかんと痛い目に會ふぞ！』

足を持たうとすれば足で蹴飛ばし、手を持たうとすれば手で引ッ掻いて、小娘は必死の抵抗をしてゐるのです。

右門のまなこが事の不審に當然のごとく光りました。

『さかんにおやりぢやな』

『なにッ。出しや張り者が參ッたな。折角だがこのアナは敬四郎がひと足先ぢや。指一本觸れさせぬぞ。邪魔ぢや。どかッしやい』

『お邪魔なら退きもいたしませうが、これはいッたい何の眞似でムる』

『要らぬ御節介ぢやわい！』

『いゝえ、要らぬお節介ぢやムんせんよ。綾坊、右門のをぢさんがお越しぢや。もうどきな』

きいて、横から口を入れたのは、縛めをうけてゐる父親です。

『ようお越し下さいました。子供はいぢらしいものでムんす。あッしが下手人でもないのに下手人だとこの通りお縄にされましたんで、旦那様を呼んで來るまでは手をつけさせぬ。始末もさせ

ぬと敬四郎旦那を手古摺せてゐるんでムります。その風呂桶の中が――』

『死骸か！』

『さうでムんす。家内めが變り果てた姿になッてをります……。よく見檢べ下さいまし』

近寄る前に小娘は、賢しくも桶の上から這ひおりると、右門の狂はぬ檢證を一刻も早く待ちのぞむかのやうに、重い蓋を懸命にとりのけました。

『賢こいことでありますのう。では見せて貰ひませう』

歩みよッて、靜かにのぞいてみると、なるほど女の死體がまだ湯氣の立ちのぼつてゐる桶の中に、ぐッたりと沈んでゐるのです。

その不氣味さ！　氣味のわるさ！　血は一滴もない。死因の分らぬ脂ぎッた中肥りの女の死體が、ぶよんとした生白い色をたゝへて湯の中に沈んでゐるのです。

年は三十ぐらゐ。

乳がある。

しかし乳首は黑くない。處女のやうに引きしまッてゐるのです。子供を産んだことのない證據でした。首に白粉が見える。

洗ッた筈なのに落ち切ッてゐないところを見ると、厚化粧をしてゐたに相違ない。おめかしすきの女だッた證據なのです。

ぎろり、ぎろりと目を光らして、首から胸、腰、と隱されてゐる祕密をあばき出さうとするやうに見しらべてゐたが、何か動かしがたい斷案の確證を發見したと見えて、ほのかな笑みを泛べ乍らふり向くと、不意に敬四郎へ靜かな問ひを放ちました。

『お尋ね仕る。早手廻しにもう父親をお縄にされておいでぢやが、この者が下手人とのたしかな證據あッてのことでムるか』

『決ッてをるわい。殺された女房は後妻ぢや。その兄妹は繼子ぢや。店をようみい。米屋といふは名ばかり、米俵もろくにない貧乏店ぢや。そのうへに女房は七百兩といふ身金つきで後妻に來たものぢや。おやぢめ、女房がいのちより大切にして藏ッてをッたその七百兩の小判がほしうて殺したものに相違ないわい』

『なるほど、後妻で繼子でムッたか。道理でのう、それならば娘のやうな乳首をしてゐる筈ぢや。しかしそれだけではちと證據固めが不足のやうに思はれまするな』

『何が不足ぢや。まだいくらでも不審なことがあるわい。このおやぢ、ゆうべから今朝までどこへ失せたか店を留守にしてをるわ。いかほど聞いても行く先白狀せぬが不審ぢや。いゝやそればかりではないわい。これをみろ。これを！　女房が大切に致してをッた小判の包みぢや、おやぢめ、この七百兩を背中に致して、ゆうべのそ〳〵とどこかへ出かけてをるわ。いかほど締めても言はぬがうしろ暗い證據ぢやわい』

『ほゝう。なるほど、小判の包みを背中に致して家を留守にしましたとのう。――おやぢ、それは本當か！』

『本當でムります……』

『何しにどこへいッた！』

『そればッかりは……』

『白狀出來ぬと言ふか。疑ひが濃くなるばかりだのにのう。子供たち、おまへら知ッてをるだらう。父はどこへいッた』

『あの、あの……』

言ひかけたのを横から父親がけはしく睨めつけました。

何か深い祕密があるらしいまなざしなのです。

『みろ！　おやぢめ、七百兩に目が眩んで何ぞ細工したに相違ないわい。この敬四郎に授かッた手柄ぢや。指一本觸れて貰ひたうない。直九！　邪魔されぬうちにこの死骸も早う取片付けろ』

『いやお手柄はけッこうぢやが、まだ少々お早いやうぢや。待てッ、直九！』

得意顏に命じて敬四郎が手下の者たちに始末させようとしたのを、にこやかに微笑して制すると、名人がやんはりと右門流をほのめかし初めました。

『折々は目ものう、煤拂ひをするものぢや。では今一ッ承はるが、敬どの、これなる女の死因を御見破りかな』

『死因？　死因なぞ、死因なぞはこのおやぢを締めたら分るわい。要らぬ邪魔立てせずとどかッしやい！』

『アハハ。弱りましたな。それゆゑ時折は目の煤拂ひしたらどうかと申すのぢや。まさしくこれは絞め殺したもので厶るぞ。しかも下手人は子供ぢや』

『なに子供！　子供が、こんな大女を絞め殺せるものか馬鹿な！』

『左樣、ひとりならばむづかしいかも知れぬが下手人はふたりで厶る。論より證據、この二ケ所の爪痕をよく見られよ』

莞爾と笑つて名人は、首筋と乳房の上との二ケ所を指さしました。

なるほど二ケ所ともに、はッきりと爪の痕が見えるのです。ぐいと兩手で力まかせにひとりが首を絞めたらしく首筋にふたところ、ひとりが急所の乳房を抑へつけたらしくむつちりとした左右のそのふくらみの上に、不氣味な五本の爪痕がはッきりと見えました。

しかも小さい。いづれもその爪痕は、ひと目に子供の指と思はれるほど小さいのです。

『さうか！　子供か！　さては――』

當然のごとく疑ひのかゝッたのはふたりの兄妹でした。眞青になッて慄へてゐたふたりを睨めつけると、敬四郎の聲と手が一緒に飛びかゝりました。

『うぬらだ。うぬらだ。うぬらが繼子根性でやッたに違ひない！　直九！　縄打てッ』

『馬鹿な！　まだ早い！　手荒なことをされるな！　待たれよッ』

『邪魔すなッ。敬四郎が手がけたアナぢや！　どかッしやい！　辻番所の奴等！　早くこの死骸を片付けろ』

名人の制止も聞かばこそ、敬四郎はわめき叫ぶふたりの子供に縄を打たせて、父親共々、群衆のどよめきを押し分け乍ら、揚々として引ッ立てました。

三

『ちえッ、何て人がいいだらうな。折角眼をつけて、星を見つけてやッて、へえどうぞと熨斗をつけて呉れてやる馬鹿がありますかよ。當節は鳶だッてもかう造作なく油揚は浚へねえんだ。人がよすぎてむかむかすらあ』

悲憤やる方なかッたと見えて、傳六の空模樣は大荒れです。

『やい！　何が面白えんだ。ぽかんと口をあけて見てたッて一文にもなりやしねえぞ。稼げ、稼げ、うちへ早く歸ッて稼ぎなよ。野次馬ぢや乘り手もありやしねえやべらぼうめ。――ね、ちよいと。これから一體どうするんですかい。長年苦勞をした旦那とあッしの仲なんだからね。嫌味なこたア言ひたくねえが、今さら指を啣へてゐたッて始まらねえんだからね、お人善しの癒るお灸でもすゑに行ッた方が賢いですよ』

『……』

『え！　旦那！　返事をしなさいよ。返事を！　これこれかくかくで今度だけは謝まッた。ついおまへの眞似をして、おしやべりしたのがわるかッた、以後氣をつけるから勘辨しろと素直に仰

有りやあッしだッてガミガミ言やしねえんだからね。ぼんやりしてゐねえで、何とかお言ひなさいよ』

しかし聲はない。

名人の頭は冷たく冴えて、この怪奇な事件のことで一杯なのです。

父親にも疑ひがある。

殊に七百兩といふ女房の大金を持ち出して、ゆうべひと晩どこかをうろうろしてゐたと言ふことが大きな嫌疑の種でした。

子供たちにも疑ひがある。

繼子だッ、といふことが第一よくないのです。その上に爪痕がまた揃ひも揃ッてあの通り子供のものであッてみれば、ますます嫌疑が濃くなるばかりなのでした。

あのときの目もよくない。ゆうべ父はどこへいッたときいたとき、けはしく睨めつけた父親のまなざしも疑惑を強める種なのです。

世間にありがちな例のごとく、繼子いぢめに堪へ兼ねて子供たちふたりが絞殺したのを、知りつゝ父親が覆ひかくしてゐるとも考へられるのでした。

或は父親が使嗾して、子供たちに繼母を殺させたとも考へられるのです。

『それにしてはわざわざ知らせにあの子供の來たのがをかしいな。ふたりともなかなか可愛いからな』

『え？　何とか言ひましたかい。あッしが可愛いッて仰有るんですかい』

『うるせえや。默ッてろ』

『ちえッ、默りますよ。默りますとも！　えゝえゝ、どうせあッしや可愛いい乾分ぢやねえんでせうからね。もうひとことだッて口を利くもんぢやねえんだから覺悟しておきなさいよ』

きゝ流し乍ら、ひよいと見ると、はしなくもそのとき名人の目を強く射たものがある。

風呂桶の据ゑてある反對側の羽目板の高いところに、煤でよごれた手の跡が、あちらとこちらに飛び離れて、はッきりと二ッ殘ッてゐるのです。

しかも二ッとも明らかに、子供の手の跡なのでした。仔細に見比べて見ると、その手の跡に大小がある。

二人の子供の別々の手の跡に相違ないのです。

『はてのう……』

烱々と目を光らして、手の跡から手の跡を追ひ乍らその位置をよく見しらべると、湯氣拔きの押し窓の丁度眞下になッてゐるのでした。

窓の長さは三尺、幅は一尺あるかないかの狹いものでしたが、子供なら出入りが出來ないことはないのです。

念のために伸び上つて押しあけ乍らよく見ると、煤ほこりが着物かなぞですれたらしく、さッと刷け目がついてゐるのでした。

疑ひもなくここからふたりの子供が忍び込だに相違ない。忍び込だとするなら、うちのあの兄妹たちがわざわざ外から忍び込む筈はないから、よそのほかの子供に違ひないのです。手の跡から判斷すると、窓から這入ッて、羽目板に手を突いて、ひらりと身輕に飛びおりたものに違ひない。

身輕な子供！……

身輕な少年？……

『ウフフ、そろそろ風向きが變ッたかな』

『え？　え？　何ですかい。色氣がよくなッたんですかい』

『うるさいよ。おまへ今、もうひとことも口を利かないと言ッたぢやないか。おまへさんなぞに喋舌ッて貰はなくとも、こッちや結構身が持てるんだから、默つててくんな』

『あゝ言ふことを言ふんだからな。薄情ッちやありやしねえや、いッ切喋舌らねえ、口を利きませぬと言つておいて喋舌ッて、丁度あッしのおしやべりや人並み位えなんですよ。喋舌り出しやこれでずゐ分と賴母しいんだ。どッちの風向きがどう變ッたんですかい』

『呆れた奴だ。これをよくみろい』

『なるほど、あるね。手だね。もみぢのお手々といふ奴だ。まさにまさしく手の跡だね』

『だから探すんだよ』

『へ？……』

『あのおやぢが七百兩背負ッて、ゆうべどこへ出かけていッたかその謎の解けるやうな鍵を探し出すんだよ。うち中殘らずしらべてみな』

『ぢきそれだからな。この手の跡が七百兩するんですかい。もうちッと話の寸をつめて言ッてくれなきア分らねえんですよ』

『仕樣のねえ奴だ。この通り不思議な手の跡がこんなところに殘ッてゐるからにや、下手人の風

向きもこッちへ變ッたぢやないかよ。變ッたとすりや可哀さうなあの父子を助け出さなきやならねえんだ。しかし對手は敬四郎だ、尋常なことでは嫌疑を霽す筈アねえんだ。だから敬四郎がぐうの音も出ねえやうに、おやぢがゆうべどこへいッたか動かぬ足取りを洗ひ立てて攻め道具にしなきやならねえんだよ。おやぢの嫌疑が霽れりや、子供たちの嫌疑の雲の霽れる絲口も自づと見つかるといふもんぢやないかよ。いッ刻おくれりやいッ刻餘計あの父子が、むごたらしい敬四郎の責め折檻を受けなきやならねえんだ。早くしな』

『違えねえ！　さあ來い！　物に筋道が通ッて來たとなりや傳六の蚤取りまなこッてえのは凄いんだからな。べらぼうめ。ほんたうにおどろくな――えゝと、なるほど。これが大福帳だね。向う柳原、遠州屋玉吉樣二升御貸し。絲屋平兵衞樣五升御貸し――なんてシミッタレな借りやうをするんだい。どうせ借りるなら五千石も借りろよ』

名人は居間の方を、傳六は店の方を、手分けしてあちらこちらと探してゐるうちに、その傳六が突然けたたましく呼び立てました。

『あッた！　あッた！　ね、ちよッと、途方もねえものが見つかりましたよ。これから先や旦那の役なんだ。智惠箱持ッて早くおいでなせえよ』

ひらひらとかざすやうにして差し出したのは一枚の紙片です。

見ると受取りでした。しかし只の受取りではない。不思議なことにも、駕籠屋の受取りなのです。

覺え

一金壹兩二分　但し夜中増し金附

右正に受取候也。

佐久間町　駕籠留

増屋彌五右衞門殿

金釘流でさう書いた受取りなのでした。

『なるほど少し變な受取りだな。どこから見つけ出したんだ』

『この大福帳に挾んであッたんですよ。傳六も智惠は淺い方ぢやねえが、まだ駕籠屋の受取りてえものを聞いたことがねえ。だい一、この金高も少し多すぎるぢやムんせんかよ。壹兩二分ッてえ言や江戸中乘り廻はされる位えの高なんだからね。それやこの夜中増し金附きッてえ但し書も

氣にかゝるぢやムんせんかよ。夜半にでも乘り廻はしたに違げえねえですぜ』

『偉い。おまへもこの節少し、手をあげたな。捕り物の詮議はさういふ風に不審を見つけてびしびし疊みかけて行くもんだよ。佐久間町と言や隣りの横町だ。宿駕籠に違ひない。行ッてみな』

糸がほぐれ出したのです。

主從の足は飛ぶやうでした。案の定、佐久間町の通り角に、油障子で圍んだ安駕籠屋が見えるのです。

『誰かをらんか』

『へえへえ。ひとりをります』

無作法な恰好で奥から出て來た若い者の鼻先へ、ずいと受取りをつきつけ乍ら、名人が鋭く問ひかけました。

『この受取りはおまへのところでたしかに出したか』

『どれどれ。ちよッと見せておくんなさいまし。――あゝなるほど、うちから出したものに相違ムんせんよ』

『變だな』

『何がでムんす？』

『駕籠屋が受取りを出すといふ話をあまり聞かぬがどうしたわけだ』

『アハハ。そのことですか。御尤も様でムんす。あッしの方でも滅多にないことですがね。實あの米屋さんの御新造ッてえのが、とても金にやかましい人なんでね、だから費ッた金高を女房に見せなくちゃならねえんだからぜひに受取りをくれろと増屋さんが仰有ッたんですよ』

『いつだ』

『今朝の夜明けでムんす』

『なに！　今朝の夜明け！　乘ッたは米屋のおやぢか！』

『さうなんでムんす』

『壹兩二分もどこを乘り廻はした！』

『それが實アちよッと變でしてね。ゆうべ日が暮れると間もなくでした。今からお寺詣りするんだから急いで來てくれろと言ふんでね。夜、お寺詣りするのもをかしいがと思ッてお迎ひにいッたら、米屋のあのおやぢさん鍬を一挺と重さうな風呂敷包みを一ッ持ッてお乘んなすッたんですよ。はてなと思ッて肩にこたへる重味から探ッてみると、どうも風呂敷の中は小判らしいんです。小判に鍬はをかしいぞ、お寺へ行くのはなほをかしいと言ふんで相棒と首をひねりひねりお伴していッたら――』

『どこのお寺へいつた！』

『小石川の傳通院の裏通りに、惠信寺ッてえいふ小さなお寺がありますね、あのお寺の寂しい境内へ鍬と風呂敷包みを持ッて這入つて、暫くあちらこちらのそのそ歩いてゐた容子でムんしたがまもなくまたふた品を持ッたまゝで出て來て變なことを仰有るんです。どうもこの寺ぢや危ないどこかもッと寂しいお寺へやつてくんな、とかう言ふんでね。今度は本郷臺へ出て、加賀樣のお屋敷裏の新正寺ッてお寺へ乘せていッたんですよ。ところがそこでまたあッし共を門前に待たしておいて、米屋さんたッたひとりきり――』

『鍬と小判を持ッて境内へ這入ッたか！』

『さうでムんす。同じやうにあちらこちらをのそのそやッてゐたやうでしたがね、まもなくまたふた品を持ッたまゝで出て來ると、やッぱり危ない。もッとどこかほかの寺へやつてくれろと言ふんでね。今度は淺草へいッたんでムんす。ところがそこのお寺もやつぱりいけない。川を渡ッ

て本所へいッて三ケ寺廻ッたがそこもいけない、いけない、いけないで神田へまた舞ひ戻ッて來たら、とうとう夜があけちまッたんですよ。こッちも狐につままれたやうな心持でムんしたが、米屋のおやぢさんもぼんやりとして了ッて、鍬と包みを背負ひ乍らにやにや笑ッていらッしやるからね。何がいッたいどうしたんでムんすと言ッて聞いたら言ふんですよ。顔馴染のおまへたちだから打ち明けるが、あんな無理を言ふ女房ッてえものはねえ。この金をどこか人に見つからねえところへこッそり埋めて來いと言はれたんだが、江戸中にそんなところがあるもんけえ。どこもかも見つかりさうで危ねえところばかりぢやねえかとかう言ッてね、この受取りを作らせて御歸んなすッたんですよ』

右門の目がキラリと光りました。

米屋のおやぢ彌右衛門の身邊を包んでゐた不審の雲はカラリと霽れたが、はしなくもここに今、新らしい不審が湧いて來たのです。七百金といふ小判を、あの女がなぜに埋めさせようとしたか、そこに不審がある。疑惑がある。どういふ金であるか。なぜにそれほど、大切な小判であるか、なぜに埋めて隱して人目を恐れねばならぬか。そこに疑惑がある。不審があるのです。

目がキラリと光ると、鋭い聲が飛びました。

『あの女房について何か知ッてゐることはないか！』

『さうですね、やかましやの、きかん氣の、亭主を尻に敷いてゐる女だといふことは町内でも評判だから誰も知ッてをりますが、そのほかのことと言ッたら先づ――』

『何かあるか！』

『昔、吉原で女郎をしてをッたとか言ふことだけは知ッてをりますよ』

『なに！　女郎上り！　どうして一緒になッたか知らぬか。あのおやぢが身請でもしたか！』

『さあどうでムんすかね。兩國の河岸ッぷちに、見世物小屋の繩張り株を持ッてゐる松長ッてえいふ顔役がありますが、その親分が世話をしたとか口をきいて一緒にしたとか言ふ話ですから、いッてごらんなさいまし』

『おまへ、そのうちを知ッてゐるかい』

『をりますとも、よく知ッてをりますよ』

『よしッ。話し賃に稼がしてやる。早えところ二挺仕立てろ』

『こいつアありがてえ。おい、おい、兄弟！　お客さんを拾ッたよ。早く支度をやんな』

乘るのを待ッて、一散走りでした。

四

『傳六よ』

『へ？』

『捕り物ア、かうして謎の穴を狭めて行くもんだ。もう五十年もすりやおまへもいち人前に働かなくちやならねえから、よくコツを覺えておきなよ』

『あゝ言ふことを言ツてらあ、五十年だきや餘分ですよ。珍らしく旦那、上機嫌だね』

『さうさ。おいら、腹が減ッたんでね、早くおまんまが食べたいんだよ』

『ぢきにそれだ。何かと言やすぐに食ひ氣を出すんだからな秋口だツて戀風が吹かねえとも限らねえ。たまにや女の子の氣の方もお出しなせえよ。——よツと！　駕籠が止まッたな。若えの、もう來たのかい』

『へえ、參りました。ここが松長の親分のうちでムんす。外で待つんでムんすかい』

『さうだとも！　うちの旦那が駕籠に乗り出したとなりや一兩や五兩ぢやきかねえ、夜通し晝通し三日五日と乗りつゞけることがあるんだからな。大威張りで待ッてゐな』

傳六こそもういち人前になッたつもりで、大威張りなのです。

つかつかと松長の住ひへ這入らうとしたのを、

『慌てるな！』

小聲で鋭く名人が叱りました。

『少うし甘口なことを言ッてやると、ぢきにおまへはうれしくなるからいけないよ。對手はあまり筋のいゝ顔役ぢやねえ。見世物小屋の縄張り株を持ッてゐるとすりや、斬ッた張ッたの兇狀位え持ッてゐるかも知れねえから、もッと對手を見て踏ん込みなよ。ふらふら這入ッて逃げでもされたらどうするんだ。こッちへ來な』

そこの庭口のくぐりから這入ッて、こッそりと内庭へ廻りました。

とツつきにごろッた部屋があつて、若い者のごろごろとした影が見える。

ボーン。ボーンと壺を伏せる音がきこえるのです。

ひらりと上ッて不意にその部屋へ押し入ると、靜かに浴せました。

『朝ッぱらからいたづらしてゐるな。松長はどこにゐるんだ』

『……？』

『バチクリしなくてもいいんだよ。おまへらの親分はどこにゐるんだ。うちか、留守か』

答へないで若い者たちは、あッち、あッちと言ふやうに頤をしやくりました。

『どこだよ。奥か！』

さうです。さうですといふやうに、やはり答へないで、また頤をしやくりました。

『變な奴等だな、まるで啞屋敷へでも來たやうぢやねえか。どの部屋だ。松長はここか！』

ガラリと開けて、ひよいと見ると、松長が全く案外でした。

年はもう九十位。

クリクリ頭に剃髪して、十徳を着て、まだ少し季節が早いのに、大きな火鉢へ火をカンカンとおこし乍ら、いかにも寒さうにちゞかんで兩手をかざしてゐるのです。

『お前が松長だらうな』

『……？』

『返事をしろ！　おまへは松長ぢやねえのか！』

『……？』

きよとんとし乍ら、氣の抜けた顏をしてまじまじと見あげたきり返事はないのでした。

『とぼけた眞似をしても目が光ッてるぞ、耳はねえのか！』

『いいえ、旦那、いくら叱ッても駄目ですよ』

そのとき隣の部屋から若い者のひとりが飛んで來ると、うそうそと笑ひかけました。

『親分を對手に晩まで怒鳴ッたつて埒はあきませんよ』

『何だ。おまへら口が利けるぢやねえか。なぜさつき默つてたんだ』

『このうちぢや物を言つても通じねえ人がひとりあるんでね。ついみんな手眞似で話をする癖がついちまッたんです。親分が少々――』

『耳が遠いか』

『遠い段ぢやねえ、この通り耳のねえ人も同然なんです。御用があるなら筆で話しておくんなせえまし』

『何でえ。それならさうと早く言やいいぢやねえか。硯を出しな』

『七ッ道具の一ッなんだから、火鉢の陰にちやんと用意してありますよ』

なるほど筆に紙、ちやんと支度が揃つてゐるのです。

名人の筆はさらさらと走りました。

『八丁堀右門也。

神妙に應答すべし。

神田、米屋増屋彌五右衞門方へ後妻を世話せしはその方なる由、いかなる縁にて嫁づけしや。

かの女につき何か知れることなきや。

ありていに申立つるべし』

差しつけたのを見て、にやりと笑ふと松長が實に達筆にさらさらと書きしたためました。

『よくお越し下され候。

寒氣きびしく候間、火鉢へお當り下され度候。

お尋ねの女は、マキと申し、吉原にて女郎五年相勤め候女に御座候。

年あけたるのち、居所を定めず女衒なぞ致しをりしとか聞き及び候も、詳らかには存じ申さず候。

手前年頃世話好きに候へば、昨冬突然尋ね參り、どこぞへ嫁入口世話致し呉れと申し候へば、増彌五事、家内を失ひ、不自由致しをるとき〻及び候を幸ひ、後添に嫁づかせ候ものに御座候。

縁と申すは只それだけのことにて、生國も存ぜず、身元も知れ申さず候。

さうさう、今一ツ思ひ出し候。――』

筆をおいて松長がにたりとさらに笑ふと、ふたたびさらさらと書きしたためました。

『マキこと増屋五へ嫁づき候節、身附き七百兩程をひそかに貯へをり候とのことに御座候。

人の噂によれば右七百兩、あまりよろしからざる金子とかにて、女衒のかたはら、折々いとけなき子供等拐はかし候て溜めあげたる不義の金子とか申す由に候』

『なにッ』

名人の目がピカリと光ッた。

女衒！

誘拐！

女衒は人を買ッて人を賣る公然の稼業です。拐誘は法網をくぐり乍ら、人を盗み人を浚ッて賣る暗い稼業です。女衒とても、元より香ばしい稼業ではないが、女の前身は誘拐の暗い影がある

といふに至ッては、實に聞きのがしがたい事でした。しかも盗んで浚ッて賣つたものは頑是ない子供だといふのでした。

名人の手は久方振りで、そろりそろりといつのまにか頤のあたりをさ迷ひ初めました。

子供の誘拐！――どういふ子供をどこへ賣ッたか、大きな謎の雲が忽焉として目の前に舞ひ下ッて來たのです。

女の前身には暗い陰があッた。

誘拐しといふ人の恨を買ふに充分な陰があッた。

その女が風呂桶の中で絞め殺された。

死體には子供の爪痕がある。

風呂場の羽目にも跡がある。

やはり子供の手の跡なのだ。

忍び込んだところは高い窓なのだ。

その高い窓から苦もなく這入ッたとすると、よくよく身の輕い子供に違ひないのです。

身輕な子供？……

身輕な少年？……

謎を解く鍵はそれ一ッである。女は子供を浚ッてどういふところへ賣ッたか、身輕な子供と賣ッた先との間のつながりを見つけ出したら、この妖しき疑雲は自から解けて來るのです。

名人の手は、しきりと頤のあたりを去來しつゞけました。

『うれしいね。それが出ると峠はもう八合目まで登ッたも同然なんだからな。え？　ちよッと。傳六も手傳ッて頤を撫でてあげませうかい』

『……』

『やい、やい、松長。そんなにきよとんとした顏をして、不思議さうに旦那の頤をのぞき込まなくともいいんだよ。旦那は今お產をしてるんだ。お產をな。氣が散ッちや產めるもんぢやねえ。邪魔にならねえやうに、その顏をそッちへもッと引ッ込めてゐな！』

しかし、さうたやすく推斷がつく筈はない。ともかくも生きてゐる子供を盜んで賣るのであるから、いづれ賣ッた先も明るい陽の照る世界ではないのです。

『旅藝人か、曲藝師？……』

『身の輕い子供とすれば曲藝師？』

ボーン、ボーンと隣の部屋から、松長の乾分たちの弄んでゐる冴えた壺音がきこえました。

耳にするやむッつりと立ち上ッて、つかつかと這入ッて行くと不意に言ッたものです。

『バクチかい。おいらにも貸しな』

『こいつを？　あの旦那が？……』

『さうさ。びツくりせんでもいいよ。サイコロの音はどんな音かきくんだ。かうして壺を伏せるのかい』

ごろりと腹這ひになると、あざやかな手つきで、ガラガラポーンと伏せました。

おどろいたのは傳六です。

『笑、笑、笑談ぢやねえや、頃はどうしたんですかよ。頃は！　いくらバクチはお上がお目こぼしの惡戯にしたツて、御番所勤めをしてゐる者が手にするツてえ法はねえですよ。場合が違ふんだ。場合が！　何を悠長な眞似してゐるんですかよ！』

きゝ流し乍ら名人は、無心にガラガラポーンと伏せて、冴えたその壺音を無心にきゝ入り乍ら心氣の澄んだその無心の中から何か思ひつかうとでもするかのやうに、しきりと弄びつづけました。

ポーンと伏せてあけると、コロコロところがツて、ピョコンと賽が起き上るのです。

ころがツてはまたピョコンと起きる！

刹那。

むくりと立ち上ると、莞爾とした笑みの中からさわやかな聲が飛びました。

『何アんでえ。さあ駕籠だ。表の奴等に支度させな』

『ありがてえ、眼がつきましたかい』

『大つきだ。いたづらもして見るものさ。このサイコロをよくみろよ。ころころとところがツてはぴよこんと起きるぢやねえか。ふいツと今それで思ひついたんだ。星は角兵衛獅子だよ』

『カクベエジシ？』

『ぴよこんと起き上る角兵衛獅子さ。身の輕い子供だから只の曲藝師かと思ッたが、まさしく角兵衛のお獅子さんに違げえねえよ。拐かされて賣られた子供が恨みのあまりやッた細工に相違ねえ。一年ぶりであいつらがまた江戸へ流れ込だきのふ今日ぢやねえかよ。あッちこッち流して歩くうちに拐かしたおマキを見つけて、一途の怨みにギウとやりました。と言ッたところが先づこの謎の落だ。急がなくちやならねえ、早くついて來な』

ひたひたと駕籠はその場に走り出しました。

五

目ざしたのは柳原お馬場に近い神田の旅籠町です。

角兵衛獅子の宿は軒を並べて二軒ある。

越後屋といふのが一軒、丸屋といふのが一軒。秋から冬にかけての稼ぎ場に、雪の國からこの江戸へ流れ出して來てゐる角兵衛獅子は、年端の行かぬ子供だけでも實に六十人近い夥しい數でした。

しかし乘りつけたときは、すでにもう二軒とも角兵衛獅子の群れが親方に伴はれて、四方八方へ流れ出たあとなのでした。行き先は八百八丁のどこへ行ッたか分らないのです。その數は六十人からあるのです。その中から下手人ふたりを嗅ぎ出すのです。すでにふたりの子供を嗅ぎ出すことからして難事なところへ、行ッた先散つた先が雲をつかむやうな八百八丁とすれば實に難事中の難事でした。

『畜生めッ。面倒なことになりやがッたね』

忽ちに傳六の慌て出したのは當り前です。

『なんしろ八百八丁あるんだ。八百八丁ね。日に一百一丁づゝ探したッて八日かゝるんですよ。え？　ちよッと。何かいい手はねえんですかね。王手飛車取りッてえいふやうな奴がね』

『……』

『あッしが下手人でムんす。あッしが絞めころしましたと首に札をつけてゐるわけぢやねえんだからね。まごまごしてりや今年一杯かゝりますぜ』

喧しく囀づり初めたのをきゝ流し乍ら、ぢッと打ち考へてゐた名人が、何か名案を思ひついたとみえて、突然ウフフとばかり笑ひ出すと、のッそりと先づ丸屋へ這入ッていッて穏やかにきゝ尋ねました。

『おまへのところへ泊ッてゐる角兵衛獅子どもはいくたりだ』

『二十六人でムります』

『歸りは何刻ごろだ』

『いつどちらへ流しに出てをりましても、暮れ六ツかッきりには必ず歸ッて參ります』

『ぢや一ツお咒ひしておかうよ。寢泊りしてゐる部屋へ案内せい』

どんどん這入ッて行くと、矢庭に言ッたものです。

『亭主、子供たちの着物を出せ』

『は？……』

『變な顏しなくたッていいんだよ。角兵衞たちみんな着替へを持ッてるだらう。どれでもいい。その中からふたり分出せ』

あちらの梱、こちらの梱をあけて、山のやうに積みあげた着替の中から、手に觸れたのをめくら探りに二枚つまみあげるとくるくると小紐で結はへて、そこの鴨居のところへぷらりと吊りさげ乍ら、取りよせた硯の筆をとッて、さらさらと不思議な文句を懷紙に書きしたためました。

『字の讀める者がみんなに讀んできかせろ。ゆうべ柳原の米屋の女房を絞めころした奴等はこの着物の持主と決ッた。白粉の匂ひが沁みついてゐるのが何よりの證據だ。御番所の手は廻ッたぞ。傳六といふ怕いをぢさんが引ッ立てに來る。みんな氣をつけろ』

吊りさげた着物へぺッたりと貼りつけておいて、さッさと引きあげて行くと、すぐその足でやッていッたところは軒並びのもう一軒の越後屋でした。

ここに泊ッてゐるのは三十五人。

着替へを出させて、手に觸れた二枚を同じやうに吊りさげ乍ら、同じ文句の遺し書をしておく

とふり返へりもしないのです。

そのまゝ駕籠にゆられて、すうと八丁堀へ引揚げました。

『馬鹿をするにも程があらあ。傳六の怕いをぢさんもねえもんだ。あッしがいつあんな約束をしたんですかい』

歸りつくと同時に、早速早雷が鳴り出しました。

『謝まッたなら謝まッたと素直に言やいいんだ。旦那だッても神樣ぢやねえ。たまにや手を燒く時もあるんだからね。あんな着物に白粉の匂ひがついてゐるかどうか、あッしや匂ひも嗅いだ事アねえんですよ。この傳六に罪をぬりつけるつもりですかい』

『うるさいな、王手飛車取りの珍手を工夫しろと言ッたから註文通りやッたのぢやねえか。ガンガン言ふばかりが能ぢやねえや。たまにやとッくり胸に手をおいて考へてみろい。あの着物四枚はどの子供のものだか知らねえが、あゝしておきやあの持主の四人は元より、やましいことのねえ子供がみんな無實の罪を着せられめえと、騷ぎ出すに決ッてるんだ。さうでなくともあゝいふ他國者の渡り藝人たちや仲間のシメシもきびしいが、內輪同志の成敗法度もきびしいんだ。誰がやッた、おまへか、貴樣かとわいわい騷いでゐるうちには自から本物の下手人が分るだらうし、

分りや手數をかけずにそツくりこツちが小星をふたりちやうだいが出來るといふもんぢやねえかよ。日が暮れるまでは高枕さ。分ッたかい』

『なるほど王手飛車取りに違げえねえや。うまい餌を考へたもんだね。六十人からの子供がべちやくちや騒ぎ出したとなるとまたやかましいんだからな。さあ來い。敬四郎。智恵のある旦那を親分に持つとかういふ風に樂が出來るんだ。枕をあげませうかい。布團も敷きませうかい。傳六の骨ッぽい手でもよければお腰も揉みますよ』

晴れてうるさし、曇ッてうるさし、しきりと機嫌をとるのです。

釣瓶落に次第に暮れて、そこはかとなくわびしい初秋の夕暮れが近づきました。

『向うへ行きつくと丁度暮れ六ツです。さあいらッしやい。お駕籠の用意は出來てゐるんですよ』

『何挺だ』

『うれしくなッたからね。あッしが手錢を氣張ッて二挺用意したんですよ』

『一挺にしろ』

『へ？……』

『一挺返へせといふんだよ』

殘ッたその一挺に乘るかと思ふとさうではないのです。ぶらりぶらりと自分はお拾ひで、空駕籠をあとに隨へ乍ら、神田へ行きついたのが暮れ六ツ少しすぎでした。

丸屋の方へ先づ先に這入ッてみると、案外にもしいんとしてゐるのです。稼ぎを終へて歸ッた二十六人が親方たちに護られ乍ら、ぶらりと下ッてゐる二枚の着物を遠卷にして、怕いものをでも見るやうに眺めてゐるのでした。

『こッちぢやねえ。獲物は越後屋の網と決ッた。いッてみな』

その越後屋へ這入ると同時に、騒がしいわめき聲がガヤガヤと先づ耳を打ちました。二階へ上ッていッてみると、吊りさげてある二枚の着物のまはりに角兵衛たちが眞ッ黒く集ッて、湧き返ッてゐる最中なのでした。

『こいつアおれんだ。おれの着物だ。おれはそんな人殺しなんぞやッた覺えはねえよ』

『ぢや誰だ。誰だ。誰がやッたんだよ』

ひよいとみると、犇めき立ッてゐるその群れから離れて、暗い行燈の灯影の下に、身を引きそばめ乍ら、抱き合ふやうにしてふるへてゐる子供がゐるのです。

それも二人！

キラリと名人の目が光ッたかと見るまに、靜かに歩みよると人情ごまやかな聲が脅えてゐるその顔のうへにふりそゝぎました。

『をぢさんが來たからにや心配するなよ。慈悲をかけてあげませうからのう。あの風呂桶の下手人は、おまへたちだらうな』

『……』

『泣かいでもいい。さぞくやしかッたらう。ふたりともあの女に拐かされて角兵衛に賣られたんでありませうのう。違ふか。どうぢや』

わッとしやくりあげてふたりとも泣きじやくッてゐたが、溫情あふれた名人の言葉に、子供心がしめつけられたとみえるのです。

『ようきいてくれました。をぢさんなら隱さずに申します。下手人は、あの下手人は……』

『やはりおまへたちか！』

『さうでムります。仰有るとほりあたいたちはあの女に拐かされたんでムります……』

『どこで浚はれた』

『淺草の永德寺でムります。あたしたちふたりとも親なし兒でムります。親なし兒だから永德寺

に貰はれて、六ツの時からお小僧になッてゐたのでムります。丁度三年まへでござりました。和尚さまはずゐ分可愛がッて下さいましたけれど、朝の勤め、夜のお勤め、寒中なぞは辛いことがござりましたゆゑ、どこかほかにいい奉公口でも、と思ッてをりましたら、あの米屋の鬼女がうまいことばかり並べてわたしたちを連れ出したんでござります。そのときは拐かされてこんな角兵衛に賣られるとは夢にも思ひませなんだゆゑ、喜んで參りましたら、雪國へ賣られてお小僧よりももッと辛い目に會はされたのでムります。それゆゑ、毎年々々江戸へ來るたび、もしもあの鬼女が見つかッたら、思ひ知らせてやらうとふたりで相談し合ッてゐたのでござります。こちらの貞坊も十二、あたしも十二、子供とてもふたり力を合はせたなら怨みが霽らされまいこともあるまいと思うてをりましたら——』

『きのふ柳原で見つかッたのか！』

『さうでムります。親方と一緒に流しにいッたら、夢にも忘れぬあの鬼女が見つかりましたゆゑ、ゆうべ日が暮れると一緒にこッそりふたりしてここを抜け出し、あの米屋へいッて見たら鬼女めもあたしたちに見つけられた事が分ッたとみえて、慾深の女でござります。拐かして賣ッた金を取りかへしにでも來るだらうと思ひ違へましたものか、御亭主に小判の包みを埋めて來いとか隱

して來いとか叱りつけるやうに言ッて表へ出ましたゆゑ、容子を窺ッてお風呂場へ這入ッたところを見すまし、窓からふたり忍びこんでわたしが首を、貞坊がお乳を押へて絞めころしたのでございます。あいつは、あの鬼女はきッと、みんなを、澤山な子供をあたいたちみたいに浚ッては賣ッてゐるんだ。みんなのために、可哀さうなみんなのために殺してやッたかと思へば悲しいことはございませぬ、どこへでも參ります……。つれていッて下さいまし。參ります……。參ります……』

いぢらしくも自ら兩手をうしろに廻すと、おのれたちの悲しい運命を歎かうともせずに、仲間の角兵衛たちへ泣き濡れた泪の中からさみしい別れの笑みを送りつゝ、とぼとぼと歩き出しました。

しかしこれを繩にするやうな右門ではないのです。

『仲よくふたりしてこれへお乘り……』

用意の駕籠へのせると、默々として川一ッ越えた傳馬町の不審牢へ伴なひました。

敬四郎がその不審牢へあの米屋の親子を叩き入れて、しきりと責め立ててゐた最中なのでした。

聲はない。ずいと牢格子の中へ這入ッて行くと、さみしく笑ッて言ッたことです。

『相變らず荒療治がおすきだな。目違ひもいいかげんにしないと呪ひ殺されまするよ。增屋のおやぢ！　兄妹をつれて早くかへりな』

『なにをするんだ。なにを勝手な眞似をするんだ』

いきり立たうとした敬四郎の目の前へ、

『この通り土產がムる。お禮でも言はッしやい』

駕籠から二人をつれ出すと、靜かにさしつけて言ひました。

『增屋のおやぢ。つまらねえかくし立てをするから目違ひもされるんだ。なぜあのとき小判を埋めにいッたと、正直に白狀しなかッたんだ』

『相濟みませぬ。女房の前身も前身、金も金でムりましたゆゑ世間に恥をさらしてはとついロが重かッたのでムります……』

『そんなことだらうと思ッた。これからもあるこッたから、隱しごとも人を見ておやりよ。そちらの敬旦那のやうなお方がいらッしやるんだからな。角兵衛の子供たちは、死にたいか。生きてをりたいか』

『生きてをりたうはございませんけれど、淺草のお師匠さまにおわび申したうございます……』

『いぢらしいことだな。法は曲げられぬ。一度はお牢屋へ入れますがのう。をぢさんがすぐに永徳寺へ知らせてあげますからまもなくお師匠が救ひとツて、慈悲のお袖の下へ庇ツてくれませう。それまでの辛抱ぢや。おとなしう牢屋へ這入りなさいよ』

『あい、這入ります……ふたりして一緒に這入ります……』

進んで入牢を急ぐ子供たちと、悦んで牢を放たれる兄妹たちが、右門の袖のかげでさびしく笑顔を送り合ひました。

首つり五人男

一

その第三十四番手柄です。

事の起きたのは九月初め。

蕭々落莫として江戸は全くもう秋でした。

濠ばたの柳から先づその秋がふけ初めて、上野、兩國、向ふ島、だん〳〵と秋が江戸にひろがると、心中、川目付、土左衛門舟、三題咄しのやうに決ツてこの三ツがふえる。勿論心中はあの心中、川目付は墨田の大川の川見張り、やはり死によいためにか、十組のうちの八組までは大川へ入水して儚なくも美しい思ひを遂げるものがあるところから、これを見張るための川目付であるが、土左舟はまた言ふまでもなくそれらの悲しい男佛女佛を拾ひあげる功德の舟です。

公儀でお差し立ての分が毎年三艘。

特志で見廻ッてゐるのが同樣三艘――。

幡隨院一家で出してゐるのが一艘に、但馬屋身內で差し立てゝゐるのが一艘。同じく江戸にひびいた口入れ稼業の加賀芳一家で見廻らしてゐるのが一艘と、特志の土左舟は都合その三艘でした。墨田と言へば名にし負ふ水の里です。水から水へつゞく秋のその向ふ島に、葦間を出たり這入ッたり、佛に手向けた香華のけむりを艫のあたりにそこはかとなくなびかせ乍ら、わびしいその土左舟が右へ左へ往き來する樣は、江戸の秋のみに見える悲しい風景の一ッでした。

そのほかにもう一ッ、秋がふけると共に繁昌するものがある。質屋です。衣替へ、うつり替り、季節の替り目、年季奉公の替り目、仲間下男下女小婢の出入りどきであるから、小前稼ぎの者にはなくて叶はぬ質屋が繁昌したとて何の不思議もない。

しかし不思議はないからと言ッて、傳六がこの質屋に用があるとすると事が穩かでないのです。

『いいえ。なにもね。あッしや別にその貧乏してゐるッてえわけぢやねえんだ。これもみんな人附合ひでね。物事は何によらず人並にやらねえと角が立つから、お附合ひに行くんですよ。え？旦那。旦那は何も御用はムんせんかい』

『バカだな』

『え？……』

『えぢやないよ。今日はいく日だと思ッてるんだ』

『まさに九月九日、旦那を前にして利口ぶるやうだが、一年に九月九日ッていふ日は只のいち日しかねえんですよ』

『呆れた奴だ。そんなことを聞いてゐるんぢやねえ、九月の九日はどういふ日だかと言ッて聞いてるんだよ』

『決ッてるぢやムんせんか。菊見の御節句ですよ』

『それを知ッてゐたら、今もう何刻だと思ッてるんだ。やがて六ッになるぢやねえか。九月の九日、菊見の節句にや暮れの六ッから北町南町兩御番所の者殘らずが兩國の川增で御苦勞振舞ひの無禮講と昔から相場が決ッてるんだ。まごまごしてりや遲れるぢやねえかよ』

『實あそいつに遲れちやなるめえと思ッて鳥渡その質屋へね』

『質屋に何の用があるんだ』

『別に用があるといふわけぢやねえんだが、ちよッとその何ですよ。實あ一張羅をね』

『曲げたのかい』

『曲げたッてえわけぢやねえが、ついふらふらと一兩二分ばかりに殺して了ッたら、それッきり質屋の藏の中へ這入ッちまッたんですよ』

『それならやッぱり曲げたんぢやねえかよ。バカだな何だッてまた一兩二分ばかりの金に困ッたんだ』

『いいえ、金に困つたから入れたんぢやねえんですよ。ふところにやまだ三兩あまりあッたんですが、今も申した通りみんなが相談したやうに質屋通ひをするんでね。物はためし、近所附合におれも一ツ入れて見てやらうと思ッて、一兩二分に典じたらあとが變なことになりやがッたんですよ。なんしろふところの金と合はすると、五兩近くの大金が出來たからねすッかり膽が坐ッちまッて、吹き矢へ行かう、玉ころがしもやッて見べえ、たらふく鰻を拜んでやらうと、淺草から兩國へひと廻りしてみたら巾着の中がぽうとなりやがッて、いつのまにか霞がかゝッちまッたんだ。別に謎をかけるわけぢやねえんだがね。どうですかい旦那。旦那は何か質屋に御用はねえんですかい』

『愛想がつきて物も言へねえや。旦那は御用がきいて呆れらあ、つまらねえ謎ばッかりかけてゐやがる。何のかのと言ッてこれがほしいだらう。よくよく愛想のつきる奴だ。しやうがねえから

三兩やるよ。早くいつて出して來な！』

『うへへ……。忝けねえ！　話せるね。全く！　ちよいとひと謎、遠まはしに店をひろげると、忽ちこの通り物がお分り遊ばすんだからな。旦那樣々大明神だ。だから女の子がぽうッと來るんですよ』

『ろくでもねえお世辭をぬかすない！　とッといつて來りやいいんだよ。おいら、さきに行くから、あとから來るんだぜ。いいかい。柳橋の川增だ。とち狂ッてまた吹き矢や玉ころがしにいッちやいけねえぜ』

『言ふにや及ぶだ。殺した一張羅が生きてかへるとなると氣が强えんだからね。旦那こそ吹き流されちや駄目ですぜ。いいですかい。眞ッすぐ行くんですよ……』

時あるごとに何か一つづつ事を起さないと納りのつかない男です。傳六を殘してひと足さきに右門がその柳橋の川增へ行きついたときは丁度六ツ。數寄屋橋、呉服橋、南北兩御番所の同役同僚達の顏が、もう八分どほり座に見えました。

與力、同心、岡ッ引、目明し、手先、慰勞の宴の無禮講だから、無論席に上下の差別はない。正面床の前に六曲二双の金屏風を晴れやかに立てめぐらして、その前に大輪、糸咲き、取りまぜ

て見事な菊が大小十鉢、左右にずらりと居流れた顔がまた江戸の治安を預り司る町方警吏だけに、いかめしくも物々しいのです。

まもなく酒が運ばれました。

灯影に婢たちのなまめかしい裳裾がもつれ合ッて、手から手へ、一ッは二ッと盃が飛び交ひ、座もまたやうやく陽氣の花をひらき始めました。

しかしどうしたことか、とうにもう來なければならない筈なのに、傳六がなかなか姿を見せないのです。

『をかしいのう。これよ、女』

『なんでございます』

『川増といふのは、このあたりでこのうち一軒であらうな』

『いいえ、あの……』

『まだあるか？』

『ございます』

『なに！　ある！――やはり料亭か』

『いいえ、繪双紙屋でございます』

『アハハ、、、ほかならぬあいつのことぢや。うちを間違へて這入ッて、いいこころもちになつて繪双紙でも見てをるやも知れぬ、ご苦勞だがちよッと見にいッてくれぬか』

『畏りました。お名前は？』

『傳六と言ふのだが、顔を見ればひと目に分る。つら構へからして賑やかに出來てをるからのう。ひと走り容子見にいッて來てくれぬか』

『ようございます。みなさまこの通り御陽氣になッていらッしやるんだから、をりましたら、首に繩をつけて引ッ張ッて參りませう』

十中八九ゐるだらうと思ッて心待ちにしてゐたのに、だが間もなく歸ッて來ると、それらしい男の影も姿もないといふ報告でした。

不審に首をかしげてゐるとき、帳場の者が慌ただしくあがッて來ると、突然不思議なことを言ッて呼び立てました。

『頃の旦那さまといふのはどなたさまでございます？』

『頃の旦那？』

『急用ぢやと申しまして只今駕籠屋がこの書面を持ツて參りました。どの旦那さまでムります』

『アハハヽヽ。頃の旦那ならあれぢやあれぢや。あの隅で頃をなでてゐる男ぢや』

勿論名人のことです。さし出した書面をみると、おらの頃の旦那へ、と書いてある。裏には傳と跨つたやうな字を書いて、中がまた見事な金釘流でした。

『急用急用大急用だ。

傳六大事命が危ねえ。

助太刀に早く來ておくんなせえ』

何を慌ててゐるのか字までが慄へて、紙一枚にべたべたと大きく書いてあるのです。

『何だ何だ』

『何ぢや！』

『何でムるか、ろくでもないことかも知れぬが、參らずばなるまい。番頭、駕籠屋は表にをるか』

『早く早くとせき立ててをりますから、早くどうぞ』

『さうか。では參らう。お先に……』

怪しむやうにふり向いた同僚たちの目に送られ乍ら、名人は不審に首をかしげて迎ひの駕籠に打ちのりました。

同時にさッと息杖をあげると、早い早い、よくよく傳六がせき立てて迎ひによこしたと見えて柳橋を渡り越えるとひた走りに淺草目ざしました。無論目ざすからには傳六のゐるところも淺草だらうと思はれたのに、呆れた男です。乘ッたかと思ふまもなく駕籠の止まッたところは、目と鼻どころか本當に柳橋からはひと跨ぎのお藏前でした。

おりて見ると往來一杯に黒山のやうな人集りなのです。だが不思議なことに傳六の姿はないのでした。

その代りに黒集りの人の目が一様にお倉の奥をのぞいてゐるのです。右門流の眼でした。物見高げに人の眼が倉の奥へそゝがれてゐるからには、傳六のゐるところもその奥に違ひなく、事の起きてゐるのもまた同じその倉の奥に相違ないのです。

名人は足早にづかづかと廣場を奥へ急ぎました。一ノ倉から始まッて、二ノ倉。三ノ倉。九ノ倉と長い棟が九棟ある。

しかしどの棟もどの倉も錠が下りて、人影は夢おろか何の異狀もないのでした。

いぶかり乍ら裏へ廻ッてみると、中秋九日の夕月が丁度上ッて、隅田の川は足元にきらめく月光をあび乍ら、その川の上へぬッと枝葉を突き出してゐる大川名代の首尾の松までがくッきりとひと目でした。

ひよいと見るとその首尾の松の根元に蹲まッて、必死に背を丸め乍ら、必死に頭をかくし乍らわなわなとふるへてゐる男の影が見えるのです。

『傳六か！』

『え？……。き、き、來ましたか！　ありがてえ。だ、だ、旦那ですか！』

『バカだな。何をふるへてをるんだ。しッかりしろい！』

『こ、これがしッかり出來たら、傳六は柳生但馬守にでも岩見重太郎にでも何にでもなれるんですよ。あれをあれを、あそこの、あ、あ、あれをよくごらんなさいまし……』

齒の根も合はぬやうにふるへ乍ら、ひたがくしに顏をかくして指さした方角をちらりと見ると、さすがの名人右門も思はずぎよッと粟つぶ立ちました。

吊ッてゐるのです。

人が、人間が、ぬうと川面に突き出した首尾の松の長い枝の高いところに、青白い不氣味な月

の光りに照らされて、ぶらりと下ッてゐるのです。

それもひとりではない。二ッ、三ッ、四ッ、五ッ、男ばかり實に五人もが、さながら首くくりの見世物かなぞのやうに、ずらずらと一ッ枝に長い足をそろへ乍ら垂れ下つてゐるのでした。

『一體これはどうしたんだ』

『どうしたかかうしたかあッしにきいたッて知らねえですよ。あッしが吊ッてゐるわけぢやねえんだからね。三兩下すッたから大威張りでこの通り、一張羅を受け出して、遲れちやならねえと駕籠を奢ッて來たんです。ところが景氣をつけて飛ばせてゐるうちに、駕籠屋の奴め、足にはずみがついて止まらなくなッたものか、ちやんと承知し乍ら柳橋を通りすぎて了やがッてね。こゝまで來たら首ッ吊りが五人あると言ッて、わいわい騒いでゐやがるんだ。來て見るとこれなんですよ。さあ大變とばかり旦那へあの通り一筆したためてお迎ひを出したはいいが、あんまり威張つたロをきくもんぢやねえんです。何がおもしれえんだ。素人が見たとて生きかへるわけぢやねえ、どけどけ、番人はおれひとりで澤山だとばかり野次馬を追ッ拂ッて、番をしてみたら、ちッとばかり料簡が違ッたんだ。なんしろ五人も縊ッてゐやがるんだからね。知らぬうちに手足がこまかく動き出しやがつッて、目はくらむ、膽は冷える、そのうちにしいんと氣が遠くなッちまッ

たんですよ』

『誰がいつ頃見つけたんだい』

『ほんの今しがた、この下を通ッた船頭が見つけてね、それから騒ぎ出したといふんだから、吊ッたのも明るいうちぢやねえ屹度日が暮れてからですよ』

『自身番の者にはもう手配したか』

『そんな度胸があるもんですかよ。なんしろ仲間は死人なんだ。旦那の來やうがおそいんであッしや恨みましたよ』

『ことし、いくつになるんだ。仕様がねえッちやありやしねえ。早くいッて呼んで來な』

『行くはいいが、あッしが行きや旦那ひとりになるんだ。あとは大丈夫ですかい』

『おまへたア違わあ！』

駈け出さうとしたとき、騒ぎをききつけたと見えて、自身番の町役人たちが、提灯、龕燈、取り〳〵にふりかざし乍ら、どやどやと馳せつけました。

『參ッたか！　右門ぢや。誰か早う灯りを貸せい』

龕燈をうけとると、高くかざして枝先を照らし乍ら、ぢッと先づその位置を見しらべました。

ところが不思議です。縊ッてゐる枝は幹からくねりと下廻りに曲ッて、川の上に二間近くも突き出た場所でした。首吊りの名人ならいざ知らず、普通の者ではたうてい這ひのぼッて行かれるやうな枝でない。不思議に思ッて幹から根元を念のためにしらべると、やはり上ッていッたらしい足跡も形跡もないのです。

『ちッと變な匂ひがして來やがッたな。灯りをもう二ッ三ッ寄せてみろ』

集めて照らしたその灯が死體へ屆くと同時でした。

『よッ。目をあいてゐるな！』

はぜあがッたやうなおどろきの聲が、名人の口から放たれました。五人ともに死人はかッと目を見開いて、氣味わるく虚空をにらんでゐるのです。ぼかりか、歯も剝いてゐるのです。舌を出してゐるのです。――他殺の證據でした。自分で縊ッたものなら、十人が十人まで目を閉ぢ、口を閉ぢて、もッと安らかな形相をしてゐるのが普通でした。それが自殺と他殺との有力な鑑別法でした。だのに目も歯も剝いてゐるとすると、何者かが絞め殺してからここへ吊るして、自ら縊ッたごとく見せかけたものに相違ないのです。

『ね！……。かういふことになるんだから、人眞似もして質屋へも行くもんですよ。あッしが一

張雛を殺して道を迷つたからこそ、かういふ大事件にも打ツかつたんだ。三兩ぢや安いですぜ』

『なにをつまらねえ自慢してゐるんだ。早く取り下ろす工夫しろ』

『だツてこの通り上ツちやいけねえし手は屆かねえんだからね。工夫のしようがねえんですよ』

『舟から枝へ梯子でも掛けりや下せるぢやねえか。倉の荷揚げ場へ行きや舟も梯子も掃くほどある筈だ。とツととしろい』

自身番の小者たちも手傳ツて、忽ち取りおろしの用意がととのひました。

二

松の根元に並べたのを見しらべると、五人ともに死人は逞ましい男ばかりです。

不思議なことにはその五人が申し合はせたやうに、三十前の若者ばかりでした。こさツぱりとした身裝はしてゐるが、裕福なものたちではない。

懷中は無一物。手がかりとなるべき品も皆無。しかし無一物皆無であツたにしても、どういふ素性の者か先づそれに眼をつけるのが第一です。

しやがんで龕燈をさしつけ乍ら、しきりとあちらこちらをしらべてゐたが、はからずもそのとき名人の目を惹いたものは死人の掌でした。

五人ともに人並すぐれて頑丈な手をしてゐるばかりか、その兩手の指の腹から掌にかけて、いち面に肉豆が當ツてゐるのです。

『船頭だな！』

『へ？……。船頭といふと船のあの船頭ですかい』

『決ツてらあ。駕籠屋に船頭があるかい。いちいち口を出してうるさい奴だ。この手を見ろい。まさしくこいつあ艪肉豆だ。船頭の證據だよ。これだけ眼がつきや騷ぐこたアねえ。自身番の連中、おまへらはどこだ』

『北鳥越でムります』

『四五町あるな。遠いところを氣の毒だが見た通りの只の首縊りぢやねえ。今夜のうちにも騷ぎをきいて、この者たちの身緣が引取りに來るかも知れねえからな。來たらよく所をきいて渡すやうに、小屋へ死體を運んで番をせい。人手にかゝツたと思やよけい不憫だ。ねんごろに預ツて護ツてやれよ……』

言ひすてて、さツさと歩き出したかと見る間に、忽ちその場から名人十八番の右門流が始まり

ました。藏前を左へ天王町から瓦町へ出て、そこの町角の御料理仕出し、魚辰と灯り看板の出てゐた一軒へづかづか這入ッて行くと、矢庭に言ッたものです。

『何かうまさうなもので折詰が出來るか』

『出來ますが、何人前さんで？』

『五人前ぢや』

『五人前！……』

不意を打たれて、傳六、ぽかんとなりました。第一仕出し屋へ來て、折詰辨當を誂へたことからしてが腑におちないのです。そのうへ五人前とは、誰が食べるつもりなのか考へやうがない。今のさき取片付けさせた、あの五人の亡者にでも食べさせるつもりであるなら、魚屋で生臭入りの辨當もをかしいのです。

『笑、笑、笑談ぢやねえや。あッしやもう……あッしやもう……』

鳴りたくも鳴れないほど度膽をぬかれて、さすがの傳六も目を丸めたきりでした。

しかし名人は頓着がない。

『あゝ出來たか。ご苦勞々々々。ほら代をやるぞ』

小粒銀をころころと投げ出して、兩手にぶらさげると、やッていッたところがまた不思議です。柳橋から兩國橋を渡ッて、大川沿ひに土手を左へ曲り乍ら、そこの回向院裏の横堀の奥へどんどんと急ぎました。

突き當りに小さな小屋がある。

軒は傾き、壁はくづれて、さながらに隱亡小屋のやうな氣味のわるい小屋でした。勿論只の小屋ではない。實にこの横堀こそは、秋の隅田に名物のあの土左衛門舟が艙をとめる舫ひ堀なのです。川から拾ひあげた死體はみんなここまで運び、引き取り人のある者はこの小屋で引き渡し、身緣も緣者もない無緣佛は、裏の回向院へ葬るのがならはしでした。

だからこそ中は火の氣一ッ灯り一ッないうへに、氣のせゐばかりでなく死人の匂ひがプーンと鼻を打ちました。

その暗い小屋の中へどんどん這入ッて行くと、名人はすまして言ッたものです。

『なにはともかく腹をこしらへるが第一だ。遠慮せずとおまへもおあがりよ』

『笑、笑、笑談ぢやねえですよ。氣味のわるい。辨當どころかあッしや氣味がわるくて、も、も、ものも言へねえんですよ』

『さうかい。でもおいしいぜ。ほゝう、今食ッたのはどうやら玉子燒らしいや。暗がりでよくは分らねえが、なかなか洒落た味につくッてあるよ。どうだい。おまへたべないか』

『要らねえですよ』

『さうかい。遠慮すると腹がへるぜ。おいらがいち人前、おまへは晩めしも戴いてゐないから、四人前は要るだらうと思ッて親切につくッて來てやッたんだが、調子がわるいと朝までここにかうしてゐなきやならねえかも知れんからな。あとでぴいぴい音をあげたッて知らねえぜ』

すましてパクパクやつてゐた名人が、突然そのときさッと腰を浮かしました。

ギイギイと、艪の音が近づいて來るのです。この横堀へ這入ッてくるからには、まさしく土左舟でした。

『來たな！　間が悪けりや朝までと思ッたが、この分ぢやとんとん拍子に道が開けるかも知れねえや。さッそく一發おどしてやらうぜ……』

立ちあがッたかと思ふまもなく姿はもう外でした――。實にここへ名人のやッて來たのは、その土左舟の詮議に來たのです。あの五人の死體が他殺であるのはすでに睨んだ通りでした。殺して運んで、あの枝に吊して、自ら縊ッたかのごとく見せかけたに違ひないこともまたすでに睨んだ通りでした。だが、あの通り、吊り下ッてゐた場所は、幹から運んで行くのは元よりのこと、尋常ではのぼッつても行かれないやうな枝の先なのです。無論それから察すると、十中十まで舟で運んで、舟からあの枝へなにか細工をしたことに疑ひのない事實でした。しかし運んだものは死體です。なによりも緣起をかつぐ荷足り舟や傳馬船が緣起でもない死體をのせたり運んだりする筈はないのです。十中十まで土左舟であらうと睨んだればこそ、夜あかしを覺悟の上でわざわざ詮議に來たのでした。

『なるほど、さうでしたかい。えへへ……さあことだ。べらぼうめ。急に腹が減ッて來やアがッた。さあ忙しくなッたぞ』

やうやくに傳六も智惠が廻ッたと見えて、辨當わしづかみにし乍ら飛んで來たのを、名人はにこりともするもんではない。そしらぬ顏にふり向きもせずづかづかと土左舟に近づくと、穩やかに呼びかけました。

『毎晩々々奇特なことぢやな。お役舟か。それとも特志の舟か。どッちぢや』

『但馬屋身内の特志舟でござんす』

『さうか。御苦勞なことだな。揚げて來たはやつぱり心中か』

『いいえ。野郎佛をひとり、橋下で今拾ッたんでね。急いでかへッて來たんですよ』
『ほゝう、男をな。きゝたいことがある。かくしてはならんぞ。日の暮れあたりに、おまへら土左舟のうちで、死體を五ツ運んだものがある筈だがどの舟だ』
『あゝなるほど、そのことでムんすか。首尾の松の一件ぢやムんせんかい』
『知ッてをるか！』
『あそこに妙な首つりが五人あッたときいたんでね。はて變だなと思ッて、今も舟の上で兄弟と話し話し來たんですがね。日暮れ方ちよッとをかしなことがあッたんですよ。今夜からお上のお役舟は川下の方をお廻りなさることになッたんでね、ぢや、あッしども特志の舟は手分けして川上を廻らうといふんで幡隨院舟はずッと上の綾瀬川、加賀芳舟は東橋、わッちども但馬屋舟はこのあたりにしようとここで相談してをッたら、變な男が三四人やッて來てね。今そこで五人ひとかたまりの土左衞門を見つけた。功德だから俺たちであげてやる、どれか一艘舟を貸せんかと言ッたんで、加賀芳身内が何の氣なしに貸したんですよ。ところがどこで拾ッてどこへ始末したのか、佛ならこの小屋へ運んで來さうなものなのに、まもなく空舟をまた返へしに來たんでね。妙なことをしやがると思ッてゐたら、首尾の松に五人、ぶらりと下ッてゐるときいたんです。お尋

ねはそれぢやムんせんかい』
『まさしくそれだ！　どんな人相をしてゐたか覺えないか！』
『そいつが生憎、怪しい奴等たア氣がつかなんだものだからね。何一ツ見覺えがねえんですよ』
『風態はどうだ！』
『それもうッかりしてゐて氣がつかなかッたんですよ』
『せめて年頃にでも覺えはないか』
『それさへさッぱり覺えがねえんです。なんしろ月はまだあがらず、薄暗いところへ持ッてきて、向ふは初めッからそのつもりだッたか、顏をかくしてゐやがッたんでね。氣のついた事ア何にもねえですよ』
名人の手は知らぬまに頤をなで始めました。造作なく開けかけたかと思ッた道は、突如として深い霧の中へかくれて了ッたのです。睨んだ通り、土左舟を借りに來たその者たちが、あの五人を運んだに違ひない。おそらく梯子でも一緒に積んでいッて、あの枝にかけたことは疑ひない。
しかし分ッたことは只それだけなのです。どこから死體を運んで來たか、どういふ素性のものか、不審なその男たちが殺した下手人であるかどうか、誰かに頼まれて運んだものか、肝腎かな

めの詮議の蔓は全く霧の中へかくされて了ッてさらに摑みやうがないのです。

『ちとこいつ、難物だな』

『ね！……』

『なに感心してゐやがるんでえ。大急ぎでひと廻り、廻ッて來な』

『どこを廻るんですかい』

『決ッてらあ。人相も風態もつかまへどころのねえ奴等を目あてに江戸中探してみたッて、目鼻はつかねえんだ。詮議の手を替へるんだよ。かうなりや絞め殺された五人の身性を洗ふよりほかに道はねえ。噂をきいて身縁の者が引取りに來たかも知れねえから、第一に先づ北鳥越の今の自身番へいッて探ッて來るんだ。何の音沙汰もねえやうだッたら、御番所へ駈け込が這入ッてゐるかも知れねえから、北町南町兩方洗ッて來なよ』

『承知の助だ。旦那はどこでお待ちなさるんですかい』

『鼻のさきの向いた方で待ッてゐるよ。早く歸ッて來るんだぜ……』

傳六は右、右門は左り、分れて八丁堀へ歸りついたのは、とうにもう五ッを廻ッてかれこれ四ッ近い刻限でした。

しかしさすがに今宵の名人は、少し容子が違ふのです。ひとたびかうと眼をつけて詮議の手をのばしたからには、よしや途中手がかりの蔓が切れるやうなことがあッたにしても、そこからさらに思ひもよらぬ新芽の手蔓をみつけ出して、詮議の手もまた計り知られぬ方へ伸びて來るのがつねであるのに、今度のこの怪奇な事件ばかりは、ふッつりと蔓が切れたまゝで、新芽はおろかまるで見當もつかないのでした。しかも何ゆゑの犯行か、考へやうがない。星のつけやうもない。絞められた五人は船頭であること、土左舟で運んであの松へ吊したといふこと、分ッてゐるのはそればかりです。

寢もやらず名人は、頃をなでなで、ひたすらに傳六のかへりを待ちわびました。

しいんとふけ渡ッて、秋なればこそ、そゞろに悲しくわびしく、なぜともなしに身が引き入れられるやうです……。

一刻近い時がたちました。

しかし來ない。

北鳥越、異服橋、數寄屋橋と、三ケ所順々に廻ッたにしてももうそろそろ歸ッて來なければならない筈なのに、どうしたことか傳六がなかなか姿をみせないのです。

さらに一刻がたちました。

だが來ない。

足音もないのです。

『變な奴だな。また何か始めやがッたかな……』

半刻がすぎ、一刻がたつ、いつのまにか屋の棟の下る丑滿もすぎて、やがてしらじらと夜があけかゝッたといふのに、いかにも不思議でした。蹤音はおろか傳六の姿も影もないのです。

不安が俄かにつのりました。

しかしやはり姿はない。

カラリと夜が明け放たれました。

だがまるで糸の切れた凧です。

陽があがりました。

しかし依然として歸ッて來ないのです。

不安は愈々つのりました。いかな傳六にしても、いまだに梨のつぶてといふ法はない。

何かあッたに違ひないのです。

寢もやらず、身じろぎもせず、不安と不審に首長くして待ちきッてゐるとき、突然、バタバタと、只ならぬ足音が表の向ふから近づきました。

『傳六か！』

『……』

『誰ぢや！　傳六か！』

『いいえ、あの、北鳥越の者でムります』

意外にも聞けこんで來たのは、ゆうべ死體の始末をつけさせたあの北鳥越自身番の小者なのです。

名人の聲が飛びました。

『何を慌ててをるのぢや！』

『これが慌てずにをられますか！　やられました！　やられました！　とんだ事になッたんですよ！』

『死體が！』

『さうでムんす！　ゆうべ五人とも盜まれたんでムんす』

『なにッ。行方も分らぬか！』

『いいえ、それが實に氣味がわるいのでムります。ねんごろに護れとの御言葉でムりましたゆゑ、あれから死體を運んで歸ッて、辻番小屋の中へ寢かしまして目も放さず見張ッてをりましたのにいつ盗まれたのやら、ひよいと氣がつくと五人とも亡者の姿がなくなッてをりましたゆゑ、俄かに騒ぎ出して、八方へ手分けし乍ら探したところ――』

『どこにあッた！』

『ゆうべのあの枝にぶらりと下ッてゐたんですよ。それも今朝になッてやうやう分ッたんでございます。やッぱり船頭がみつけまして、血の色もなく小屋までしらせに參りましたんで、半信半疑で駈けつけましたところ、枝も同じ、場所も同じ、ゆうべの恰好そのまゝで五人とも下ッてゐるんですよ。なにはともかくと思ッてすぐおしらせに駈けつけたんでございます』

名人の顏は、さッと青ざめました。

事件は愈々怪奇に這入ッたのです。

傳六のいまだに歸らないのも不思議である。

盗み出し、あまつさへ同じ枝にまたぶら下げてあッたといふのはさらに不思議です。

『よしッ。すぐに參らう。ご苦勞ぢやが駕籠の支度させてくれぬか』

打ちのるやひたひたといッ足飛びに走らせました。

三

『邪魔だッ、邪魔だ。道をあけな！』

『御用駕籠なんだ。横へどきな！』

景氣をつけて一散走りに急ぐ駕籠にゆられ乍ら、名人もしきりと先を急ぎました。

どう考へてみてもこんな不思議はない。目も放さずちやんと見張つてゐたのに、その目の前で死體が紛失したといふのも不思議です。それが五體ともにまたゆうべと同じ松、同じ枝に吊してあつたといふのはさらに奇怪です。あまつさへ傳六が出たつきり歸らないといふのも不思議の中の不思議でした。

『まだ柳橋へかゝらぬか』

『珍らしくお急ぎですね、もうひとッ走り――、參りました！　參りました！　丁度今柳橋ですが、これから行き先はどッちでございます』

『北鳥越ぢや。自身番へやれッ』

何はともかくゆうべのいつ頃、どんな風にして盗み出されたか、それを詳しく洗つてみるのが事の第一です。

『あッ。ようこそ。面目ございませぬ。大切な預りものを飛んだ不始末いたしまして お合はせする顔もございませぬ』

つち色に青ざめて、うろたへ騒いでゐる小役人たちに迎へられ乍ら這入つて行くと、無駄がない。ゆうべそのうへに死體を置いたらしく、いまだに敷いたまゝである新莚の位置から小屋の出入り口、表の通り露路の工合、いちいちと先づ注意深く見しらべました。表の出入り口は北鳥越町の通りに面して、油障子が二本。莚の敷いてあるところはその出入り口を這入つたすぐの左り土間です。

土間につゞいて八疊敷の詰め所とその横に寢部屋が並び、詰め所の奥に湯沸し場があつて、ここにもう一つ障子一枚の出入り口があり、外は表の通りから丁度鍵の手になつてゐる行き止りの袋露地でした。

しかもその袋露地が只の露路ではない。右側には新光院といふ寺の裏塀がずッとつゞき、突き

當りは大御番組、御書院番組の廣い御組屋敷が並んで、いかにも物さびしいところなのです。

『なるほどのう。よしよし、細工するには恰好な場所ぢや。知つてをること殘らず申せよ　死骸はあの莚の上へおいたであらうな』

『左様でございます』

『ゆうべゐたのはここにゐるおまへら四人きりか』

『いいえ六人でございました』

『あとのふたりはどこへいつた』

『あちらをもういち度おしらべなさいますやうなら手をつけてはならぬと存じましたゆゑ、首尾の松の方を見張らしてございます』

『六人ともみな夜中起きてゐたか』

『いいえ、一刻替りに寢てもよい事になつてをりますゆゑ、三人づゝ入れ替つて代る代る起きてゐたのでございます』

『失なつたのはいつ頃ぢや』

『九ツそこそこでございました』

『そのとき起きてゐたのは誰々ぢや』
『手前とこの横のふたりでございます』
『しかと見てゐる前で紛失したか』
『さうでございます。三人ともこの目を六ツ光らしてをりましたのに、ふいッと消えてなくなりましたゆゑ、みなして大騒ぎになつたのでございます』
『よう考へてみい。切支丹伴天連の幻術でもさううまくはいかぬぞ。何か不思議があつた筈ぢやが、その近くに怪しい者でも尋ねて來なんだか』
『いいえ、怪しい者はおろか不思議なことなぞなに一つございませぬ。ゆうべのうちにこの自身番へ來たものは、あとにもさきにも女がたつたひとりだけでございます』
『なに、女！　いつ頃ぢや！』
『死骸のなくなるちよつと前でございます』
『それみい！　さういふ大切な言ひおとしがあるゆゑきいてゐるのぢや。女はどんな奴だ』
『いいえ、あの女は何も怪しいものではございませぬ。年の頃は二十七八でございませうか。お高祖頭巾で顏をかくした品のよいお屋敷者らしい美人でございましてな。この裏の大御番組の柳

川様を尋ねて來たが、氣味のわるい男が四人ほどあとをつけてゐて離れぬゆゑ、追ッ拂つてくれと駈けこんで來たのでございます』
『どこからのぞいた。裏か表か！』
『あの裏口からでございます。のぞいてみるとなるほど四五人、露路の奥に怪しい影が見えましたゆゑ、三人してちよつと追ッ拂つてやつただけでございます』
『よし分つた。アハハ、しやうのない奴等だのう。追ッ拂つて歸つて來たら、死骸がとッくになくなつてゐたらうがな』
『さうでございます。つひさきほどまでちやんとあつたのにもう見えませなんだゆゑ、俄かに騒ぎ出したのでございます』
『當り前だ。いつまで死骸が殘つてゐるかよ。六ツ目玉を光らしてゐるまへで紛失したなぞといふから不思議に思ふんだ。もつと言葉を氣をつけろ』
星はまさしくその女なのです。諜し合はせて裏口から見張りの三人を路地奥へおびき出したすきに素早く一味の者たちが反對の表口から盜み出したに違ひないのです。
名人のおもてにはほのぼのとして血のいろがのぼりました。

『傳六も來た筈だが見えなんだか』

『參りました。丁度なくなつた騷ぎの最中お見えになりましたが、何をお慌てか目いろを變へてこの奥へ駈けこんでいつたきり、あの方の姿が消えてなくなりましたゆゑ、なほさら氣味わるく思つてゐたところでござります』

『よしよし。もう騷ぐには及ばぬ。死骸をいつまでも首尾の松へ吊るしておいたとて何の足しにもならんから、早う始末せい』

『やつぱりここへ？』

『おまへらに預けたんではまた危ない。御番所の鹽倉へ運んで漬けておくやう手配せい』

不審は傳六の行方です。小役人たちの言葉をたよりに、名人はすぐさま露路奥へ急ぎました。

同時に目を射た品がある。

突き當りの大御番組のお長屋の門のわきに、謎のごとく十手が一本さしてあるのです。まさしく傳六愛用の品でした。

『しやうがないのう。こいつも中でなにをまごまごしてゐるな』

這入つてみると、鰻の寢床のやうな長いお組屋敷の一番奥の一軒の前に、小腰をかゞめて必死

に力味返つてゐる男があるのです。

誰でもない傳六でした。近づくまへに足音をきゝつけたとみえて、眞赤に血走つた目をふりむけると、ぽッとなつたやうに呼立てました。

『もうしめ子の兎だ。門のまへにありと目じるしの十手をさしておきましたが御覽になりましたかい』

『見たからこそここへ來たぢやねえか。何を力味返つて睨めッこしてゐるんだ』

『女、女！　怪しい女を一匹このうちの中へ追込んだんですよ』

『御高僧頭巾か？』

『さう、さう。そのお高僧頭巾なんですよ。御番所をさきに洗つてこの北鳥越へ廻つて來たらね。大切な死骸を盜まれたと言つて大騷ぎしてゐたんだ。ひよいと見るとこのお組屋敷の門前を變な女がちらくら走つてゐやがるからね、夜ふけぢやあるし、畜生め臭いなと思つたんでまッしぐらに飛んで來たら、このうちの中へすうと消えたんだ。旦那に知らせたくも知らせるすべはなし、一歩でもここを退いて逃がしちや大變と思つたからね、かうして一生懸命と張番してゐたんですよ。ゐるんです！　ゐるんです！　この通りまだ戸も閉つたきりなんだから、中でもそれと氣が

つきやがつて、乾度どこかにすくんでゐるんですよ』

なるほどぴしりと戸が閉つてゐるのです。

しかしその玄關さきも、前庭、內庭も、荒れるがままに荒れ果てて、いちめんに茫々と枯れ草ばかりでした。

『空屋敷だな』

『笑、笑、笑談ぢやねえですよ。中へ消えると一緒にまさしく女と男の話し聲がきこえたからね。たしかに人が住んでゐるんですよ』

『這入つたきり誰も出て來なんだか』

『男が出たんです。男がね、若い二十七八のいい男でした。話聲がぱッたり止んだかと思ふと、にやにや笑つて若い野郎がひとり出て來たんですが、裏も横もそれッきり戸のあいた音はなし、女はどこからも逃げ出した氣配もねえからね。たしかにまだこのうちにゐるんですよ』

きくや名人がにやりと笑ひました。

『な、な、なにがをかしいんです！　笑ひごッちやねえんですよ。こッちやひと睡寢もせず腰骨を痛くして張番してゐたんだ。あッしのどこがをかしいんですかよ』

『揃ひも揃つて間抜けの穴があいてゐるからをかしいんだ。百年空屋の前で立ちん棒したつて、牝猫一匹出て來やしねえよ』

『馬鹿言ひなさんな。男と女とふたりでたしかに話をやつたんだ。この耳でちやんとその話し聲をきいたんですよ。この目で男は出て來たところをたしかに見たが、逃げこんだお高祖頭巾の女は、半匹だつて出て來たところを見ねえのだからね。溶けてなくなつたら格別、でなきやたしかにゐるんですよ』

『しやうのねえ奴だな。八人藝だつてゐる世の中ちやねえか。ひとりで男と女のつくり聲ぐれえだつて出來らあ。年の頃は二十七八、いい男が出て來たといつたそいつが逃げこんだ女なんだ。大手ふり乍ら目の前を逃げられてなにをぼんやりしてゐたんだい。論より證據、中は空屋敷に違ひねえから開けてみなよ』

案の定、戸をあけると同時に、ぷうんと鼻を刺したのは、屋のうちいちめんに漂ふ黴の匂ひです。長らく大御番組小役に空席でもあつて、ここに組住ひをしたものがないのか、たゝみ、建具、荒れるにまかせたがらんどうの空屋でした。

部屋は七ツ。

女の姿はおろか人影一ッある筈はない。しかしその代りに目を射たものがある。一番奥の部屋の床の間の上に、お高僧頭巾と女の衣裳がひと揃ひ、人を小馬鹿にしたやうに置いてあるのです。

『畜生め、さてはあの女蛇、ひと皮ぬいで逃げやがつたね。それならさうとぬかして逃げりや腰の骨まで痛くしやしねえのに、いまいましいね』

『今頃ごまめの齒ぎしりやつたつておそいや。ぶつぶつ言ふひまがあつたら戸でもあけろい』

先づなにはともかくと、傳六に雨戸をあけさせて明るい縁側へ衣裳を持ち出し乍ら、仔細に見しらべました。

お高僧頭巾はもとより、着物も羽織もどつしりと、目方の重いちりめんでした。それに帶が一本。これもすばらしく品の凝つた糸錦です。

頭巾の色は古代紫。着物は黑地に亂菊模様の小紋ちりめん。羽織も同じ黑の無地、絞は三蓋松でした。

武家の妻女ならば、先づ二百石どころから上の高祿を喰んだものに違ひない。いづれにしても品の上等、着付けの凝つたところをみると、相當由緒ある身分の者です。

『洒落たものを着てゐやがらあ。傳六さまの顏でいきや、どこの質屋だつてたつぶり十兩がところは貸しますぜ』

『默つてろ。ろくでもないことばかり言つてゐやがる。さつき男に化けていつたときどんな氣付だつた』

『黑羽重の着流しで、一本獨鈷の博多でしたよ』

『刀はどうだ。さしてをつたか』

『ゐねえんです。今から思やそいつがちつと變なんだが、丸腰に白足袋雪駄といふのつぺりとした裝でしたよ』

『頭は？』

『手拭ひ』

『かぶつてをつたか』

『のせてゐたんです』

無論その手拭は、髪の工合を見られまいと隱したものに相違ない。男が女に化けたものか、女が男に化けたものか、いづれにしてもまへからちやんと用意して、下に男ものを着込んだ上にこの女ものを着付てここへ追ひこまれた窮餘の末に、上のひと皮をぬぎすて乍ら悠々と大手をふつ

て、傳六の目のまへを逃げ去つたものに違ひないのです。

『ぼんやりしてゐるからこの通りいつだつて手數がかゝるんだ。もういつぺんみせろ』

なにか手懸りになるものはないかと、今いち度取りあげて丹念にしらべ直しました。

帶にもこれと思はれる手懸りはない。

頭巾にもない。紋にもない。ちりめんも普通。染も普通。しかしその目が袂の裏へいつたとき、ちらりと見えたものがある。

何の呪ひか、着物の袂にも羽織の袂にもその裏の隅に、赤い絹糸が二本縫ひこんであるのです。

同時でした。

『何でえ。べらぼうめ。おいらがすこうし念を入れて調べると、忽ちかういふ風に智惠箱が開いて來るんだからな。さあ眼がついたんだ。駕籠の用意しろ』

『忝けねえ。行く先やどつちですかい』

『一石橋の呉服後藤だよ。この絹糸をようみろい。江戸にかずかず名代はあるが、呉服後藤に碁は本因坊、五丁町には御所櫻と手毬唄にもある呉服後藤だ。只の呉服屋ぢやねえ。江戸大奥お出入り、お手當米二百石、後藤縫之介と苗字帶刀までお許しの呉服師だ。位が違ひます、お仕立ても違ひますと、世間へ自慢にあそこで縫つた品には、この通り紅糸をふた筋、縫ひ込んでおくのが店代々の仕來りだよ。このひと揃ひの着手もおそらくは城中お出入り、大奥仕へに緣のある者に違えねえ。早く呼んで來な』

『畜生め。さあ事が大きくなつたぞ。いつまで經つても旦那の智惠は無盡藏だね。やあい、人足！人足！　江戸一足の早え駕籠屋はゐねえかよ！』

飛び出した聲の騷がしさ。右門の智惠も時知らずに無盡藏だが、傳六の騷々しさも時知らずです。まもなく仕立てた駕籠に乘ると名人は、謎のひと揃ひを大切に打ち抱へ乍らひたすらに一石橋へ急がせました。

四

呉服後藤に金座後藤、橋を挾んで向ひ合つてゐるふたりの後藤が自慢の金で懸けた橋だから、五斗と五斗とを併せて一石橋と名がついたといふお江戸名代の橋です。

その橋袂に、總格子六間の間口を構へて、大奥御用呉服所と染めぬいた六間通しの暖簾が、堀から吹きつける風にはたはたとはためき乍ら、見るからにいかめしい造りでした。

勿論お客も、町人下賤の小切れ買ひではない。城中お出入りの坊主衆、大奥仕への腰元お局、或はまたお旗本の内室といつたやうな身分出緒のいかめしいお歴々ばかりなのです。

駕籠を乘りつけて、ずいと這入つて行くと、默つて名人は八丁堀目じるしの卷羽織をひねつてみせました。

『あッ、なるほど。分りました。おしらべの筋は？』

『これぢや』

手にしてゐたひと揃ひをどさりと目のまへへ投げ出し乍ら、無駄を言はずに三蓋松の紋を指ししました。

店の者もまたここらあたりに勤めてゐる手代となると、諸事無駄がないのです。袂の裏の紅糸をしらべて、自分のところで仕立てた品であるのをたしかめると、大きな横帳をしきりに繰つてゐたが、やうやく探しあてたとみえて、聲をひそめ乍ら答へました。

『たしかにござります。先月の二十一日に御注文うけまして、當月二日にお屆けいたしました品でござります』

『注文主は誰ぢや』

『ちと御身分のあるお方でござりまするが』

『承知の上でしらべに參つたのぢや。奥仕へのお腰元か』

『いいえ、奥御醫師でござります』

『ほゝう、お脈方とのう。しかし御醫師にもいろいろある。御外科、御口科、御眼科、御婦人科。いづれの方ぢや』

『いいえ、お鍼醫の吉田法眼さまでござります』

『當人か』

『御後室さまでござります』

『なに、御後室とのう。なるほどさうか。やはり女だつたか！　住ひはいづれぢや』

『法眼さまがお亡なりになりましてから二年この方、小石川の傳通院裏に御隱宅を構へて、若黨ひとりを對手に御閑靜なお暮しをしていらつしやるとかのことでございます。この品もそちらへお屆けいたしました』

『よし、分つた。口外するでないぞ。――駕籠屋！　傳通院裏ぢや』

謎の道は、はしなくも紅糸二本から解けかゝつて來たのです。

『ありがてえね。ちやんとかういふ風に骨を拾つて下さるんだからな。お眠くはございませんかい。お疲れなら肩でも揉みませうかい』

『つまらねえ機嫌をとるな。駕籠に乘つて肩が揉まれるかい』

『いいえね、揉めねえことは萬々分つてるんだが、氣は心でね。これでもあつしや精一杯お世辭を使つてゐるんですよ。――そら來た。傳通院の裏に二つはねえ。あの三軒のどれかですぜ』

多分そのあたりだらうと見當をつけていつてみると、案の定、一番奥が探し求めたその隱宅でした。隱宅といふとふた間か三間の小さな家にきこえるが、法眼と言へば位は最上、祿は百五十石、羽振りを利かした大奥仕へのお鍼醫の未亡人がこの世を忍ぶ住ひです。門の構へ、廣い庭、むしろ邸宅と言ひたいやうな宏大もない住ひでした。

その廣い庭の中を通りがかりに、建仁寺垣のすきからひよいとみると、人影がある。

女です。

切りさげ髪に、紫いろの被布を着て、今をさかりに咲きほこつてゐる菊の中を、しやなりくなりとさまよつてゐる容子は、まさしく當の御後室でした。

だが、いかにも變な女なのです。

たしかに星と睨んだお高僧頭巾の女は二十七八の別嬪と言つたのに、傳六のしてやられた男も同じ二十七八ののつぺりとしたやさ男だつたといふのに、これはまた似てもつかぬ四十すぎの大年增なのでした。そのうへに肉はでつぷり、顏は寸づまり、押せばぶよんと水氣が出さうなほどにも脂ぎつて、どんなにうまく化けたにしても、たうていやさ男なぞに化け切れるやうな女ではないのです。

『畜生め、さあいけねえぞ。鯨の油に漬けたつて、いちんちひと晩でかうは肥やしが利かねえんだ。くやしいね。急にまた空模樣が變りましたぜ』

『ちつと脂肉が多すぎるな』

『おちついた顏をしてゐる場合ぢやねえんですよ。たしかにこの隱宅へあの三蓋松のひと揃ひを屆けたといふからにや、首尾の松の首ツつりもこの家のうちに根を張つてゐるに違えねえんだ。お城御用まで承はる後藤の店で嘘をつく筈はねえ。乘り込んでひと洗ひ洗つたらどうでございます』

『やかましい！　誰だッ。そんなところでガンガン言ふ奴あ！』

そのとき、ぬッと門わきの下男部屋からのぞいた顏がある。

三十四五のふてぶてしい男でした。後藤の店で話しの若黨に違ひないのです。

傳六の目から當然のごとくに火が飛び出しました。

『ガンガン言ふ奴たア何をぬかしやがるんだ。人を見て物を言ひねえ！　うぬアこのうちの下ッ端か！』

『下ッ端ならどうだと言ふんだ。これみよがしに十手をふりまはしてゐるが、うぬア、不淨役人の下ッ端か！』

『野郎。ぬかしたな！　不淨役人の下ッ端たアどなたさまに對ッて言ふんだ。詮議の筋があッて來たんだ。うぬのうちア三蓋松か！』

『知らねえや。栃面棒め！　かりにも法眼の位を頂いたお方様の御隱宅なんだ。うぬらごとき不淨役人の詮議うける覺えはねえ。用があッたら大目付様の手形でも持ッて來やがれッ。ふふんだ。へうろく玉めがッ』

『野郎ッ。おッそろしく口のわるい野郎だな。まてッまてッ河童野郎ッ。用があるんだ待ちやがれッ』

おこぜのやうになつて追ひかけようとしたのを、

『よしな！　傳六ッ』

うしろから名人が靜かに呼びとめて、あれを見なといふやうに、にやりとやり乍ら頃でそこの下男部屋の中をしやくりました。

提灯があるのです。

それも三張り。

只の提灯ではない。

三張りともに、深川、船宿、於加田、と拔き字の見えるなまめいた提灯が、無言の謎を包んで下男部屋の壁につり下ッてゐるのです。

『へへえ。さうか。なるほどね』

傳六の目もにやりと笑ひました。いかに血のめぐりが大まかに出來てゐたにしても、これをみては不審が湧かないといふ筈はない。詮議手入れを拒むほど、位に驕る法眼の隱宅になまめいた船宿の提灯なぞのあることからしてがすでに不釣合なのです。ましてや深川の船宿と言へば、男女忍びの出合ひ茶屋を看板の穩やかならぬ料亭でした。その提灯が、しかも三張りもあるところをみると切りさげ髪に紫被布で行ひ澄ましてゐたあの御後室が、若黨を供にしばしば忍んでいッて、そのたびに借りて歸つたものがいつとはなしに三張りもたまッたものに相違ないのです。

『河童野郎、吠え面掻くなよ。この通りおッかねしうしろ楯がおつき遊ばしていらッしやるんだ。駕籠ですかい』

『決ッてらあ。一眼去ッて一眼來たるたアこのことよ。早くしな』

乘ると同時に目ざしたのはその深川でした。

暮れるに早い秋の陽はもう落日が迫ッて、七橋、八橋、七堀、八堀と水の里の深川が近づくに隨ひ、大川端はいつのまにかとッぷりと夕闇にとざされました。

さむざむと冷え渡ッて冷えは強いが、冷えればまた冷えたで相合炬燵のさし向ひ、忍びの夢路の寢物語り、肌のぬくみを追ッて急ぐ男と女の影が、影繪のやうに露地から露地をぬッて歩いて、秋深い辰巳の右左り、またひとしほの風情です。

『畜生ッ、ふざけてらあ。ちよろりと今ふたり、天水桶の陰へかくれましたよ。あんなところでちゃくるつもりに違えねえですぜ』

『そんな詮議に來たんぢやねえ。於加田を探してゐるんだ。早く見つけなよ』

『いいえ、物事は總じてこまかく運ばねえと兎角尻がぬけるんだ。ある！　ある！　あの角にあるのがさうですよ』

ぐいと大川からこッちへ切りこんでゐる小堀の角の出ッ鼻に、なるほど於加田と書いた行燈が、ゆらめく水に灯影を宿して見えました。

無論すぐにも詮議に押し入るだらうと思はれたのに、つねに周到細密、目の光らせどころにそつがないのです。家のまはり、川筋の容子、何か不審はないかと、そこの小陰に佇み乍ら目を光らせました。

同時に名人の身體が、はッとなつたやうに泳ぎ出しました。

あるのです。

不思議な船が、大川岸に四艘、小堀の中に三艘、人待ち顔につないであるのです。

それも只の不思議ではない。七艘ともにメ縄を張ッて、どの舟の船頭もまたいち樣に同じメ縄を腰へ卷きつけ、人目にたゝぬやうに船龍燈を袖でおほひ乍ら、今か今かと舟宿から出て來る客を待ちうけてゐる容子でした。

『ほゝう、そろそろと匂ッて來たな。鰻の匂ひだか〆ザシの匂ひだか知らねえが、只の匂ひちやねえやうだぜ。引ッこんでな！　ひよこひよことそんなところへ顔を出すなよ！』

叱ッて、ぴたり、塀ぎはへ身をよせた主從の耳へ、船宿の裏二階から小さくそッと呼んだ小婢

の聲がきこえました。

『船頭さん、お支度は？』

『いつでもいいよ』

『さう。ぢや、萩の間のお客さんからお送りするからね。順々にこッちへ舟をたのみますよ』

ギイギイと、櫓音をころし乍ら忍び寄ッて來たのと一緒に、板塀がぽッかりと口をあけて、案内の小婢のあとから、あたりを憚り〳〵、女の姿が現れました。

十七八の、まだ肩あげもとれないやうな下町娘なのです。

『いッてらッしやいまし。どうぞごゆッくり。船頭さん。しッかりたのむよ』

『おい來た。大丈夫だよ』

拾ひこむやうにして娘を乗せると、奇怪な舟はろ音を急がせ乍ら、ぐんぐんと大川を上へのぼりました。

入れ違ひにまたひとり。

しかし今度は三十すぎた奥方風の女です。

『ごゆッくりどうぞ……』

送り出したあとからまたひとり女の姿が、黒板塀の口をくぐッて現れました。さらに年のふけた五十近い金持の後家らしい女です。

その舟も同じやうに、ろ音を急がせ乍ら、忍びやかに大川を上へ上へとのぼりました。

つゞいてまたひとり。

これは二十二三の仇ッぽい鐵火者でした。

あとから女がまたひとり。

入れ違ひにやはり女がまたひとり。

最後に出て來た女は、まさしくどこかのお屋敷勤めの腰元らしい中年増です。

名人右門の目は電光のやうに輝きました。

いッてらッしやい。ごゆッくりどうぞ、と意味ありげに言ッた聲も奇怪です。出て來た七人が七人ともに女ばかりだッたのも奇怪です。

そのうへに舟は、一齊に上へ上へと前後して川をのぼりました。

しかも舟には、〆縄が張ッてあるのでした。

船頭の腰にもまた奇怪なことに〆縄が見えました。

『船頭！』

『船頭！』

首尾の松に吊してあッたのも、まさしくその船頭なのです。

『舟だ。急いで一挺仕立てろッ！』

『合點でござんす』

車輪になッて傳六が見つけて來た二挺艪の傳馬に飛び乘ると、

『あの七艘ぢや。見咎められぬやうに追ひかけろッ』

ぴたりと舟底に身をつけて、見えがくれにあとを追跡しました。

それとも知らずに七艘の不思議な舟は、不思議な女をひとりづつ乘せ乍ら、ろ音をころして岸傳ひにひたすら上へ上へと急ぎました。

永代橋をくぐッて新大橋、新大橋をくぐッて兩國橋、やがてさしかゝッて來たのは、謎のあの五人を吊してあッた首尾の松です。

十日の月が雲を冠ッて、大川一帶はおぼろ宵の銀ねずみでした。

前後し乍らのぼッていッた奇怪な舟は、その首尾の松へさしかゝると、七艘ともにするりと舳

を右へ替へて、そこの横堀を奥へ、ぐんぐんと進みました。

右は松前志摩守、左も小笠原家の下屋敷、どちらを見ても、人影一ツ灯影一ツ見えない寂しい屋敷ばかりで、突き當りはまた魔の棲み家のやうな廣大もない、本所お倉の高い建物なのです。

突き當ッて右へ折れると、舟の這入ッていッたところがまたいかにも奇怪でした。寺のやうにも見えるのです。お宮のやうにも見えるのです。見やうによつては御殿のやうにも見えるのです。その不思議な建物の中へ、右の水門から一艘、左の水門から一艘、前の水門から一艘といふ風に、時をおいては順々に姿を消しました。

『はてね。おまちなさいよ』

しきりと首をひねッてゐたが、たまには傳六も金的を射當てることがあるのです。

『あれだ、あれだ、この建物アましかにお富士敎ですよ』

『えらい事を知ッてゐるな。どこできいたんだ』

『七ツ屋ですよ。質屋のことを言や旦那はまた御機嫌がわるくなるかも知らねえが、床屋と質屋と錢湯と、こいつア江戸の噂のはき溜なんだ。こなひだ一張羅を曲げにいッたとき、番頭がぬかしたんですよ。世間が繁昌すると、妙なものまでが流行り出すもんです。近頃本所のお藏横にお

富士教ッてえのが出來て、大層もなく繁昌するといふ話だがご存じですかいとぬかしたんでね。御嶽教、扶桑教といろいろ聞いちやをるが、お富士教ッてえのはあッしも初耳なんで、今に忘れず覺えてゐたんですよ。本所のお藏と言やここよりほかにねえんだ。まさしくこれがそのお富士教に違えねえですぜ』

『どういふお宗旨だかきいて來たか』

『そいつが少々をかしいんだ。御富士教ッてえいふからにや、富士のお山でも拜むんだらうと思ッたのに、心の闇え、腰の病ひ、氣鬱にとり憑かれてゐる女が詣ると、嘘を言ッたやうにけろりと癒るといふんですよ』

『道理でな、女ばかり這入りやがッた。それにしても御信心のお善女さまが、遠い川下の船宿からこッそり通ふのが腑に落ちねえ。まして夜詣りするたアなほさら不思議だ。どこかに這入るところはねえか探してみな』

しかしどこにもない。あッても門はぴしりと閉ッて、水門から消えた舟も這入ッたりその水門もまたぴたりと閉ッて、塀をのり越えるよりほかに、中へ押し入る途はないのです。

『面倒だ。猿の眞似をしてやらうぜ。船頭、舟をあの横の石垣へつけなよ』

ひらりと飛びうつると、えッとばかり氣合をこらして身ををどらせ乍ら、築地づくりの高塀へ片手をかけたかとみるまに、するすると造作もなくよぢのぼりました。その足につかまつて、傳六もよたよたとよぢのぼりました。

中は豫想の外に廣いのです。

拜殿らしいのが前にひと棟。

內陣と覺しき建物がその奥にひと棟。

渡殿　廻廊、社務所、額殿、祓殿、それに信者溜り、建物の數は七八ッも見えました。內庭にはまた水門から堀がつゞいて、船頭たちはどこへ姿を消したか、ぬしのない〆縄舟が謎のごとくに見えました。

鉦もきこえるのです。

鈴の音も、笙篳篥の音も、さうかと思ふと太鼓の音がどろどろどんどんと傳はりました。

何の祈禱が、祈りがもう初まッてゐるらしいのです。その音をたよりに名人は、一歩一歩と邊りに心を配り乍ら、拜段近くへ忍びよりました。

同時にピカリと目が光つた。

張りめぐらしてある幔幕に、あの三蓋松の紋所が見えるのです。

吊してある大提灯にも同じ紋が見えるのです。

『匂ッて來たな。出るな！　出るな！　飛び出して姿を見られたらあとの手數がかゝらあ。こッちへ隱れて來なよ』

影も見咎められないやうに身を隱し乍ら、拜殿へ近づくと、廻廊にそッと上ッて、闇の中から目を光らしました。

ぼうと不氣味にまたたいてゐる燈明の灯りの中に、樂人たちの姿は見えるが、肝心の信者の姿は、舟で消えたあの女たちの姿はひとりも見えないのです。

『じれッてえね。どこへもぐりやがッたらうね』

『默ッてろ』

目交ぜで叱り乍ら、息をころして身をひそませてゐたその目のさきへ、ぽッかりと內陣の奧から人影が浮き上りました。

女です。船宿の裏で見かけたあの金持の後家らしい大年增でした、何がうれしいのか、厚ぼッたい唇に、にッたりとした笑みを泛べて、目が怪しく輝き、その兩頰にはほんのりとした赤味が

見えました。

追ふやうにそのあとからもう一ッぽッかりと、同じ內陣の奧から人影が浮きあがりました。

やはり女です。

同時でした。傳六がツンと袖を引いてさゝやきました。

『畜生ッ、あれだ。あいつだ。たしかにあのお高祖頭巾の女ですぜ』

『なにッ、見間違ひぢやねえか』

『この目でたしかに見たんです。年恰好、別嬪ぶりもそッくりですよ』

いかさま年は二十七八、髪はおすべらかしに、緋の袴をはいて、紫綸子の齋服に行なひすました姿は、穩やかならぬ美人なのです。

肩を並べて拜殿橫の渡殿までやッて來ると、魅入るやうな目を向けて大年增に何か囁き乍ら、暗い庭裏へ送りこんでおいて、合圖のやうに渡殿の奧をさしまねきました。

同時にいそいそと渡殿を渡り乍ら出て來た影はたしかに十七八のあの初ひ〳〵しい下町娘です。

待ちうけ乍ら、同じ魅入るやうな目で笑ひかけると、何が恥しいのかパッと頰に朱紅を散らし

た娘の肩をなでさするやうにしてすうとまた、今出て來た内陣の奥へ消えました。

『ふふん。とんだお富士教だ。おいらの目玉の光ッてゐるのを知らねえかい。おまへにや目の毒だが仕方がねえや。ついて來な』

咄嗟に何事か看破したとみえて、むッくり身を起すと躊躇なくそのあとを追ひました。

内陣の裏には奇怪なことにも小部屋があるのです。

杉戸が細目に空いて、ちかりと灯りが洩れてゐるのです。

しかも小部屋のうちにはなまめいた几帳があッて、その陰からちらりと容易ならぬ品がのぞいてゐるのです。

夜着と枕なのでした。

『たわけッ。神妙にしろッ』

ガラリとあけると同時です。

すさまじい啖呵の突き鐵砲を矢庭に一發くらはせました。

『むッつりの右門はかういふお顔をしてゐらつしやるんだ。ようみろい！』

えッ。といふやうに緋の袴はふり向き乍ら、慌てて夜着を几帳の陰に押しかくさうとしたのを、

『おそいや！　たわけつ、ぴかりとおいらの目が光りや、地獄の一丁目が近えんだ。ぢたばたするない！』

血いろもなく打ちふるへてゐる娘をハネのけるやうにして先づうしろへ押しやッておくと、ぬッと歩みよッてあびせました。

『化けの皮剝いでやらう！　かうと睨みや萬に一ッ眼の狂つたことねえおいらなんだ。うぬ、男だな！』

『何を無禮なこと仰有るんです！　かりそめにも寺社奉行榛からお許しの御富士教、わたしはその教主でござります。神域に押し入ッて、あらぬ狼藉いたされますると、御神罰が下りまするぞ！』

『笑はしやがらあ。飛んでもねえお富士教を拜みやがッて、御神罰がきいて呆れらあ。四の五の言ふなら、いち枚化けの皮を剝いでやらう！　こいつあ何だ！』

パッと身を泳がせると、胸を押へました。

乳房はない。

ある筈もないのです。

身をよぢッて逃らはうしたのを、

『ぢたばたするねえ。もういち枚剝いでやらあ。こいつア何だ！』

草香流片手締めで締めあげ乍ら、パッと齋服を剝ぎとりました。三蓋松のあの紋が下着に見えるのです。

『幔幕も三蓋松、これも三蓋松、大御番組の空屋敷にぬぎすてた着物の紋どころも同じこの三蓋松だ。小石川傳通院裏吉田法眼様の御後室へ、たしかに三蓋松の紋つきちりめんをひと揃ひお屆けいたしましたと、呉服後藤の店の者が言ッてるんだ。あの脂ぎッた御後室も御利益うけてゐる信者に相違あるめえ。ちりめんのあのひと揃ひも、御賽錢代りにうぬへ寄進した品に違げえねえんだ。北鳥越の一件もうぬの小細工、首尾の松の一件も同じうぬの小細工、これだけ圖星を指せばもう文句はあるめえ。どうだ。すッぱり吐きなよ』

『……』

『吐かねえのかい！　むつつり右門にや智惠箱、啖呵の小ひき出し、女に化ける手だけはねえが、たゝみ文句の用意はいくらでもあるんだ。これだけの狂言を打つからにや、うぬも只の鼠ぢやあるめえ。男らしく恐れ入ッたらどんなもんだ』

刹那でした。

『仕様がねえや。いかにも泥を吐きませうぜ』

にたりと笑ッたかと思ふと、果然男だッたのです。目は險を帶び、眉に、顏に、妖しい殺氣が湧いたかと見るまに、ガラリとすべての調子が變りました。

『江戸の女をもう二三百人たぶらかさうと思ッたが、何もかも洗ッて來られちや仕方があるめえ。いかにも首尾の松へ五人の船頭をしめ殺して吊りさげたのはこの俺だ。自身番からあの夜ふけ盗み出したのもこの俺の細工だ。しかし只ぢや年貢を納めねえんだ。ひよッくり右門、これでも喰らへッ』

さッと立ち上ると、懷中奥深く忍ばしてゐたドスを拔き拂ッて名人の脾腹目がけ乍ら突き刺しました。と見えたのは一瞬です。

『見損ふなッ。草香の締め手を知らねえのかい！』

聲と一緒にギュッとドスもろともその利き腕をねぢあげたかとみるまに、グッとひと突き、拳の當て身が脇腹を襲ひました。

『おとなしく寢ろい。慈悲を忘れたことのねえむッつり右門だが、今夜ばかりや氣が立ッてるん

だ。傳六、早くこいつを始末しな』

『いいえ、そ、そ、それどころぢやねえんだ。ほらほら、あいつも逃げた、こッちも逃げやがッた。女も船頭も太鼓野郎も、みんなバラバラと逃げ出したんですよ。手を！　手を！　ひとりぢや追ひ切れねえんだ。早えところ手傳ッておくんなせえよ！』

『そんなものほッときやいいんだよ。根を枯らしや小枝なんぞひとりでに枯れらあ。息を吹きかへさねえうちに、この赤い芋蟲を舟まで背負ッてきな』

どさりと投げ出すやうにこかし込だのを待ちけて、舟は二挺艪を揃へ乍らギイギイと漕ぎ出しました。

『女も女だね。こんな野郎にだまされたとなりやくやしくならあ。――生き返へるにやまだ早えや！　ついでにおれがもう一本十手の當て身をくらはしてやらあ。もう少し長くなッてろい！』

傳六も今夜ばかりは氣が立ッてゐると見えるのです。

『つら、見るのも、太え野郎だ。それにしても何だッて野郎め、船頭を五匹も絞めやがッたんですかね。盜んで掛け直したところが分らねえんですよ』

『決ッてるぢやねえか。金と女を兩天秤にかけてこんなあくどい狂言を打ッたんだ。手先に使ッてをつたあの五人の川船頭が洩らしてならねえ秘密を洩らしさうになッたんで荒療治をやつたのよ。掛け直したは殘つた船頭たちへの見せしめさ。もッと理詰めで考へる稽古をしろい』

『なるほどね。大きにそれに違げえねえや。久方ぶりに旦那も荒療治をおやんなさいましたな』

『當りめえだ』

吐き出すやうに呟くと、毒手にかゝつた女たちを憐むやうに、默々と目をとぢました。

左り刺しの匕首

一

その第三十五番手柄です。

鼻が吹き千切られるやうな寒さでした。

全くひと通りの寒さではない。いッそ雪になッたらまだましだらうと思はれるのに、その雪も降る氣色がないのです。

『おゝ、つめてえ、チキシヤウ。やけにまた寒辛しを利かしやがらあ。だから物ごとの正直すぎるッてえのは嫌えなんだ。たまには寒中にほてッてみろよ。冬だからだッてなにもかう正直に凍みなくたッていいぢやねえか。――ゐるんですかい』

朝も今、夜があけたばかり、――この寒いのにこんな早く變な聲がしたからには勿論傳六であらうと、ひよいとみると、傳六は傳六だッたが變な奴でした。しよんぼりと立ッてめそめそ泣いてゐるのです。

『なんだ』

『へ？……』

『へぢやないよ。たッた今がんがんとやかましく我鳴ッて來たのに、なにを急にめそめそやるんだよ。寒にあてられたのかい』

『あッしが泣いたからッていちいちさう冷やかすもんぢやねえんですよ。悲しいのはあッしぢやねえんだ。かう暮れが押しつまッちや人づき合ひをよくしておかねえと、どこで誰に借錢しなくちやならねえとも限らねえからね、そのときの要愼にと思ッてちよッとおつき合ひに泣いたんです。あれを御覽なさい。あれを――』

『……？』

いぶかしい言葉に起きあがッて、指さした庭先を見眺めると、しよんぼりと佇ずんでゐる人影が見えました。

袴、大小、素はだしに髪は素れて、その袴も横に歪み乍ら、なにか慌てふためいて必死とこへ駈けつけて來たらしい容子が見えるのです。

『御牢屋同心だな！』

『そ、そ、さうなんですよ。ちらりと見たばかりで星をさすたア偉えもんだね。あの旦那、御親類ですかい』

『腰にお牢屋の鍵束をぶらさげていらッしやるぢやねえか。いちいちとうるせえ奴だ。御心配さうにしていらッしやるが何か起きたのかよ』

『起きた段ぢやねえんだ。シカジカ斯々、こいつとてもひとりの力ぢや手に負へねえとお思ひなすッたとみえてね、先づなにはともかくと、あッしのところへ飛んでおいでなすッたんですよ。うれしいじやござんせんか。その御氣性がね、傳六はむッつり稲荷の門番なんだ、奥の院を拜むには先づあッしに渡りをつけなきやといふわけでね、來られてみりやあッしも、かういふ氣性なんです。べらぼうめ、ようがす、引きうけました。牢屋で人が斬り殺されるなんて途方もねえことがあッてたまりますかい、うちの旦那は人一倍寢起きのわるい人なんだ。あッしが特別念入りに目ざまし太鼓を叩いてやるからおいでなさいと、かうして一緒に力をつけつけ——』

『うるさいよ！　なにをひとりでべらべらやッてゐるんだ。おまへなんぞに聞いてゐたら手間がとれらあ。邪魔ッ氣だからこッちへ引ッこんでゐな』

『いいえ、旦那、お默り！　あッしがしやべり出したからッて、さうさう目の讐にしなくともいいんですよ。話しには上手下手、物にはコツといふものがあるんだ。コツがね、そのコツをよく心得てゐるからこそ、あッしがあちらの旦那に代ッて、手間をとらせず、無駄を言はず、事のあらましをかいつまんで、呑みこみのいいやうに物語らうッてえいふんぢやねえですか。ちやんとエンコしておとなしくきいていらッしやい。いいですかい。あちらの旦那は御牢屋同心なんだ。御牢屋同心てえ言や、傳馬町の囚罪人を預ッていらッしやるやかましい役柄なんです。名は牧野源内さま、お預りの牢は平牢の三番部屋、今十九人といふ大連が三番牢に打ちこまれてゐるといふんですがね。ところがだ、その三番牢で、ゆうべ人斬りがあつたといふんですよ。人斬りがね、只の人殺しぢやねえ、罪人がひとり斬られて死んでゐるといふんだ。旦那もご存じでせうが、ふとん蒸し、水責め、逆吊し、罪人同志の間で双物を使はねえ人殺しは、これまでもちよくちよくねえわけぢやねえんです。しかし双物を使ッた人殺しは天地開闢以來初めてなんですよ。なんしろ、切れもの、双物、双のついてゐるものは一切御禁制の御牢内なんだからね。そこでぐさりとひとり、胸元をやられて死んでゐたといふんです。不思議ぢやござんせんか。え！　旦那』

『……』

『どうですかよ。不思議ぢやどさんせんか。四寸格子のはまッた御牢屋の中です。ちやんと鍵がかゝッて、その鍵はあの源内旦那が後生大切と腰に結はひつけていらッしやるんだ。外から人の這えッた筈はねえんです。ねえとしたら中の十八人のうちのどやつかゞやッたに違げえねえんです。ところがその御牢内へは刄物はおろか、ハの字のつくものも持込むことは出來ねえですよ。それを言ふんです。それをね、あッしがしやべり出すと、かれこれ威張ッた口をお利きなさるが、この通り傳六の話しには無駄がねえんだ。ちやんと筋が通ッて、ひと口呑んだら身の毛がよだつといふコクのある話をするんですよ。くやしかッたらとッくり頃をなでて考へてごらんなさいまし……』

なるほど不思議至極、奇怪千萬な話です。傳六の言ふ通り、平牢の、それも大勢投げ込み牢の中では、牢附合の悪い者、牢名主に逆らッた者なぞは、深夜、逆吊し、水責め、或はまたふとん蒸しなぞの牢制敗に出會ッて、囚人が囚人に殺される例はまゝあることでした。しかし刄物で斬られたといふためしはない。あッたとしたら、いかさま合點の行かぬことです。自づと名人も色めき立ちました。

『鍵の工合、外から這入ッたものがないかどうか、入念におしらべでござッたらうな』

『それはもう仰せまでもござらぬ。なにより肝腎なこと、念に念を入れてしらべたが、さらに外より這入ッた形跡がござらぬゆゑ、不審に堪へぬのぢや』

『見つけたのはいつ頃でござる』

『ほんの今しがたぢや。丑滿に見廻ばッたときは何の異狀もなかつたのに、明け方廻ッてみると、十九人がひとり缺けてゐるのぢや。それが今申した通り、胸元を刺されて血に染まッてゐたのでな、騒ぎ出したらこの源内の恥辱と思うて、こッそりと同牢の者十八人を洗ッてみたのぢやが、下手人はおろか刄物さへも見つからぬのぢや、それゆゑうろたへて、いッそ手前ごときがまごまごといぢくり廻はすよりも、そなたの御助力仰いだが早道と思うて、取るものも取り敢へず駈けつけたのぢや。面目ない……、面目ない……。お寒いところお氣の毒ぢやがお力お貸し下されい』

『ようござる。お互ひお上仕へ、災難苦勞は相見互ひぢや。すぐ參ッて進ぜよう。御案内召されい』

『忝けねえ!』

『なにをよろこんでゐるんだ。それが無駄口だといふんだよ。早く履物でも出しな』

『いちいちとそれだ。源内旦那の代りにこの傳六がお禮を言ッてゐるんですよ。諸事この通り拔け目のねえところが他人にや出來ねえ藝當なんだ。へえ、お履物――』

『おいらぢやねえや、源内旦那が跣足ではさぞお冷めたからうと思ッて、履物をと言ッたんだよ。間のぬけたことばかりやッてゐやがッて、この通り拔け目がねえもねえもんだ。――ではお伴仕る。冷えますな……』

傳六なぞとは氣のわきどころが違ふのです。お江戸自慢の卷羽織に朝風を孕んで、血の氣もないほどに打ちうろたへてゐる源内をいたはりいたはり、越中橋から江戸橋、大傳馬町、小傳馬町と、ひた急ぎに傳馬町の大牢へ急ぎました。

二

一番牢、二番牢といッて、三番牢は同じ棟の一番奥でした。

目ばかりのやうな男、髭ばかりのやうな男、骨ばかりのやうな男、あの世の風が吹く牢屋です。うすべり一枚ない板の間に、人ばなれした十八人が、寢るでもなく起きるでもなく、蟲のやうにごろごろとしてゐる有樣は、本當に生地獄のやうでした。

『刺されたと言ふ男はどこでござる』

『あれぢや。あの隅の菰の下がさうでござる。今外へ運ばせますゆゑ、ちよッと、お待ち下されい』

『いや、いぢらぬ方がなにかと手がかりもつき易いと言ふものぢや。中へ這入ッてしらべませう。おあけ下されい』

素人であく錠ではない。一番牢は右ねぢり、二番牢は左ねぢり、三番牢は上へねぢるとか下へねぢるとか、ちやんと法則がきまッてゐるのです。それぞれの獄の牢鍵の祕密を心得てゐるものが御牢屋同心なのでした。カチヤリと源内があけたあとから、物靜かに這入ッて行くと、しらべ方に無駄がない。

『ほゝう、お店者でござるな』

指さきをちらりと見ると同時に、先づぴかりと右門流のおそろしいところをひろげはじめました。

『呆れたもんだね。本當ですかい。いかに旦那にしてもちッと氣味がわりいが、見て來たやうな嘘をつくんぢやありますまいね』

『もう出しやがッた。いちいちとそれだからうるせえんだ。この右手の人さし指と拇指の腹をよくみろい。ちやんとこの通りそろばんダコが當ツてゐるぢやねえかよ、こんなにタコの當るほどそろばんをいぢくツてゐたとすると、お店者も只の商人ぢやねえよ。先づ兩替屋、でなくば質屋奉公、どツちにしても金いぢりの多いところだ。素性しらべはあとでいい。傷口を先に見よう。その菰をはねてみな』

ぬッと出た顔は、三十七八、つら構へは中位、しかし、頬の肉づき、顔のいろ、まだそれほど牢疲れが見えないのです。

『源内どの、こやつは近頃入牢の者でござるな』

『左樣でござる。つい十日になるかならぬかの新入りでござる』

『ほゝうのう。十日ばかりぢやと申されるか。ちッとそれが氣にかゝりますな。傷口は？』

『そこぢや。その右の胸元ぢや』

なるほど乳の丁度上あたりに、ぐさりとひと突き、見事な刺き傷が見えました。

得物は匕首、たしかドスです。

しかも傷口は上に走ッて、まさしく正面から突き刺したものでした。ちらりと見眺めるや、ふ

ふんと白い笑ひがのぼりました。

『アハハ……。さうか。なるほどさうか。來て見ればさほどでもなし富士の山、といふ奴かのみ。よしよし。そろそろと根が生え出しやがッた』

もうなにかすさまじい眼がついたとみえるのです。あちらこちらをぶらぶらとやり乍ら、ちらりちらりと鋭く目を光らして、十八人の同牢の囚人たちの目いろ顔いろをひとりひとり見比べました。

しかしここへ這入る程の者はみな、ひと癖もふた癖もあるしたたか者ばかりです。外から下手人の這入ッた形跡がないとすれば、勿論この中の十八人の誰かに相違ないが、よしや十八人の中にゐたにしても、顔いろや目つきで眼をつけることはいかな名人でも困難なことでした。だいいち、誰も彼も同じやうな顔つきをして、目のいろ一ッ變へたものすらないのです、ばかりか、十八人が十八人とも、にやにやとやッて、探し出せるものなら探し出してみろと言はぬばかりに、あざ笑ひさへ泛べてゐるのでした。

中でも不敵さうに、青黑い齒を剝いてうす笑ひを洩らしてゐたのは牢名主です。型通りに重ね疊の上へどッかり坐つて、右門が誰か、名人がどこの男かといふやうに挨拶一ッせず、豪然とう

そぶき乍ら、にやりにやりとやツてゐるのでした。

『おまへ、大層上機嫌だな』

『えへへ……さうでもねえのですがね、疊の上の居ごこちはまた格別でね。旦那もちよいといかがでござんす』

『這入ツてもう何年ぢや』

『忘れましたよ。ここは浮世の風が吹かねえのでね。えへへ……。近頃、おつけがシミツタレで仕様がねえんだ。ご親切があツたら、けえりしなに餌係りへ一本釘をさしていツておくんなせえまし。もつとうまい汁を食はせるやうにとね。浮世の景氣はどうでござんす』

なぞと不敵至極なことを言つて、頭から呑んでかゝつてゐるのです。

こんなしたたか者を對手にしては、無論、尋常一樣の詮議で埒のあく筈はない。おそらく牢名主初め同牢の者は、誰がやつたか、どうしてやつたか、匕首の隠し場所もちやんと知ッてゐるであらうが、告げ口、耳打ちは言ふまでもないこと、世間の義理人情とはまた違つた義理人情を持つてゐるこの連中が、ひと通りやふた通りの責め方でたやすく口を割らうとは思ひもよらないことでした。

只殘るものは右門流あるのみです。動かぬ證據を右門流で看破つて、ぐうの音も出ないやうにする以外手段はないのです。

『さてのう、どこからおどろかしてやるか、いろいろと手はあるんだが、……牢名主』

『なんでござんす』

『おまへの生國はどこぢや』

『おふくろの腹ん中ですよ』

『さうか。ではおまへの腹の中もひやりとひと刺し冷めたくしてやるぞ』

不氣味に言つて、ぎろりぎろりと見眺めてゐたその目が、ふと膝の下の重ね疊にとまりました。

不審があるのです。今まで下積みになつてゐたために、しけつて腐つたらしい裾切れのある一枚が上になつて、しやんとしたのが下になつてゐるのです。あきらかにそれは疊を積み替へた證據でした。

刹那です。ズバリとはぜたやうな聲が、牢名主の顏へ打つかりました。

『おりろッ』

『な、な、なんですかえ。牢頭の重ね疊はお城も同然なんだ。お奉行さまがちやんとお許しなんですよ。おりろとは、ここをおりろとは何でござんす！』

目を剝いて逆らはうとしたのを、雜作はない。

『もつと筋の通る理窟を言ひな。おいらがおりろと言つたら、そのお奉行さまがおりろと言つても同然なんだ。逆らひ立てしたところがなほさら不審だ。おりなきやおろしてやるよ』

ふわりと輕く手首を取つたかとみると、草香流、祕術の妙です。

『い、い、痛え！　痛え！　いえ、おります……、おります……、おとなしくおりますよ』

ころげおちるやうにおりたのを待ちうけて、靜かに傳六を頤でしやくりました。

『一枚々々、この疊をしらべてみな』

『へ？……』

『裏返へしにしてみろといふんだよ。どれか一枚にドスを刺しこんでかくしてあるに違えねえ。一枚のこらず返してみな』

あツたのです。上から丁度三枚目、疊の裏腹の藁心へ、ぐいと深くさしこんでたくみに隱してあつたのです。

『さうだらう。どうだえ、みんな、そろそろ怖くなりやしねえかえ。こりやほんの右門流の序の口よ。ドスが出て來たからにや、下手人もおまへら十八人のうちにゐるに違えねえんだ。拷問、火責め、お次はどんな手が出るか知らねえが、急がねえところがまた右門流の十八番でな。この牢格子の中へ入れておきや、下手人を飼つておくやうなもんだ。起きたばかりでおまへらも腹がすいてゐるだらう。ゆるゆると煎じてやるから、先づめしでも食べな。――おうい。小者！　小者！』

不思議でした。

なにを思ひついたか、ふいとうしろをふりかへると、氣味のわるいほどにも落ちついて、變なときに變なことをひよツくりと命じました。

『食はしてやんな。ガツガツしてゐるだらうからな。おつけがどうの、お汁がシミツタレだのとろくでもねえことぬかしやがつたから、今朝ばかりはたつぷりつけてやんなよ。いいかい。どんどんお代りしてやんな』

眠りと食物こそは、なににもまさる極樂の囚人たちです。

『來た！　來た！　おつけだぞ』

『滅法豪氣なことになりやがつたぢやねえか。湯氣が立つてゐるぜ』

『探し出すなら探してみねえ。下手人詮議よりもこつちやめしが大切だ。おい！　こつち！　こつち！　おれが先に手を出したぢやねえか！　へへんだ。こんなぬくめしにありつけるなら、なんべんだつて殺してやらあ！』

さながら餓鬼でした。

目いろを替へて十八人が、ずらずらと並び乍ら、先を爭つてむしやぶりつきました。

しかし、名人の目がそれを遠くから眺めて、ぢいつと光つてゐたのです。ひとり、ふたり、三人、四人、――右はしから拾つていつたその目が、突然ぴたりと六人目のところでとまりました。

人と變つたたべ方でした。

ひどいギツチョとみえて、左りに箸を持ち乍ら、左りでガツガツ食べてゐるのです。

刹那。

つかつかと近づいたかと思ふと、襟首をつまみあげた手も早かつたが、啖呵もまた見事でした。

『たわけたちめがツ。これも名高えむつつり流の奥の手だ。ようみろい！　餓鬼みてえな眞似をするからかういふことになるんだ。下手人はこのギツチョと決つたよ。立てつ』

『な、な、なにをなさるんです！　ギツチョは親のせゐなんだ。あつしが、あたしが下手人なんぞと飛んでもねえことですよ！』

『控へろつ。おいらを誰と思つてゐるんだ。江戸にふたりとねえむつつり右門だよ。あの傷をよくみろい。うしろから抱きすくめて刺した傷ぢやねえ。あの通り逆刄の跡が上にはねてゐるからにや、まさしく正面から突いた傷だ。そこだよ、そこだよ。正面から刺した傷なら、ギツチョでねえ限り、對手の左りを突くが當りめえぢやねえか。然るにも拘はらずあの傷は右をやられてゐるんだ。右の胸をな。さては下手人左り利きか、いいやギツチョにちげえあるめえと、このおいらが睨んだに何の不思議があるかよ。十八人ゐるうちで、なにを慌てたか左りでめしを食つたなあおめえひとりなんだ。間抜けめがつ。むつつり右門が無駄めしを食はせるけえ。そのギツチキを見つけたくて食はしたんだ。食ひ意地に負けて右手で箸を持たなかつたのが運のつきさ。――下手人が擧りやほかにはもう用はねえ兄哥！　兄哥！』

『へえ？……』

『へ、ぢやないよ。なにをパチクリやつてるんだ。これから先は傳六さまの十八番だ。この生ッ白い野郎をしよつ引いていつて、獨り牢へ打ち込みな』

『ね！……』

『なにを感心してゐやがるんだ。毎度のことだ。いちいちと驚かなくともいいんだよ。人ひとり殺すからには、なにか曰くがあるにちげえあるめえ。奴等の素性をちよつと洗はして貰ひませう。源内どの、御案内下さらぬか』

連れ立つてやつていつたところは、牢同心詰め所の奥座敷です。

御牢屋日誌、送り込り帳、御吟味記錄。

ずらりと並べて積みあげてあるお帳箱へ近づくと、三番牢御吟味記錄とある部厚な一冊を取りあげました。

『源内どの、殺された男は何と言ひましたかな』

『豊太といふ名でござる』

『あの下手人は？』

『梅五郎といふ名ぢや』

『入牢は何日と何日でござる』

『兩名とも十二月五日ぢや』

『ほゝう。一緒の日でござるか』

その十二月五日のところをあけてみると、いぶかしい文字が見えるのです。

『御吟味一回。十二月五日。南町御番所。

豊　太、三十四歳、日本橋茅場町、兩替屋鈴文手代。丁稚より住み込み。

梅五郎、二十八歳。同鈴文手代。同じく丁稚より住み込み。

罪　狀、主家金子壹千百三十兩使ひこみ。但し、兩名の申立てに不審の廉あり。御吟味中入牢』

さういふ不思議な御記錄でした。

同じ兩替屋の手代であるといふのも意外なら、主家金子壹千百三十兩使ひ込み、但し、兩名の申立てに不審の廉あり、御吟味入牢とある一條は、見のがしがたき文字です。

俄然、名人の目が冴え渡りました。

『あれなる兩名のお係りはどなたぢや』

『敬四郎どのでござる』

『ハア、……。さうか。飛んだ廻り合はせぢやのう傳六』

『へえ？……』

『よろこべ、よろこべ、アバ旦那の尻ぬぐひを仰せつかつたぞ。これをようみい』

『……？　エヘ、……。なるほどね。道理で近頃ろく〳〵顔も見せずに悄氣てゐましたつけ。あきれたもんだね。不審の廉ありとはよくも白を切つたもんだ。大將の手がけたアナで不審の廉のねえものはねえんですよ。さあ忙しい！　チキシヤウめ。さあ忙しくなりましたね』

『慌てるな。まだ尻からげなんぞしなくともいゝよ。氣になるのはこの不審の廉とあるその不審ぢやが、源内どの、容子お知りか』

『知つてゐる段ではござらぬ。この通り千百三十兩使ひ込んだに不思議はござらぬが、その使ひ方がちと妙でな。鈴文は當代で丁度三代、なに不自由なく兩替屋を營んでをつたところ、この盆あたりから日增しにのれんが傾きかけて參つたと申すのぢや。段々とさぐつていつたところその穴が――』

『あの兩名の使ひ込みか！』

『左様でござる。ところがこゝに不審といふは、二人ともおれが使つた、おまへではない、このわしが使ひ込だのぢや、梅五郎の申立ては僞りでございます、いいえ、豐太の申し立ては嘘でございますと、互ひに罪を奪ひ合ふのぢや。それも申し立てがちと奇妙でござつたのう、長年御恩をうけた主家が左り前になつたゆゑ、ほつておいてはこの年の瀬も越せぬ、世間にボロを出さず、鈴文の信用にも傷をつけず、傾きかけたのれんを建て直すには、一摑千金、相場よりほかに途はあるまいと、五十兩張り、百兩張り、二百兩、三百兩と主人にかくれて張つたのが張る一方から思惑違ひで、嵩みに嵩んだ使ひ込みが知らぬまに千百三十兩といふ大金になつたと申すのぢや。いはゞ主家再興の忠義立てにあけたアナではあるし、知らぬ存ぜぬと言ふなら格別、おれぢや、わしぢや、おまへではない、うぬではないと言ひ爭つて罪を着たがるゆゑ、拷問好きの敬四郎どのも痛し痒しのていたらくで、悉く手を燒き、日を見て折を見てと、入牢させておいたのがこのやうに朋輩殺しになつたのぢや。何から何まで不審づくめでござるからのう。どうなることやら困つたことでござる』

いかさま不審づくめです。

いかに主家への忠義立ての罪であつたにしても、互ひに罪を奪ひ合ふのがそも〳〵不審でした。

ましてやそのいち人が、他を殺すに至つては、すておかるべきではない。不審のもとはこれは兩替屋鈴文にあるのです。

『兄哥！　茅場町だッ』

『駕籠ですかい！』

『決つてらあ！』

『ありがてえ！　これで餅が搗けらあ。さあ來い！　野郎！　アバ敬の大將そこからひよこひよこと出るなよ。めんだうだからな。――へえ、御用駕籠です！　はずんで二挺だ。かんべんしておくんなせえ。い〳〵こゝろもちだね。飛ばせ！　飛ばせ』

ひと角、ふた角、四角と曲らぬうちに、もうその茅場町でした。

三

なるほどある。

古い暖簾に、すゞ文と染めぬいて、間口も三間あまり、なかなかの大屋臺です。

しかし、表の飾り天水桶はあつてもタガがはじけ、暖簾には穴があいて、左り前が軒下にのぞいてゐるやうな構へでした。

『嘘ぢやねえや。屋根がほんたうに傾いてゐやがる。――をるか。許せよ』

『いらつしやいまし……相すみませぬが御兩替ならこの次ぎにお願ひしたうございます……』

『この次ぎを待つてゐりや土臺骨がなくならうと思つて大急ぎにやつてきたんだ。おまへが主人か』

『左樣でございますが、旦那さまはどちらの？』

『どちらの男でもいゝ。しよぼしよぼしてゐてよく見えねえや。もつとこちらへ顏をみせろ』

いぶかるやうにあげた顏は、もう六十あまり。――目には脂が浮き、頰は靑痩せに痩せこけて深い皺が溝のやうに走り、三度々々の頂きものも事缺いてゐるのではないかと思はれるやうな、しよぼしよぼとした老人でした。

そばに丁稚がひとり。

これも食べないための疲れからか、まだ起きたばかりの朝だといふのに、こくりこくりと舟を

漕いでゐるのです。

『店のものはこれつきりか』

『ほかにをることはをつたんですが――』

『牢へへえつたんだらう』

『左樣でござんす。よく御存じですな。あのほかに今ひとり――』

『まだゐたか！』

『をりました。杖とも柱とも頼んだ番頭がをりましたんですが……』

『なに、番頭！』

『左樣でござんす。子供のうちから手前の兄弟のやうにして育つたのがをりましたんですが、店が傾いて來ると仕樣のないものでござんす。一軒構へたい、のれんを分けてくれと申しますんで、やらないと言ふわけにも行かず、こんな店にまたをつても仕方があるまいと、ついこのひと月ほど前に暇をやりました。殘つたのはこの小僧ひとり、子もなし、家内もなし、火の消えたやうなものでござんす……』

『ふゝんさうか。ひと月ほど前に暇をとつたといふか。いくらか匂つて來やがつたな』

出馬したとしたら早い。

睨みも早いが星のつけ方も早いのです。

『その番頭の構へたといふ店はどこだ』

『あれでござんす』

『あれ？』

『あの前の横丁へ曲る角にある店がさうでござんす』

變なところへまた店を張つたものでした。なるほど店からは見とほしの、目と鼻のところに見えるのです。

のれんも新らしく、御兩替、鈴新といふ文字が目を射抜きました。

こんな不思議はない。不埒はない。別な稼業ならいざ知らず、同じ商賣の兩替屋なのです。恩ある主家なら、別な町か、遠いところへ張るべきが當り前なのに、まるで商賣讐き、客爭ひを挑むやうに二丁と離れない近くへのれんを張つてゐるのです。

『笑はしやがらあ。ねえ、兄哥、どうでえ。をかしくつて腹がよれるぢやねえかよ』

『さうですとも。あつしやもうさつきからをかしくて仕樣がねえんだ』

『馬鹿に痛がいゝが、なにがをかしいか分つてゐるのかよ』

『分りますとも。あのおやぢの顔でがせう。狆ころが縫ひあげしたやうな顔つてえ言葉があるが、こんなのは珍らしいや。淺草へでも連れていつたら、けつこう暮の餅代は稼げますよ』

『アホウ』

『へ？……』

『いつまで經つても智惠のつかねえ奴だ。だから嫁になりてもねえんだよ。おいらのおかしいのはアバ敬のことなんだ。不審の廉ありがきいて呆れらあ。ちやんこの店の前に、不審の廉の御本尊がいらつしやるぢやねえかよ。のれんを分けて貰つた子飼ひの番頭が、御本家へ弓を引くやうな眞似をする筈がねえ。ふたりの手代どもが忠義顏に罪を着たがつたのも、火元はあの邊だ。パン〳〵とひと睨みに藻屑をあばいてお目にかけるからついて來な』

『ちげえねえ』

『おそいや！　感心しねえでもいいときに感心したり、しなくちやならねえときに忘れたり、まるで齒のねえ下駄みてえな奴だ。そつちぢやねえ。あの角の鈴新へ行くんだよ。とつと〻歩きな』

名人の氣焰、當るべからずです。

表へいつてみると、その鈴新が豪勢でした。みがき格子に、新のれん、小僧の數も四人あまりちらついて、年の瀨を控へた店先には客足もまた多いのです。

『根が枯れて、枝が榮えるといふのはこれだよ。鈴新と言ふからにや、新兵衛、新九郎、新左衛門、いづれは新の字のつく名前にちげえねえ。おやぢはゐるか、のぞいてみな』

『待つたり、待つたり。穩やかならねえ聲がするんですよ。出ちやいけねえ。出ちやいけねえ。ちよつとそつちへ引つこんでおいでなさいまし』

『なんだ』

『女の聲がするんですよ』

『不思議はねえぢやねえか』

『いいや、若い娘らしいんだ。ね、ほら。別嬪聲ぢやござんせんか……』

なるほど、張りのいい若やいだ聲が耳を刺しました。

『久どん！　久どん！　いけないよ。なんだね。おまへ。大切なお寶ぢやないか。小判を玩具になんぞするもんぢやないよ』

『いいえ、お嬢さま、玩具にしてゐるんぢやねえんですよ。精出して音いろを覺えろ、僞せの小判と本物とでは音が違ふからと、お旦那樣が仰有ッたんで、音いろをきゝ分けてゐるんですよ』

『嘘仰有い！　そんないたづらをしてゐるうちに、またいち枚どこかへ失なッたと言ふつもりだらう。をとゝひもさうやつてゐるうちに、小粒が一ッどこかへ失なつて了つて、出ずじまひぢやないか、ほかの誰をごまかさうとも、このわたしばッかりはごまかせないよ。音いろを聽きたかッたら、この目の前でおやり！』

權高に店員を叱つてゐるあん梅、無論この家の娘に違ひないが、どうやら店のこと、金の出入りの采配も、その娘が切り廻してゐるらしい容子でした。

ひよいとのぞいてみると十八九、――品はないが先づ先づ別嬪の部類です。

『繁昌だな……』

『いらッしやい。どうぞ、さあどうぞ。そこではお冷えなさいます。こちらへおかけなさいまし』

愛嬌がまた馬鹿によい。こぼれるやうな笑顏をつくり乍ら、怖い名人を名人とも知らないのか下へもおかない歡待ぶりでした。

『御兩替でございませうかしら？　お貸し金でございませうかしら？――お貸し金の方なら、もう暮れもさし迫つてをることでございますゆゑ、抵當がないとお立替へ出來かねますが……』

『金に用はない。のれんに用があつて參つたのぢや』

ズバリと、斬りさげるやうに一本釘をさしておくと、やんはりと言つたものです。

『小判に目が肥えてゐるなら、こッの方も目が肥えてをらう。この卷羽織でもようみい』

『まあ。さうでござんしたか。どんなお詮議やら、朝早くの御出役ご苦勞さまでございます。お尋ねは僞せ金のことかなんかでございませうかしら？』

おどろくいろもなく嫣然と笑つて、流るゝ水のごとくなめらかに取りなしました。

『なんのおしらべでござんせう？　わたくし、娘の竹といふものでございます。わたしでお答への出來ないことなら親を呼びますが……』

『をるか！』

『朝のうち一刻は、信心するがならはし。あの御念佛の聲が親の新助でございます』

『いいや、行く行く。お上の旦那の御用なら今行くぞ……』

耳にはさんだとみえて、いそいそと出て來たその親の新助がまた至極と愛想がいいのです。

『毎度の御出役ご苦勞さまでございます。おほかた旦那さまも、手前のうちが、向ひの主人の、鈴文さまのお店より景氣がいいんで、それに御不審を打ツてのお越しぢやございませんか』

『よく分るな。どうしてそれが分る』

『いいえ、敬四郎の旦那さまも、そのやうに仰有つて、たびたび參りましたんで、多分またそんなことだらうと察しがついただけなんでございますよ。その御不審でのお越しならば、ここに一匹招き猫がをりますゆゑ、ようごらうじませ。アハ、、、、。親の口からは言ひ憎いことでございますが、一に愛嬌、二に愛嬌、若い娘の愛嬌ほど客を引くにいい元手はございませぬ。店の繁昌いたしますのもみんなこの招き猫のせゐでございますよ。ほかに御不審がございましたら、御白洲へでも、御番所へでも、どこへでも參ります。なんなら只今お供いたしましてもよろしうございます。アハ、、、、。いかがでございます。旦那さま』

にこやかに笑つて、愛想のいい應對ぶり、さながらにすべすべとした濡れ岩をでもつかむやうでした。

『ふふん。しやうがねえや……』

不思議です。

何と思つたか、突然名人が吐き出すやうに呟やいたかと思ふと、にやにや笑ひ乍ら、さツさと店を引きあげました。

四

『ま、ま、待つておくんなさい！　なにとぼけた眞似をするんです！　どんどん行つてどこへ行くんですかよ』

おどろいたのはいつも乍ら傳六です。

『またなにかいやがらせをするんですかい』

『アハハ……』

『アハハぢやねえんですよ。根が切れた、蔓が切れた、詮議の糸が失なつたなら失なつたと、正直に言やいいんだ。テレかくしに笑つたつて、そんな馬鹿笑ひにごまかされるあツしぢやねえんですよ。パンパンとひと睨みに藻屑をあばいてやらあと、大層もなく立派な口をお利きでしたがパンパンはどこへいつたんです。藻屑はどこへ流れたんですかよ』

『うるさいよ』

『いいえ、うるさかねえ、旦那！　これがうるさかつたら、傳六はめしの食ひあげになるんだ。出のわるいトコロテンぢやあるめえし、出しかけてやめるたア何が何ですかよ。しらべかけて逃げ出すたア何がおツかねえんですかよ。お竹とか言つたあの娘にぽうと來たんですかい』

『ガンガンとやかましい奴だな。あのおやぢが星だ臭えと睨んだ目に狂ひはねえんだ。ねえけれどもおやぢもおやぢ、娘も娘、あゝいふのが吟味ずれといふんだよ。すべすべぬらぬらと喋舌りやがつて、あんな父娘をいくら締めあげたつても無駄骨なんだからあツさり引きあげたんだ。手を間違へたのよ。手をな』

『手とね。はてね……』

『分らねえのかい。あゝいふ奴には動かぬ證據をつきつけて責め立てるよりほかには手がねえんだ。その手を間違へたといふんだよ。飛んだ忘れものさ。むツつり流十八番桂馬飛びといふ珍手を忘れてゐた筈だが、おまへさん心當りはないかえ』

『さあいけねえ。食ひ物のことぢやごさんすまいね。その方ならばずゐ分とこれで智惠は廻るんだが……』

『ドスだと』

『へ？……』

『ギツチョの梅五郎が豐太を抉つたあの匕首なんだ。刄物の持ち込み、出し入れのきびしいお牢屋だ。どこのどやつが梅五郎のところへ届けたか、肝腎要、大切なお詮議ものを度忘れしてゐたぢやねえか。しツかりしろい』

『ち、ち、ちげえねえ。――急ぎだよ！　駕籠屋！　待つてをれと言つたのに、どこをのそのそほつき歩いてゐるんだ。牢屋へ行きな！　牢屋へ！』

ひう、ひうと風が唸つてすぎて、駕籠も唸るやうな早さでした。

しかし、行きつくと同時に、右門の足はぴたりと釘づけになりました。

這入らうとしたお牢屋同心の詰め所の中から、ぴしり、ぴしりと鞭の音がきこえるのです。

痛み責めの音に違ひない……。

敬四郎、得意の責め手なのでした。さては？――と思つて、のぞいた目に映つたのは意外です。

責めてゐるのはあの源内でした。打たれてゐるのは、お牢屋づとめの番人らしい若い小者なのでした。

『なにをお責めぢや』

『おう、おかへりか。太い奴ぢや。こいつが、こいつめがあのドスをな――』

『差し入れたと言はるゝか！』

『さうなのぢや。人手にまかして源内ばかり高見の見物もなるまいと、ドスの差し入れ人をしらべたところ、やうやくこやつの仕業だといふことだけは分ッたが、なんとしてもその頼み手を白状せぬゆゑ、責めてをるのぢや。――不埒な奴めがッ。牢屋づとめをしてをる者が科人とぐるになつてなんのことぢやッ。ぬかせッ、ぬかせッ。ぬかさずばもッと痛い目に會ふぞッ』

ぴしり、ぴしり、と折檻の手の下るのを、しかし小者は必死と齒をくひしばつてこらへ乍ら、白状は夢おろか、あさ笑ひすら泛べてゐるのです。

その顏をひよいとみると、ほんの今しがた床屋へいつて來たらしい跡が見えました。月代も剃つたばかりで髪にはぷうんと高い油の匂ひすらもしてゐるのです。

『アハハ……よし。分りました。痛め吟味ばかりが責め手ではござらぬ。口を開かせてお目にかけませう。この右門におまかせ下されい』

遮切るやうに源内の手から鞭をとつて投げすてると、矢庭にちくりと抉るやうにあびせかけました。

『おまへ、今晩あたり、うれしいことがあるな！』

『……！』

『びツくりせんでもいい。むツつり右門の目はこの通りなにもかも見透しだぜ。おまへ、今日、非番だらう！』

『……！』

『おどろいてゐるだけぢや分らねえんだ。返事をしろ！　返事を！』

『さうでござんす。非番でござんす』

『だから床屋へいつて來たといふだけぢやあるめえ。そのめかし方は先づうれしい待ち人でもあると言つた寸法だ。今夜きツと會ひませうと口約束した待ち人がな。しかもその待ち人は女だらう！　違ふか！　どうだ』

『……！』

『返事をしろッ。返事を！　いちいちとさうびツくりするにや當らねえや。おまへら風情を責め落すぐれえむツつり右門にや朝めしめえだ。安い油をてかてかとぬッた工合、女に會へるからの

おめかしに相違あるめえ。どうだ。違ふか！』

『そ、そ、さうでござんす』

『その女がドスの頼み手、こいつをこツそり梅五郎さんに屆けておくんなさいまし、さすればどんなことでもきゝます。あすの晩にでもと、色仕掛けに頼みこまれて、ついふらふらと飛んでもねえドスのお使ひ番をしたんだらう。女は年の頃十八九、愛嬌たッぷり、こいつも睨んだ眼に狂ひはねえつもりだが、違ふか、どうだ』

『……！』

『返事をしろッ。返事を！　むッつり右門の責め手は理詰めの責め手、智惠の責め手、かうと睨んだら拔け道のねえ責め手なんだ。年もかッきり、圖星を指したに相違あるめえ。どうだ。青ッぽ！』

『そ、そ、その通りでござります……』

『よし分ッた。もうそれできくにや及ばねえ。傳六、また駕籠だ。おめえひとりがよからう。あの父娘をしよッ引いて來な』

『父娘！』

『今のあの鈴新父娘を引いて來いといふんだ。これだけの動かぬ證據がありや、もう否やは言はせねえ。しかしおめえは口輕男だ、うれしくなッてパンパンまくし立てたらいけねえぜ。ちよッとそこまでと別口のお世辭でも言ッてな、逃がさねえやうにうまく引いて來な』

『心得たり！　チキシヤウめ。かういふことになりや傳兄哥のおしやべり上手は板につくんだ。忽ち引いて來るからお茶でも飲んでおいでなせえよ』

忙しい男です。

ぴう、ぴうと、唸りを立てて飛んで行く姿が見えました。

遠いところではない。

二杯とお茶を呑むひまのない間もなくでした。

エヘヘ、といふ聲がしたと思ふと一緒に、その傳六がなにをべらべらやッてゐるのか、しきりに嘯づり乍ら新助お竹の父娘を手もなく引いて來たのです。

『さあ來たんだ。べらぼうめ！　神妙にしろ。得意のむッつり流でパンパンとやッておくんなせえまし！』

突き出すやうに押して寄來したふたりの前へ近づくと、不氣味なくらゐ穩やかにやんはりと先

づ釘を刺しました。

『さツき妙なことを言ツたな。不審なところがあッたら御白洲へでも御番所へでも參りますと言ッたけえが、忘れやしめえな、新助』

『な、な、なんでござんす！』

『急に目いろを替へるな！　その不審があッてしよッ引いたんだ。娘からさきにとッちめてやらう。竹！　前へ出い！』

『……？』

『なにを青くなッてふるへてゐるんだ。愛嬌が元手でござんす、かういふ招き猫がをるんでござんすと、親馬鹿の新助が自慢したおまへぢやねえか。度胸があッたら、このおいらの前でもういッぺん愛嬌をふりまいてみなよ』

『いいえ、そんなことは、そ、そ、そんなことは』

『時と場合、出したくともこの恐ろしい證據を見せつけられては肝がちぢんで出ねえといふのか！――さうだらう。ようみろい、この證據を！』

『な、な、なんの證據でござんす。證據とはどれでござんす』

『このドスだ』

『えッ！……』

『それからこの牢番の青ッぽうだ。みんなべらべらと口を割ッたぜ。こいつを左ギッチョの梅五郎さんにこッそりと屆けてくださいまし、さうしたら何でもきゝます、今晩でもおいで下さいまし と、飛んでもねえ兩替仕込みの安い愛嬌をふりまいて、おまへから色仕掛に賴み込まれたとな、殘らずしやべッたよ。どうだい。ずうんと背筋が寒くなりやしねえか』

『馬、馬、馬鹿な！　大切な娘になにを仰有います！　馬鹿な！』

問ひ落されたら大事と思ッたか、慌てて親の新助が横からわめき立てました。

『飛んでもないお言ひがかりを仰有ッちや困ります。たッたひとりの掣取り娘、色仕掛けのなんのと人ぎきのわるいことを仰有ッちや困ります。馬鹿なッ。ドスがどうの、梅五郎がどうのと、娘に限ッてそんな大それたことをする女ぢやござんせぬ！』

『たしかにないと言ふか！』

『ござんせんとも！　手前ら父娘に何一つやましいことはござりませぬ。兩替仕込みの安い愛嬌がどうだの、かうだのと仰有いましたが、娘の愛嬌を安く賣ると言ッたんぢやござんせぬ。商賣

は愛嬌が第一、店の繁昌は愛嬌が元手、幸ひ娘が愛嬌者ゆゑ店も繁昌すると申しただけでございます』

『控へろッ。ではおまへにきかう。娘の愛嬌が元手になッて繁昌いたしますと言ッたその店を張るについてのそもそもの元手はどこからひり出したんだ。あの鈴新の暖簾を出した元手の金は、どこから降ッて湧いたんだ』

『それはその、その元手はその……』

『その元手はどこの小判だ。まさかに一文なしぢやあれだけの店は張れめえ。しかも不思議なことには御主家筋の鈴文はあの通り落ちぶれて、千百三十兩といふ大穴があいてゐるといふんだ。變な穴ぢやねえか。なあおい新助おやぢ！』

『……』

『なにを急に默り出したんだ。おいらが不審を打ッたのはその小判、千百三十兩といふ大穴だ。小判は物を言はねえかも知らねえが、おいらの目玉は物を言ふぜ』

『……』

『どうだよ。おやぢ！　聞きや鈴文店で子飼ひからの番頭だといふ話しだ。その番頭がひと月前

に暇をとッて新店を開ける、開けたあとで千百三十兩の大穴が分ッた、分ッたその大穴は、わたしが相場にしくじッてあけたんでござんす、いいやおまへぢやねえ、おれが使ひ込みの大穴だと、世にも珍らしい罪爭ひが起きてゐるといふぢやねえかよ。爭ッてゐるのはふたりとも男ざかりの手代だ。ひとりは三十四、ひとりは二十八、その若い方の手代の左りギッチョの梅五郎のところへおまへの娘がこッそりドスを屆けたんだ。匕首をな。屆けたら今朝になッて豐太が刺し殺されてゐたんだ。どれもこれもをかしなことばかりぢやねえかよ。爭ッて罪を着たがッたも不審、娘がドスを屆けたも不審、しかも娘は掣取りだといふんだ。男のほしい娘だとな。――どうだい。おやぢ。これだけ筋を立ててた〻みかけりやもうよからう。白狀しな！　白狀を！』

『……』

『言はねえのかッ。じれッてえな！　お互げえ年の瀨が迫ッて氣が短くなッてゐるんだ。言はなきあギッチョの梅五郎と突き合はせてやらうよ。めんだうだ。傳六！　あの野郎をひよッ引いて來な！』

『いいえ、も、も、申します。恐れ入りました』

ついに泥を吐いたのです。

『お察しの通り千百三十兩はこの新助が、三年かゝッてちびりちびりと掠めてためた大穴でございます。いづれは店も出さねばならぬ、その用意にと長年かゝッて掠めたんでございまするが、あそこへ店を出すと一緒に大穴がバレたんでございます。それを知ッて、罪を着ようと言ひ出したのがあの豊太と梅五郎のふたりでございました。ふたりともいまだに獨り身、娘は聟取り、罪を着る代りに俺を聟にと言ひ出したのがこんな騒動のもととなッたのでございます。なれども娘のすきなのはあの梅五郎、きらひな豊太と末始終一緒にならねばならぬやうなことになッてはと、娘がひどく苦にやみましたゆゑ、ええ、めんだうだ、ついでのことに豊太を眠らせろとこの親馬鹿のおやぢがわる智惠をさづけて、梅五郎に刺し殺させたのでございます。しかしあいつはギッチョ、そんなことから足がつかねばよいがと、實は内心胸を痛めてゐたんでございますが、なにがもとでバレましたやら、恐ろしい事でございます。主家を救ふための使ひ込みと申し立てさせたのもみんなこの新助の入れ智惠、そんな事にでも申し立てたら、いくらか罪も輕くなり、なッたら早く御牢拂ひにもなることが出來ませうとの魂膽でございました。恐れ入りましてございます』

『さうだらう。大方そんなことだらうと思ッてゐたんだ。折角尻をぬぐッてやッて骨折り損だが

こんなシミッタレの手柄はほしくねえ。屁斗をつけて進上するからと、すまぬが源内どの、敬四郎先生のところへ誰か飛ばしてくれませぬか。不審の廉は丸くとれましたと言ッてな。その代り大切な裁きだけを一ッつけておいてあげませう。――おやぢ、千百三十兩は鈴文さんに成り代ッておいらが貰ッてやるぜ。利子をどうの兩替賃をいくらつけろのと、はしたないことを言ふんぢやねえ。元金だけで澤山だからな。それだけありや鈴文の店の暖簾もまた染め直しが出來るといふもんだ。傳六、おめえひとッ走りいつッてあのしよぼしよぼおやぢの顏の皺をのばして來てやんな！』

『心得たり！　さあこれで餅がつけるんだ。とみにうれしくなりやがッたね。一句飛び出しやがッた。――餅々と心せわしき年の暮とはどうでござんす』

風がつめたい……。

子持ち硯

一

その第三十六番手柄です。

事の起きたのは正月中句、選りに選つてまた藪入りの十五日でした。

『えへへ……。話せるね、全く。一月萬歳、雪やこんこん、畜生め、降りやがるなと思ッたら、今日に限つてこの通りのぽかぽか天氣なんだからね。さあ行きましよ、旦那、出かけますよ』

天下、この日を喜ばぬ者はない。隨ッて傳六がおびたゞしくはめをはづしてやッたとて、不思議はないのです。

『腹が立つね。炬燵は何です！　その炬燵は！　行くんだ、行くんだ。出かけるんですよ』

『お寺詣りかえ』

『あゝいふことを言ふんだからな。正月早々縁喜でもねえ。今日はいッたい何の日だと思ッてゐ

るんですかよ。藪入りぢやねえですか。世間が遊ぶときや人並みに遊ばねえと、顏が立たねえんだ。行くんですよ！　淺草へ！』

『へへえ。おまへがな。年中藪入りをしてゐるやうだが、今日はおまへ、よそ行きの藪入りかえ』

『怒りますぜ。からかふと！――えゝ、えゝ、さうですとも！　どうせさうでせうよ。なにかといふと旦那はさういふ風に薄情に出來てゐるんですからね。けれども物事にや氣合ひといふものがあるんだ。氣合ひといふものがね。よしやあッしが年中藪入り男に出來てゐたにしても、いきましよ、旦那、どうですえと羽をひろげて飛んで來たら、よからう、いかうぜ、主從は二世三世かはいいおまへのことだ、――さうまでは、お世辭を使ッて下さらねえにしても、もちッとどうにかいい顏をしたらいいぢやござんせんか。いい顏をね』

『……』

『え！　旦那！　どうですかよ。旦那！』

『……』

『くやしいな！　いかねえんですかい、旦那！　え！　旦那！　どうあッても行かねえといふん

ですかい』

だんだんと聲をせりあげ乍ら、だんだんと庭先から顏をせりあげて、ひよいとのぞいてみると、むツつりの名人がをかしなものを炬燵のうへにひろげて、しきりとのぞいてゐるのです。

半紙一枚に書いた繪圖面でした。

ここのところ本郷通り。

ここ角。

こちら塀。

ここ角。

隣り、インシヤウジ。

ここ加州家裏門。

半紙いッぱいに書いた見取圖の要所々々へさういふ文字を書き入れて、ここ加州家裏門としたその門の横の道に、長々と寢そべッてゐる人の姿が見えました。

『はてね。すゞ六にしちや上りがねえやうだが、なんですかい、旦那』

『……』

『え、ちよッと。これは何ですかよ。人が寢てゐるぢやねえですか。人が……』

『うるさいよ』

『いいえ、うるさかねえ、旦那。事がかういふことになりや、藪入りはあすに日延べしたッて構はねえんだ。本郷の加州家と言や加賀百萬石のあのお屋敷に違げえねえが、その裏門の人は何ですかい。人は！　誰がそんなところへ寢かしたんですかい』

『知らないよ』

『意地わるだな。敎へたッていいぢやねえですかよ』

『でもおまへ、おいらは薄情だと言ッたぢやねえか。どうせわたしは薄情さ、のぞいて貰はなくたッていいですよ』

『あゝいふことを言ふんだからね。物は氣合、言葉ははずみのものなんだ。つい言葉のはずみで言ッただけなんですよ。主從は二世三世、旦那とあッしや五世六世、ふたりともいまだに獨り身でゐるが不思議だが、ひよッと傳六女ぢやねえかと、人樣が陰口利くほどの仲ぢやござんせんか。事件ならアナと言やいいんですよ。何です！　その長く寢てゐる人間は——』

『變死人だよ』

『變死人！　さあいけねえ。飛んでもねえことになりやがッたね。どこの誰がこんなつけ屆けをしたんですかい』

『呆れた奴だな。もッと眞ッ當に物を言ひな。つけ屆けとは何を言ふんだよ。たッた今しがた、おまへとひと足違ひに若いお武家がやッて來て、手前は本鄕加州家の者でござる。この繪圖面にある通り、屋敷の裏門前に怪しい死人がござるゆゑお出ましが願ひたいと駈け込み訴訟をして歸ッたんで、さッきから不思議に思ッて考へてゐるんぢやねえかよ』

『一向に不思議はないね、駈け込み訴訟があッたら考へることはねえ。さッさとお出ましなさりやいいでやせう』

『しやうのねえ奴だな。おまへの鼻は飾りものかよ。この繪圖面を嗅いでみな』

さしつけられた半紙を嗅いでみると、ぷうんとかぐはしい白粉の匂ひがしみついてゐるのです。

『はあてね。別嬪の匂ひがするぢやござんせんかい』

『だから不思議だと言ッてるんだ。飛びこんで來たのは、立派な男のお侍だよ。それだのに持ッて來たこの紙には、れッきとした女の移り香が殘ッてゐるんだ。しかもこの手跡をみろい。見

取りの圖面は滅法まづいが、ところどころへ書き込んである字は、この通り滅法うまいお家流の女文字だ。さてはこいつ、手數がかゝるなと眼がついたればこそ、考へこんでもゐたんぢやねえか。氣をつけろい。藪入り奴め、おいら、同じ炬燵にあたッても只あたッてゐるんぢやねえやい。とッとと支度しな』

『ウへへ　……。うれしいね。叱られて喜んでゐやがらあ。この藪入り奴め。氣をつけろいと來たもんだ、へえ帶でござんす。お召しものでござんす。――氣をつけろいと來たもんだ、おいら同じ雪駄をはくにしても、只はくんぢやねえやい。へえおはきもの！　お草履、雪駄、お次は駕籠とござい……』

『どこにゐるんだ。まだ駕籠屋來ねえぢやねえかよ』

『おッといけねえ。呼びに行くのを忘れちまッたんだ。めんだうくせえ。行ッたつもりで、來たつもりで乘ッたつもりで、あそこまで歩いていッておくんなさいましよ。――いい天氣だね。たまらねえな。小春日や……小春日や……傳六女にしてみてえ、とはどうでござんす……』

行くほどに、急ぐほどに、街は藪入り、日はぽかぽか日和、――湯島のあたり突く羽子の音がのどかに冴えて、江戸はまたなき新春でした。

二

繪圖面通りに、引祥寺のわきから小道を折れて、加賀家裏門の前までいッてみると、あたり一杯の人にかこまれて、なるほどその裏門の左り手前に、新らしい菰を冠むッた長い姿がころがッてゐるのです。

しかし、出張ッてゐるのは最寄りの自身番の小役人が三人きりで、加賀家のものらしい姿はひとりも見えないのでした。

『ちと變ぢやな。ずッと初めからおまへらだけか』

『さうでござります。加州樣の方々は顏もみせませぬ。しらせがあッて駈けつけてからわたくし共ばかりでござります』

不思議といふのほかはない。變死人の素性身分はどうあらうとも、たとひ路傍の人であらうとも、この通り屋敷の近くに怪しい死體がころがッてゐるとしたら、せめて小者のひとりふたり、見張らせておくが當りまへなのです。ましてや駈け込み訴訟をしたものは、たしかに加州家の者と名乘ッてゐるのに、その家中の者がひとりもゐないとは奇怪千萬でした。

『よしよし。何ぞ曰くがあらう。菰をはねてみな』

氣味わるさうにのけたのを近よッて、ぢッとみると、その變死人がまた奇怪です。

羽織、袴、大小も立派な侍でした。

しかもその死に方が尋常ではない。

手、足、顏、耳、鼻、首筋、外へ出てゐる部分は、端から端まで火ぶくれとなッて、いち面に火傷をしてゐるのです。

『さあいけねえ。たしかにこいつア火傷だ。火傷だ。道ばたにれきッとしたお侍が火傷をして死んでゐるとは何たることです。飛んでもねえことになりやがッたね。氣をつけなせいよ。危ねえですぜ。眼をつけ違ひますなよ』

忽ちに傳六が目を丸めました。

まことや奇怪千萬、路傍にれッきとした二本差が、火傷を負ッて死んでゐるとは古今にも類のないことです。

しかし、不思議なことには、全身火ぶくれとなッて燒けたゞれてゐるのに、著てゐる着物には燒け焦一ッ見えないのでした。ばかりか、袴も、羽織もぐッしよりと濡れてゐるのです。死體のま

はりの道も、またいち面濡れてゐるのです。

『さてな。大きにをかしな火傷だが、ねえ、おい、傳兄哥』

『へえ……？』

『今は冬かい』

『笑、笑、笑談言ふにも程があらあ。とぼけたことを言ふと怒りますぜ。本當に！　一月十五日冬の眞ッ最中に決ッてゐるぢやねえですかよ』

『江戸は降らねえが、さだめし加賀あたりは大雪だらうね』

『なにをべらぼうなことを言ふんです。加賀は北國、雪の名所、冬は雪と決ッてゐるんだ。加賀に雪が降ッたらどうだといふんですかよ』

『別にどうでもないが、をかしな火傷なんでね。ちよッと聞いて見たのさ。さてな、どのあたりかな』

突然、不思議なことを言ッて、伸びあがり伸びあがり、加賀家の屋敷の模樣をしきりと見しらべてゐたが、なにごとかすばらしい眼がついたとみえて、さわやかな笑ひがのぼりました。

『ウフフ……。なんでえ。さうかい。なるほどあれか。飛んでもねえ火傷の匂ひがして來やがッた。しかし弱ッたな。百萬石のお屋敷へ素手でも這入れまいが、どなたか御家中の方はゐませんかのう……』

呟くやうに言ッた聲をきいて、群れ集ッてゐた群衆のうしろから、つかつかと影が近よりました。

年の頃二十八九の若い武家です。

馴れ〳〵しげに名人のそばへ歩みよると、馴れ〳〵しげに呼びかけました。

『さき程は失禮、目星がおつきか』

『さきほどと申しまするとー？』

『もうお忘れか。今朝ほど駈け込んでいッたはこの手前ぢや』

『あゝ成ほど。そなたでござッたか。貴殿ならばなほけッこうでござる。どうやら目星がつきましたが、ちと不思議なもので火傷をしてをりますゆゑ、お尋ねせねばなりませぬ。お隱しなさらば詮議の妨げ、隱さずにおあかし下さりませよ。よろしうござりませうな』

『申す段ではござらぬ。お尋ねはどんなことぢや』

『加賀樣の獻上雪は、たしか毎年今頃お取り寄せのやうに、承はッてをりますが、もうお國元か

らお運びでござりまするか』

『運んだ段ではない。知ッての通り、あれは日中を忌むゆゑ、夜道に夜道をつゞけて、丁度ゆうべこの裏門から運び入れたばかりぢや』

『やッぱりさうでござりましたか。多分もうお運びと睨みをつけたのでござりまするが、やうやくそれで謎が一ッ解けました。おどろいてはなりませぬぞ。この變死人はその雪で死にましたぞ』

『なに！　雪！――さうか！　雪で死んだと申されるか。道理でのう。凍え死んだ者は火傷そッくりぢやとかきいてをッたが、雪か！　雪であッたか！……』

今さらのやうに目を丸めました。――獻上雪は加賀百萬石の名物、同時にまた江戸名物の一つです。將軍家とても夏暑いのにお變りはない。そのお口を癒やすために加賀大納言が、加、越、能、百萬石の威勢にかけて、冬、お國元で雪を氷らせ、道中、金に糸目をつけずにこれを江戸御本邸に運ばせて、本郷のこのお屋敷内の雪室深くへ夏まで貯へ、土中最中に黄道吉日を選んで柳營に獻上するのが毎年の吉例でした。召しあがるのはせいぜいふた口か三口のことであらうが、おあがりになるお方は八百萬石の將軍家、獻上するのは百萬石の大納言、事が大きいのです。それ

をずばりと、只のひと睨みで睨んだ名人の眼の冴えもまた、たぐひなくすばらしいことでした。

しかし、それで謎が解け切ッたのではない。第一はこの變死の裏に、なにごとか恐ろしい企らみと秘密があるかないかの詮議です。恐ろしい秘密があるとしたら、何ものの仕業か、第二に起る謎は言はずと知れたその詮議です。

第三には變死人の素性。

それと顔いろを讀みとッて、ここぞとばかりしやきり出たのは傳六でした。

『あのえ。旦那。少々物をお尋ねいたしますがね』

『なんだ。うるさい』

『いいえ、うるさかねえ。さすがにえらいもんさ。ちよいと睨んだかと思ふと、こいつア雪だとばかり、忽ち眼をつけるんだからね。あッしも雪で死んだに不足はねえが、それにしたッてなにも人が殺したとは限らねえんだ。自分で雪にはまッたッてけッこう死ねるんだからね。氣に入らねえのはそれですよ。えらさうなことを言ッて、もしも手前がすき好んで凍え死んだのだッたらどうなさるんですかえ』

『しやうのねえ奴だな。そんなことが分らなくてどうするんだ。ひと目見りやちやんと分るぢや

ねえかよ、自分ではまツて死んだものが、こんな路ばたにころがツてゐるかい。加賀さまの雪室は、たしか七ツおありの筈だ。ゆうべ運び入れたどさくさまぎれに、そのどれかへこかしこんでおいて、夜中か明け方か、凍え死んだのを見すましてから、そしらぬ顔でここへ引ツころがしておいたに決ツてゐるんだ。そんなことより下手人の詮議が大事だ。そツちへ引ツこんでゐな』

知りたいのは先づその素性です。呆然として佇んでゐる加賀家の若侍のそばへ歩みよると、なにか手蔓を引き出さうといふやうにやんはりと問ひかけました。

『なにもかも正直におあかし下されませよ。今朝ほど八丁堀へわざわざおいでの事と言ひ、かうして今ここへお立會ひの御容子といひ、特別になにか御心配のやうでござりまするが、貴殿、この御仁とお知り合ひでござりまするか』

『同役ぢや』

『なるほど、同じ加賀家の御同役でござりまするか。このお氣の毒な最期をとげたお方は何といふお名前でござります』

『松坂甚吾とお言ひぢや』

『お役は何でござります』

『奥祐筆ぢや』

『奥祐筆！……。なるほど、さうでござりましたか』

名人の胸に、ピンとよみがへッたのは、朝ほどのあの繪圖面の字のうますぎたことでした。どうやら本筋の匂ひがしかけて來たのです。

『なるほど御祐筆とあッては、御兄弟でござりまするか、おつれ合ひでござりまするか知りませぬが、お身よりの御婦人も字がうまいのは當りまへでござりませう。あの繪圖面をお書きになつた御婦人は、この松坂樣の何に當るお方でござります』

『あの書き手を女とお看破りか！』

『看破ッたればこそお尋ねするのでござります。お妹御でござりまするか』

『いいや御内儀ぢや』

『ほゝう、御家内でござりまするか。お年は？』

『若うござる』

『いくつ位でござります』

『二十三四の筈ぢや』

『お顔は？』

『上の部ぢや』

『なに、上の部！――なるほど、美人でございまするか。美人とすると――』

事、穏やかでない。いくつかの不審が急激に湧きあがりました。

第一、夫がここで變死をしてゐるといふのに、妻なる人がちらりとも顔すら見せないことが不思議です。

妻さへ顔を見せないといふのに、目の前のこの若侍が、只の同役といふだけでかくのごとくに力瘤を入れてゐるのが不思議です。

第三に不審は、いまだに加賀家家中のものが、ひとりも顔をみせないことでした。これだけ騒いでゐるのに、しかも變死を遂げてゐるのは奥仕への祐筆であるといふのに、その加賀家が知らぬ顔でゐるといふ法はない。俄然、名人の目は光ッて來たのです。

『雪が口を利かねえと思ッたら大違ひだ。――その御内室に會ひたうございまするが、お住ひはどちらでございます』

『住ひはついこの道向うのあの外お長屋ぢやが、會ふならばわざわざお出かけなさるには及ば

ぬ。さきほどから人ごみに隠れて、その邊においでの筈ぢや』

『なに、おいでございまするか。それはなにより、どこでございます。どのお方がさうでございます』

『どのお方もこのお方もない、手前と一緒に參ッて、つい今しがたまでその邊に隠れてゐた筈ぢやが――はてな。をりませぬな。おこよどの！　おこよどの！……どこへお行きぢや。おこよどの！』

おこよといふのがその名とみえて、人ごみを掻き分け乍ら、しきりにあちらこちらを探してゐたその若侍が、突然あッとけたたましい叫び聲を放ッて、どたりとそこへ打ち倒れました。

矢です。

矢です。

どこから飛んで來たのか、ブッりとその咽喉に刺さッたのです。

『畜生ッ。さあいけねえ！　さあ大變だ！　まごまごしちや駄目ですよ！　旦那！　そッちぢやねえ、こッちですよ！　いいえ、あッちですよ！』

言ふ傳六が悉く肝をつぶして、あちらにまごまご、こちらにまごまご、ひとりでわめき乍ら

駈け廻りました。そのあとから群集もうろうろと走り廻ッてさながらに蜂の巣をつゝいたやうな騒ぎでした。

しかし、むッつりの名人ひとりは、にやりにやりと笑つてゐるのです。

『くやしいね。なにがをかしいんですかよ！　笑ひどッちやねえですよ！　矢が來たんだ。矢が！　大將咽喉から血あぶくを出してゐるんですよ！』

『もう死んだかい』

『なにを落ちついてゐるんですかよ！　折角の手蔓を玉なしにしちやなるめえと思ふからこそ、慌ててゐるんぢやねえですか。のそのそしてゐりや死んで了ふんですよ！』

『ほゝう。なるほど、もうあの世へ行きかけてゐるな。しやうがねえ。死なしておくさ』

實に言ひやうもなく落ちついてゐるのです。のッそり近よると騒ぐ色もなくぢいッと目を光らして、その矢の方向を見しらべました。

左りからではない。

右から來て刺さッてゐるのです。左りは加賀家の屋敷だが、その右は、道一ッ隔てて、すぐに引祥寺の塀つゞきでした。

塀を越して、方角を辿ッて、のびあがり乍ら寺の境内を見しらべると、ある、ある、距離は丁度射頃の十二三間、上から狙ッて射掛けるには恰好の高い鐘楼が見えるのです。

『よし、もう當りはついた。騒ぐにや及ばねえ。死骸にも用はねえ。若侍も綽切れたやうだから、佛たちはふたりともおまへらが運んでいッて預ッておきな。加賀家から何か苦情があるかも知れねえが、金輪際渡しちやならねえぜ。いいかい。忘れるなよ』

居合はした自身番の小者たちへ命じておくと、その場に鐘楼詮議を始めるだらうと思ひのほかに、くるりと向きかへり乍ら、加賀家外お長屋を目ざして、さッさと急ぎました。

三

『腹が立つね。どこへ行くんですかよ！　どこへ！　鐘楼はどうするんです！　矢はどうするんです』

型のごとくに忽ちお株を初めたのは、傳六屋の鳴り男です。

『物を仰有い！　物を！……。くやしいね。今さらお長屋なんぞへいッたッて無駄骨折りなんだ。矢が來たんですよ！　矢が！　質屋や吹き矢の矢とは矢が違ふんだ。ぷつりと刺さッて血が出た

からには、ど奴かあの鐘楼の上から狙ッて射かけたに違げえねんですよ。早えところあッちを詮議した方が近道ぢやねえですかよ』

『うるせえな。默ッてろい』

やッ　く言ッたのを、ガンと一發見事でした。

『いちいちと世話のやける奴だ。むッつりの右門が無駄石を打つかよ。これが桂馬懸りの搦手詮議、おいらが十八番の指し手ぢやねえか。考へてみろい。おこよどのとか言ふ御新造がゐたといふのに雲がくれしたんだ。しめたと思ッて探してゐたら、ぷつりと天から矢が降ッて來たんぢやねえかよ。字もうめえが、狙ひ矢も人にひけをとらねえ飛んだ巴板額もゐねえとは限らねえんだ。右が臭いと思はば左りを洗ふべし――むッつり右門極めつきの奥の手だよ』

『ちげえねえ。うれしいことになりやがッたね。事がさうおいでなさると、傳六屋の鳴り方も音いろが違ッてくるんだ。蟹穴、狸穴、狐穴、穴さがしと來るとあッしがまた自慢なんだからね。パンパンと忽ち吳ぎつけてめえりますからお待ちなさいよ……』

いッたかと思ふと、傳六自慢の一ッ藝、能書に嘘はない。またたくひまに、あの奥祐筆松坂甚吾のお小屋を見つけたと見えて、左り並びの三軒目の前から、しきりと手をふりました。

『をりさうか』

『ゐるんですよ。年も丁度二十三四、まさにまさしく別嬪の女ですよ。ほらほら、あの障子に寫ッてゐる影がさうです』

なるほど、玄關わきから小庭をすかしてみると、日あたりの緣側の障子に、なまめいた女の影法師が見えるのです。

しかし、それにしては屋のうちの靜まりすぎてゐるのが少し變でした。とにも角にも、この家のあるじが變死を遂げたといふのに、聲一ッ、話聲一ッきこえないばかりか、人の足音、物の音もひッそり絶えてさながら死人の家のやうでした。

『少々をかしいな。こいつ、ちッと難物かも知れねえぞ……』

庭先から這入ッて行くと、靜かに上ッて、するすると音もなく障子をあけました。

同時です。佇ずんでゐた影法師が、ぎよッとなッてふり返へりました。

しかしその顏、その色、――血の氣は一ッもないのです。まるで死人のやうに靑いのです。ばかりか、全身に恐怖のいろを現はし乍ら、ぶるぶるとふるへてゐるのです。

じろり、じろりと、暫らく女の姿を見眺めてゐましたが、意外な眼です、ずばりと思ひもよら

ぬ聲が名人の口から放たれました。

『そなた、女中だな！』

『……』

『返事をせい！　返事を！　口はないのか！』

だが、默ッてぶるぶるとふるへてゐるばかりでした。

『啞か！』

『……』

『啞かと言ッてきいてゐるんだ。耳が遠いのか！』

いいえ、といふやうに首をふると、不思議です。恐ろしいものをでも敎へるやうに、默ッて女がそこの小机の上を指さしました。

歩みよッてのぞいてみると、謎のやうに紙片が一枚ぽつねんとのせてあるのです。

しかもそれには、容易ならぬ文字が見えました。

『今さらとやかくと愚痴は申すまじく候。夫を恥かしめ候罪、思へば空おそろしく、お詫びの致しやうも無之候間、せめてもの罪ほろぼしに、わたくしことも今より夫のおあとを追ひまゐらすべくそろ。萬事はあの世へ參り、亡き甚吾樣にぢきぢきお詫びいたすべく候まゝ、このうへわが罪の折檻は無用に御座候。あとあとのことは宜敷。取急ぎ候ため、亂筆の儀は御ゆるし下され度候。――こよ』

宛名はない。

しかしまさしく遺書です。

わたくしことも今より夫のおあとを追ひまゐらすべく候としてあるのです。萬事はあの世へ參り、ぢきぢきにお詫びいたすべく候ともしてあるのです。そのうへ、わが罪の折檻は無用に御座候といふ文字さへ見えました。

どう考へても妻女のおこよが、何の罪か自分の罪を恐れ恥ぢて、自らいのちをちゞめた書き置としか思へぬ紙片なのです。

『なるほど、さうか』

ふりかへると、いまだに青ざめ乍ら打ちふるへてゐる女中に問ひかけました。

『そなた、この書き置きにおどろいて、物も言へなかッたんだな。え？　さうだらう。違ふかい』

『そ、そ、さうでござります……』

『これをみると、もうとうに死んでをる筈ぢやが、この家のどこかに死體があるか』

『いゝえ、うちには影も形ちも見えませぬ。この書き置を殘して、どこかへ家出なさいましたゆゑ、びツくりしてゐたところなのでござります』

『さうか。死出の旅に家出したといふか。出かけたはいつ頃だ』

『ほんの今しがたでござります』

『出かけるところを見てをッたか』

『いいえ、それが不思議でござります。こんなことになりましたら、もう申しあげても差支へないでありませうが、うちの旦那さまが、あの表で氣味のわるい死に方をなさいましたゆゑ、びツくりいたしまして、わたくしも驚き出しましたら、驚いではならぬ、出てきてもならぬ、いいと言ふまで女中部屋に這入ッてをれと申されまして、大變お叱りになッたのでござりました。それゆゑ、お言葉通り、あちらの部屋に閉ぢこもッてふるへてをりましたところ、どこかへお出ましなさッた御容子でござりましたが、暫く經ッてまたお歸りになりましたかと思ふと、急に家の中がしいんとなりましたゆゑ、不審に思ひまして、怕々と今のぞきに參りましたら、このお書き置いち枚があるきりでいつのまにどこへお出かけなさいましたものやら、もうお姿がなくなッてゐたのでござります』

實に不思議なことばかりでした。

何一ッ謎の底が割れぬうちに、次から次へと絶えまなく奇怪事が重なッたのです。詮議の手蔓もまた、これならばと思ッて手ぐらうとした一方から、ぷつりぷつりと切れて了ッたのでした。

矢を受けて死んだあの若侍もさうです。洗ッていッたら、せめてその絲口位なりとも、雪で變死を遂げたあの松坂甚吾の祕密が分るだらうと思ッたのに、ぷつりと矢が降ッて來て、すべてを闇から闇へ葬ッて了ッたのです。それならば妻女のおこよをと思ッて洗ひに來たら、その女もまたこの始末でした。しかも書置を信ずるならば、すでにもうこの世の人ではなくなッてゐるのです。

名人は、默々と頤をなでなで、ぢいつと考へ込みました。

手のつけどころがない。かゝりどころがない。まるで絲口がないのです。手蔓の端もないので

す。しかも殘ツてゐる事實は、悉くが疑問、悉くが謎ばかりなのでした。

考へやうによツては、同役だといふあの矢を受けた若侍が松坂甚吾を雪で燒いた下手人とも考へられるのです。下手人なればこそ、あんなに目いろを替へて、力瘤を入れたとも思はれるのでした。

しかし、それにしては矢を射かけられたのが不思議です。矢で狙はれたといふ事實だけを中心にして考へて行くと、生かしておいてはならぬために、口を割られては不都合なために、思ひもよらぬ本當の下手人が、事のあばかれぬさきに逸早く鐘楼の上から、射止めたとも考へられるのです。射とめたその下手人は誰であるか、――疑ツていッたら、死を急いだ妻女のおこよとも思はれるのでした。殊に紙片に見える罪ほろぼし云々といふ文字が疑はしいのです。夫を恥かしめ候こと空おそろしく、とあるところを見ると、或はおこよと、矢を射かけられたあの同役の若侍とが、夫の目を忍ぶ仲にでもなッてをッて、その不義を押し隱すために、夫を同役のあの若侍に殺めさせ、殺めたその若侍をまたおこよが射殺し、すべてを闇から闇へ葬ッておいて、すべての祕密を包み乍らこの遺書通り、死を急いだとも考へらるのでした。

『參ッたね。桂馬はあるが打ちどころがねえといふ奴だ。え？　旦那、違ひますかい』

そろそろと始めたのは鳴り男です。

『正月早々、旦那を馬鹿にしたくはねえんだが、あんまり威張つた口を利くもんぢやねえんですよ。さッき何とか仰有いましたね。搦手詮議がどうのかうの、桂馬掛りが十八番のと大層もなく威張ッたお口をお利きのやうでしたが、自慢なら自慢で早く王手をすりやいいんだ。王手をね』

『……』

『くやしいね。恥かしいなら恥かしいと、はつきり、仰有りやいいんだ。てれかくしに默らなくともいいんですよ。第一將棋が桂馬ばかりで、指せると思ッていらッしやるのが物の間違ひなんだ。金銀飛車角、香に歩、あッしなんぞは只の歩かも知れねえが、歩だッてけッこう王手は出來るんですよ。立派な王手がね。え？　旦那！　聞えねえんですかよ！』

やかましく言ふのをきゝ流し乍ら、なにか手がかりはないかと、机の上の書き置を今いち度見しらべました。

しかし、書き手はまさしく女、手跡もまた見事な文字といふだけで、なにも手蔓となるものはないのです。机のまはり、床の間、違ひ棚、殘らず見廻したが、その違ひ棚にそれを使ッて書い

たらしい半紙と硯があるきりで、何一ツ不審と思はれる品はないのでした。

『あやまツたね。仕方がねえや、おまへさん歩をお持ちだといふから、代ツて王子をして貰ふかね……』

呟き乍ら、じろりじろりと、なほ丹念にあちらこちら見廻してゐたが、ふとそのとき氣がつくと、いまだに打ちふるへ乍ら部屋の隅に佇ずんでゐた女中の右手の指先に、墨がついてゐるのです。腕の腹にも、着物の袂にもまさしく墨の汚點が見えるのです。

不意でした。

何思ツたか、突然、にやりと笑ひ乍ら違ひ棚の上の硯と紙を持ち出すと、不思議なことを女中に命じました。

『これへ名前を書け』

『……！』

『なにをふるへてゐるんだ。急にそんなに眞ッ青にならんでもいい。書けといッたら早く名を書け』

『か、か、書きます。書けと仰有れば書きますが、名と申しますと？……』

『あんたの名前さ、それから生れたところ、いつ當家へ奉公に來たか、それまではどこで何をしてゐたか。詳しく書きな』

『……！』

『なぜ書かねえんだよ！　八丁堀のむッつり右門が言ひつけだ。書けといッたら早く書きな』

じろりと鋭く睨みすゑた名人の目を、恐れさけるやうにし乍らそこへ坐ると、ふるへふるへ筆をとりあげました。

四

『わたくし、名はしげ代と申します。生れは、越後新發田でございます。こちら様へ御奉公に上ッたのはきのふや今日ではありませぬ。わたくし、十三歳のときからでございます。と申しましたら御不審でございませうが、當家、御主人松坂甚吾様は御養子でございまして、奥様おこよ様の御父君松坂兵衛様と仰有る方が、國元新發田の溝口藩に、やはり御祐筆として長らく御仕へでございましたゆゑ、わたくしも字のお稽古かたがた御奉公に上ッてゐたのでございまするが、をととし、御先代兵衛様、

お亡なり遊ばすと一緒に、どうしたことやら御養子の甚吾様が御自分から國元溝口藩を御浪人遊ばされましてこの江戸へ參り、去年、夏より、當加賀家へやはり御祐筆としてお仕官なさることになりましたゆゑ、わたくしも國元から呼び寄せられまして、またまた御奉公することになッたのでございます。

嘘僞りはありませぬ。何かわたくしめをお疑ひの御容子でございまするが、わたくしの身に何一つうしろ暗いことはございませぬ。これでお許し下さらば仕合せにございます』

素性の意外は兎に角として、すらすらと書き流した字のうまさ。實に見事です。

じろりじろりと目を光らし乍ら、今書いたその文字と、書置の字とを見比べてゐましたが、ふふんといふやうに白く笑ふとやんはりあびせました。

『爭はれないものさ。似てゐるね』

『な、なにがでございます』

『同じ人間が書いたものは、どうごまかさうとしたッて似てゐるといふことよ。今書いた字とその書置の字とはそッくりぢやねえか』

げえッ、といふやうに青さめて、矢庭にしげ代と名乘ッたその女中が、二枚の紙をわしづかみ

にし乍ら逃げ出さうとしたのを、

『神妙にしろい。おいらを誰だと思ッてるんだ』

ぴたりと抑へて坐らせると、たゝみかけた啖呵もまた急所を忍ぐりました。

『慈悲をかけねえッて、いふわけぢやねえ。出やう次第によッてはいくらでも女にやさしくなるおいらなんだ。むッつりの右門が無駄石を打つかい。べらぼうめ。おまへのその手の墨は何だ。袖の墨は何だ。こいつめ、僞せの書置を書きやがッたなと睨んだればこそ、おまへの字を知りたくてわざわざ一筆、物さしたんだ。似たりや似たり、瓜二ッといふのはこいつのことだ。兩方の字のそッくりなのが論より證據だ。この書置もおまへが書いたんだらう。どうだ、違ふか』

『さうでございましたか。やッぱり、やッぱりそのためでございましたか。不意に名をかけと仰有いましたゆゑ、もしやわたしの字をおしらべではあるまいかと、書き乍らもひやひやしてをりましたんですが、恐れ入りました。いかにもこの書置は僞せものでございます。書き手も仰有る通り、このわたくしに相違ございませぬが――』

『ございませんが、何だといふんだ』

『わたくしがすき好んで書いたのではございませぬ。人に脅かされまして、書かねば殺すぞと人

に脅されまして、いやいや乍ら書いたのでございます』

『へへえ、急に空模様が變ッて來やがッたね。嘘ぢやあるめえな』

『今さら何の嘘僞りを申しませう。あの方に殺されたらと、それがおそろしくて、お隱し申してゐたんでございまするが、もうもうなにもかも白狀いたします。奥さまが死出の旅路にお出かけなさッたなぞとは眞ッ赤な僞り、その奥さまは人に浚はれたんでございます。浚ッておいて、罪をかくすためにその方がわたくしを脅しつけ、このやうな僞せの書置を書かせたのでございます』

『誰だ、あの矢で殺された若侍か』

『いいえ、あの方こそ本當にお可哀さうでございます。同役といふだけでいろいろ御心配なさいましたのにあんなことになりまして、さぞ御無念でございませう。浚ッた人は、わたしを脅しつけた人は、大口三郎といふお方でございます』

『どこの奴だ』

『元は同じ溝口藩の御祐筆、うちの御主人樣とは御相弟子、御先代松坂兵衛樣の御門人でございます』

『今浪人か！』

『いいえ、やはり當加賀家へ御仕官なさいまして、只今は御祐筆頭でございます』

『なに！　祐筆頭！　そろそろ焦げ臭くなッて來やがッたな。獨り身か！』

『いいえ、奥さまもお子樣もおほぜいございます』

『それだのに、何だとて人の奥方を浚ッたんだ』

『と存じまして、わたくしも實はいぶかしく思うてゐるのでございます。立派な奥さまがございましたら、ふたりも奥樣はいらない筈でございますのに、どうしてあんな手籠同樣なことをなさいまして浚ッておいでなされましたやら、旦那さまの變死だけでも氣味がわるいのに、折も折、氣に入らないことをなさるお方でございます』

『どこへ浚ッていッたか分らねえか』

『多分！——』

『多分どこだ』

『日頃から、特別になにやらお親しさうでございますゆゑ、この裏側のお長屋の依田重三郎樣のお宅ではないかと思はれますのでございます』

『何をやる奴だ。やッぱり祐筆か』

『いいえ、依田流弓道の御師範役でござります』

『なにッ。弓の師範！　さうか！　たうとう本匂ひがして來やがッたな。――ねえ、兄哥』

『へ？……』

『とぼけた返事をするない。桂馬懸りの詰手といふのはかういふ風に打つんだ。氣をつけろい』

『左様でございますかね』

『なにが左様でございますかだ。十手を用意しな！　十手を！　まごまごしてゐたら、依田流の狙ひ矢でやられるといふんだよ。怕かッたら小さくなッてついて來な』

謎から謎へつゞいてゐた雲の上に、突如として一道の光明がさして來たのです。時を移さず名人主從は、教へられた弓道師範依田重三郎の住居を目ざしました。

五

しかし、すぐに押し入るやうな右門ではない。

すべての祕密を握つてゐる依田重三郎は、兎も角も加賀百萬石お抱への弓道師範役なのです。

うッかり乘りこんでいッたら、加賀百萬を笠に着て、逆ねぢを喰はせるかも知れないのです。一ツにはまた弓そのものにも油斷がならないのでした。よしや身には、草香流、鍛正流、江戸御免の武器があつたにしても、萬に一、ぶつりとやられたら、張り子や泥細工の人間ではない、ばかりか、傳六といふ專ら手數のかゝる男が、すでにもう足なぞをこまかくふるはせて、うしろにまつはりついてゐるのです。

『茶にも裏千家といふのがあるんだ。おいらも裏右門流に出かけるかね。聲を出すなよ。いゝかい。かういふ風に廻つて、かういふ風に來るんだ。ついて來な……』

そこの塀つゞきの境ひから横へ廻つて、くゞりを開けると、忍びやかに裏庭へ押し入りました。

さすがに弓道師範の住居です。廣くとつた庭には、稽古弓の矢場がずッと奥までつゞいて、そのこちらに車井戸、井戸に隣つて物干し場――ひよいと目を向けると、小春日のあたゝかい陽ざしを浴びて、ひらひらと舞つてゐる幾枚かの干し物が見えました。

實に目が早いのです。

『へへえ。弓の大將、鰥だな』

『馬鹿言ひなさんな。ヤモメと言や獨り者に極つてるんだ。ヤモメに匂ひがあるぢやあるめえし、見もしねえうちから、人のうちのことが分つてたまりますかよ』

『ところがおいらの鼻は、匂ひのねえその鰥の匂ひまでが分るからおツかねえぢやねえかよ。そこにひらひらやつてゐる干し物を、ようみろい、稽古着、下襦袢、どれもこれも男物ばかりで、女物は何一ツ見えんぢやねえか。下男がひとり、依田の大將が一匹、人の數までがちやんと分るよ。そツちの法被は下男のやつだ。こツちの刺し子は依田の稽古着だ。いはゞおまへとおいらのやうなもんさ。――そら！　そら！　言ふうちに變な聲がきこえるぢやねえか。ヤモメばかりの住ひに珍らしい女の聲だ、ぢツときいて見な』

言葉は分らなかつたが、何か癇高に泣き叫んでゐるやうな女の聲が、切れ切れにふたりの耳を刺したのです。

『さあ十手だ。どたばたしねえでついて來なよ！』

同時に、つかつかとそこのお勝手口から押し入りました。

『だ、だ、誰だ、誰だ。變なところから默ツて這入りやがつてどこの奴だ』

果然、下男と覺しき若い奴が飛び出して來て武者ぶりつかうとしたのを、對手になるやうな名人ではない。

『おまへなんざ役不足だ。用のすむまでゆツくり涼んでゐろい』

だツと、あツさり草香の當て身を嚙まして寢かしておくと、聲をたよりに奥座敷を目ざしました。

ゐるのです。

ゐるのです。

今まで何か不埒至極な責め折檻でもされてゐたとみえて、髪はくづれ、裾のあたりもあらはに紊れ乍ら、部屋の隅の壁ぎはに、必死と身を寄せて、美しい蟲のやうに泣き伏してゐる女こそ、まさしくあのおこよに違ひないのでした。

そのこちらにひとり、床を背にしてひとり。――どツかりと坐つてゐる身體の節々に、武藝者らしい筋骨の鍛えが見えるところを見ると、そやつこそ、まぎれもなく弓術師範依田重三郎に相違ないのです。こちらの白ツぽい男は、言ずと知れた祐筆頭大口三郎でした。

ぎよツとなつたやうに、そのふたりがふり向いて身構へたのを、ずいと這入つて行くと、靜かな聲でした。

『よからぬことをおやりぢやな』

『なにッ。どこの青僧だ』

『知らねえのかい。おいらがむッつりの何とかいふ名物男さ、覺えておきな』

言ふか言はないかの刹那です。

パッと疊を蹴ッて、身を起したかと思ふと、依田の重三郎、さすがに身のさばきあざやかでした。

猿臂を伸ばしてうしろの床の間の飾り弓を手にとる、弦を張る、一瞬の間に矢を番へると、

『問答無益ぢや。うぬが來たとあッてはこれがよからう！　受けてみろッ』

叫んだのと一緒に、矢さばき弓勢もまた見事、名人の咽喉首狙ッて、きりきりと引しぼりました。

危ふし！

まさに一箭、はッしと射放たれたかと見えた刹那、むッつりの名人また、身のさばき見事です。つうつうと身を走らせて、依田の重三郎が射構へた右前深く、さッと這入りました。と見てか重三郎がくるりとねぢ向き乍ら構へ直さうとしたのを、また右へ、焦つて向き直り乍らまた射構

へようとしたのを、また右へ、向けば右へ構へれば右へ、右へ右へと避けては這入る身の輕さ、足の早さ、實にあざやかでした

まことやこれこそ劍の奥義、拔きこそしないが、弓に對ッて劍を得物に立ち向ふには、その右前、右前と這入るのが奥義中の奥義でした。左へ立ッたり、左へ廻ッてゐたら、左り手と書いて弓手と讀ませる位です。避けるひま、防ぐひまもないうちに射放たれるのです。さすがはむッつりの名人、劍の道、武道の奥義、弓矢の道もまた名人でした。

つつう、つつうと矢面を避け乍ら、機を見て一瞬、パッと大きく身を泳がして、重三郎の右脇深くへ飛び込んだかとみるまに、いい音色です。ぽかりとひと突き、草香の當て身がその脾腹へ這入りました。

『笑はしやがらあ。百萬石お抱へ、依田流の弓術が呆れるよ。お膝元育ちの八丁堀衆は、技がお違ひ遊ばすんだ。大口の三郎おめえも大口あいてかゝッて來るか！』

『うぬ！　か、か、掛らずにおくものかい！』

猿のやうに齒を剝いて、祐筆頭大口三郎が拔いてかゝらうとしたのを、手もない、只のひとひねりです。

『ふさけるねえ、細筆一本でおまんまを稼ぐ祐筆の痩せ腕が、お江戸自慢のおいらの對手になれるけえ。おとなしくしてをりな』

ぎゆうと逆ねぢにその利き腕をねぢあげると、ズバリと斬りさげたやうな啖呵が天降りました。

『うすみッともねえ眞似をするにも程があらあ。そんなに目玉を白黑させずとも、うぬの小細工の黑い白いはもうついてゐるんだ。痛い思ひをしたくなけりや素直にすッぱり泥を吐きな』

『いいえ、あの、ありがたうございました。おかげさまで危ふいところをのがれました。その白い黑いはこのわたくしが申します』

おろおろと泣き喜び乍ら、まろび出るやうにして言つたのは松坂甚吾の妻女おこよです。

『只今、このわたくしを前に据ゑておいて、自慢たらたらとおふたりで申されましたゆゑ、なにもかも分りましてございます。やはり、わたくしたち、夫の甚吾とふたりが疑つた通りでございました。と申しただけでは何のことやらお分りではございますまいが、そちらの大口三郎さまは言ふも身の毛のよだつ人非人でございます。忘れもせぬ二年前、父が他界いたしますと一緒に、生前何より大切にして、父が祕藏してをりました子持ち硯といふ名の硯が紛失したのでございます。そこの床の間にありまする小さな桐箱の中がその硯でございますが、石は唐の龍尾石、稀代な名品でございますばかりか、不思議な言ひ傳へがございまして、女のわたくしが斯樣なことをあからさまに申しあげますのは心恥しうございますが、子のない家にその硯を置けば、必ず子寶が得られますとやらいふ言ひ傳へに因みまして、いつのまにか子持ち硯といふ名がついたとか申すことでございます。それゆゑ父も殊のほか大切にいたしまして、人にも見せないほどに祕藏してをりましたところ――』

『大口の三郎が浚つて逃げたと申されるか』

『いいえ、初めは誰が盜んだものやら、一向に分りませんだが、紛失すると一緒に大口樣がふいッと國元から姿を消しましたゆゑ、はてをかしなこともあるものぢやと、不審に思つてをりましたところ、人の噂に、間もなく當加賀家へ祐筆頭としてお仕官なさいましたときゝましたゆゑ變死を遂げた夫共々、わたくしたちも國を離れて、つてを求め、同じこの加賀家に仕へまして、内々探つてゐたのでございます。ところがやうやく二三日前になつて、その證據があがり、あまつさへ大切な硯はこの依田樣のところへ、祐筆頭に取りなして貰つたお禮代りの進物として贈られてゐるといふことが分りましたゆゑ、どうぞして取り返へさうと、夫共々心を碎いてをりまし

たところ、實に大口様は人外なお方でござります。その夫をあらうことか、あるまいことか――』

『よし、それで分りました。アバかれては身は破滅。いッそ毒食はば皿まで、事の露見しないうちに、闇から闇へ葬らうと、依田の重三郎に力を借りて、あの通り雪で焼き殺したと言ふのでございまするな』

『ではないかと存じまして、今朝早く變死を遂げてをりましたのを知ると一緒に、あの繪圖面をわたくしが書きしたためましてあの不憫な死に様をなさいましたお方に、あなた様のところへ飛んでいッて頂いたのでございます。早速にお出役下さいましたゆゑ、もう大丈夫と心ひそかに喜んでをりましたら、依田様も言ひやうのない人非人でございます。祕密を知られてはならぬと、あの鐘樓の上から恐ろしい矢を射かけたのでございます。そればかりかふたりで諜し合はせて、このわたくしをこんなところへ手籠同様に押しこめ、妻になれの、肌を許せのと、けがらはしいことばッかり、今まで責め虐んでゐたのでございます。わたくしには何から何までの御恩人、只もううれしくてあなた様のお顏も見ることが出來ませぬ。お察し下されませ』

言ふまも悲しみ喜び、いちどきにこみあげて來たとみえておこよはよろめき乍ら床の間へ近づくと子持ち硯の桐箱を抱きすくめるやうに取りあげて、おろおろと泣きつゞけました。

『畜生めッ。これで傳六様も早腰を拔かさずに濟んだといふもんだ。これからが忙しいんだ。野郎共は細にするんでせうね』

『決ッてらあ、ふたりとも並べてつないで引ッ立てな！』

立たうとした處へ、不意に庭先へ、すうと人影が浮きあがりました。うしろに若侍をふたり、隨へて、眼のくばり、體のこなし、自から貫祿品位の見える老武家です。ずいと靜かに、名人右門の方へ歩みよると、重々しく呼びかけました。

『いろいろとお手數御苦勞でござつた。不埒なその兩名、手前にお渡し下さらぬか』

『あなた様は！』

『なにも聞いて下さるな。名も名乘りたうはない。當加賀家に仕へてをる者ぢや。さればこそ、加賀家の面目思うて、この一條、世にも知らさずに葬りたいのぢや。家臣の者が顏を見せなんだのもそれがため、お渡し下さらば手前必ずおこよどのに力を添へて、夫の仇討たせませう。いかがでござる。御不承か』

言ふ言葉のはしはじ、名は名乘らなかつたが、まさしく加賀家のお重役です。名人の顏に會心げな笑みがのぼりました。

『なるほど、筋の通つたお言葉、しかと分りました。百萬石の御家名に傷がついては、一藩を預るお方としてさぞや御心痛でござりませう。御所望ならばお渡しする段ではムりませぬ』

『忝けない。――すぐさまその兩名ひッ立てゝ、仇討ちの用意させい！　おこよどのも參られよ』

あい、とばかりに、おこよは泣き喜び乍ら、子持ち硯をしつかと抱へて、繩つきのふたりのあとを追ひました。

『うれしいことになりやがつたね』

見眺めて傳六がくすりとやりました。

『でも、ちょッとあッしや氣になることがあるんだがね』

『なんだよ』

『あの美しいおこよさん、うれしさうに子持ち硯を抱いていッたはいゝが、今日から赤い信女のおひとり者になるんだ。どんな佛樣から子寶を授かるかと思ふと、氣が揉めるんですよ』

しかし、名人はにこりともくすりともせずに、默々ともう五六間先でした。

血の降る部屋

一

その第三十七番手柄です。

二月の末でした。あさごとにぬくみがまして江戸も二月の聲をきくと、もう春が近い。

初午に雛市、梅見に天神祭、二月の行事といへばまづこの四ツです。

初午は言ふまでもなう稲荷まつり、雛市は雛の市、梅見は梅見、天神祭は二十五日の菅公祭、湯島、龜戸、天神の名のつくほどのところは無論のことだが、お社でなくとも天神樣に緣のあるところは、この二十五日、それぞれ思ひ〳〵の天神祭をするのが例でした。

寺小屋がさうです。

書道指南所がさうです。

それから私塾。